
桶川市

樂中遺跡

一般国道17号上尾道路新設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

2017

国土交通省 関東地方整備局
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 楽中遺跡遠景（東から）



2 楽中遺跡近景（北東から）

巻頭図版 2



1 縄文時代後期初頭の土器



2 古墳跡出土大刀

序

埼玉県の中央部を南北に縦貫する一般国道17号は、県民生活に欠かすことのできない主要幹線道路の一つです。国土交通省では、その機能を最大限に発揮できるよう、各所で改良工事やバイパス化などを進めています。その一つである上尾道路は、一般国道17号の渋滞緩和、圏央道へのアクセスの利便性を目的として、平成元年に計画され、平成28年にさいたま市西区宮前町から桶川市川田谷までのI期区間全線が開通しました。

上尾道路の建設地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しております。桶川市川田谷に所在する楽中遺跡もその一つです。発掘調査は上尾道路新設事業に伴う事前調査であり、関係機関での協議の結果、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施しました。

発掘調査の結果、縄文時代早期から後期にかけての竪穴住居跡や炉穴、古墳時代前期や後期の竪穴住居跡、土地を区画した中・近世の溝跡などが発見され、川田谷の地に、断続的に集落が営まれていたことがわかりました。

また、横穴式石室をもつ7世紀頃の古墳跡が発見され、石室の中から1振の大刀が出土しました。楽中遺跡の周辺には、県指定史跡の熊野神社古墳をはじめ、荒川を臨むように大小数十基の古墳が点在する川田谷古墳群が知られています。今回の発見は、古墳群の内容に新たな知見を加えるものと評価されます。

本書は、これらの発掘成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所、桶川市教育委員会、並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成29年2月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 塩野谷孝志

例　言

1. 本書は、桶川市大字川田谷に所在する楽中遺跡の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

　　樂中遺跡（No. 15-049）

　　埼玉県桶川市大字川田谷字樂中555番地他
　　平成24年5月24日付け教生文第2-17号

3. 発掘調査は、一般国道17号上尾道路新設工事に伴う事前調査である。調査は埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。
　　発掘作業（平成24年度）

　　「一般国道17号上尾道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」

整理報告書作成事業（平成28年度）

　　「一般国道17号上尾道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の平成28年度契約（整理）」

5. 発掘調査事業は、I-3の組織により実施した。調査は平成24年6月1日から11月30日まで実施し、岩瀬謙・大谷徹・小出輝雄が担当した。

整理・報告書作成作業は平成28年4月1日から12月28日まで実施し、魚水環が担当した。

6. 発掘調査における基準点測量および空中写真撮影は、中央航業株式会社に委託した。

7. 発掘調査時の遺構等の写真撮影は、各担当者が行った。整理作業時の遺物写真撮影は、魚水が行った。

8. 出土品の整理・図版作成は魚水が行い、縄文土器は金子直行・細田勝・上野真由美、土師器は福田聖、古墳跡・石室石材は大谷徹、陶磁器は村山卓、石器は西井幸雄、鍛冶関連遺物は赤熊浩一、金属製品は瀧瀬芳之の協力を得た。

9. 報告書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、他は協力者の助言を受けて魚水が行った。

10. 本書の編集は魚水が行った。

11. 本書にかかる諸資料は、平成29年3月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

12. 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の方々・機関から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）

清水 康守 藤沼 昌泰 桶川市教育委員会

凡 例

1. 本書におけるX・Yの座標は、世界測地系国
土標準平面直角座標第IX系（原点北緯 $36^{\circ} 00' 00''$ 、東経 $139^{\circ} 50' 00''$ ）に基づく座標値を示
す。各挿図に記した方位は、全て座標北を示し
ている。

F-7グリッド北西杭の座標及び標高は、X
 $=-2390.000\text{m}$ 、Y $=-26650.000\text{m}$ （北緯 $35^{\circ} 58' 41''$ 、東経 $139^{\circ} 32' 16''$ ）、標高 16.104m
である。

2. 遺跡におけるグリッドは、前記座標系に基づ
いて設置しているが、 $10\times10\text{m}$ を基本グリッ
ドとしている。

3. グリッドの名称は、いずれも北西杭を基準と
して、南北にアルファベット（A、B、C…）、
東西に算用数字（1、2、3、…）が付されて
いる。呼称は、南北—東西の順となっている。

4. 本書における本文・挿図・表・写真図版に示
す遺構の略号は以下のとおりである。

S J…住居跡 S I…竪穴状遺構

S S…古墳跡 S P…炉穴

S D…溝跡 S K…土壤

S X…不明遺構 P…ピット・柱穴

5. 本書における挿図の縮尺は以下のとおりであ
る。例外は、図中に縮尺とスケールを示した。

遺構図

調査区全体図 1:400

調査区区割図 1:200

遺構平面図・断面図 1:60

遺物出土微細図 1:30

遺物実測図

縄文土器・土師器・須恵器実測図 1:4

縄文土器・土師器・須恵器拓影図 1:3

土製品・陶磁器類実測図 1:3

石器・石製品実測図 2:3 1:3 1:4

金属製品実測図 1:2

6. 遺物のうち、須恵器は断面を黒塗りにした。

7. 遺構断面図に表記した水準数値は、すべて海
抜標高（単位m）を示す。

8. 測量図内の各種網掛け部分表示は以下のとお
りである。

…地山 …硬化面（黒10%）

…焼土（黒20%）

また、土器実測図の中の網掛けは、赤彩の範
囲を示した。

9. 遺物観察表については次のとおりである。

・口径・器高・底径はcm、重さはgを単位とす
る。

・（ ）内の数値は復元推定値を示す。

・〔 〕内の数値は残存高を示す。

・胎土に含まれる鉱物等のうち、肉眼で観察で
きる特徴的なものを記号で示した。

A-雲母 B-片岩 C-角閃石

D-長石 E-石英 F-軽石

G-砂粒子 H-赤色粒子

I-白色粒子 J-白色針状物質

K-黒色粒子 L-その他（シャモット等）

・焼成は、良好・普通・不良の3段階に分けた。

・残存率は、図示した器形に対する割合を%で
示した。

・備考には出土位置・注記No.・生産地・年代
等を記した。

10. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行
の1:50,000（上尾）地形図を編集の上使用した。

11. 色調は、『新版標準土色帖』に従った。

目 次

卷頭図版

序

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1
1.	発掘調査に至る経過	1
2.	発掘調査・報告書作成の経過	2
(1)	発掘調査	2
(2)	整理報告書作成	2
3.	発掘調査・報告書作成の組織	2
II	遺跡の立地と環境	3
1.	地理的環境	3
2.	歴史的環境	4
III	遺跡の概要	7
IV	遺構と遺物	14
1.	旧石器時代の遺物	14
2.	縄文時代の遺構と遺物	14
(1)	住居跡	14
(2)	竪穴状遺構	42
(3)	炉穴	43
(4)	埋甕	44
(5)	土壙	46
(6)	集石土壙	65
(7)	グリッド出土遺物	66
3.	古墳時代の遺構と遺物	81
(1)	住居跡	81
(2)	古墳跡	99
(3)	溝跡	113
(4)	土壙	113
(5)	グリッド出土遺物	114
4.	中・近世の遺構と遺物	116
(1)	溝跡	116
(2)	土壙	125
(3)	不明遺構	137
(4)	炉跡	137
(5)	ピット	138
(6)	グリッド出土遺物	139
V	調査のまとめ	142
1.	調査の成果	142
2.	古墳時代前期の様相について	142
3.	古墳跡について	143
4.	中・近世の土地利用について	144

写真図版

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形図	3	第35図 第20号住居跡	40
第2図 周辺の遺跡	6	第36図 第20号住居跡出土遺物	41
第3図 基本層序	7	第37図 第1号竪穴状遺構・出土遺物	42
第4図 調査区位置図	8	第38図 炉穴群	43
第5図 楽中遺跡全体図	9	第39図 炉穴群出土遺物	44
第6図 楽中遺跡区割り図（1）	10	第40図 第1・2・5号埋甕	44
第7図 楽中遺跡区割り図（2）	11	第41図 第1・2・5号埋甕出土遺物	45
第8図 楽中遺跡区割り図（3）	12	第42図 土壙（1）	47
第9図 楽中遺跡区割り図（4）	13	第43図 土壙（2）	48
第10図 旧石器時代出土遺物	14	第44図 土壙（3）	49
第11図 第3号住居跡	15	第45図 土壙（4）	50
第12図 第3号住居跡出土遺物	16	第46図 土壙（5）	51
第13図 第6号住居跡	17	第47図 土壙（6）	52
第14図 第6号住居跡出土遺物（1）	18	第48図 土壙（7）	53
第15図 第6号住居跡出土遺物（2）	19	第49図 土壙出土遺物（1）	54
第16図 第6号住居跡出土遺物（3）	20	第50図 土壙出土遺物（2）	55
第17図 第6号住居跡出土遺物（4）	21	第51図 土壙出土遺物（3）	56
第18図 第9号住居跡	23	第52図 土壙出土遺物（4）	57
第19図 第9号住居跡出土遺物（1）	24	第53図 土壙出土遺物（5）	58
第20図 第9号住居跡出土遺物（2）	25	第54図 土壙出土遺物（6）	59
第21図 第9号住居跡出土遺物（3）	26	第55図 土壙出土遺物（7）	60
第22図 第9号住居跡出土遺物（4）	27	第56図 土壙出土遺物（8）	61
第23図 第10号住居跡	28	第57図 土壙出土遺物（9）	62
第24図 第10号住居跡出土遺物（1）	29	第58図 第1号集石土壙・出土遺物	65
第25図 第10号住居跡出土遺物（2）	30	第59図 土壙出土小礫重量別分布図	65
第26図 第11号住居跡	31	第60図 グリッド出土遺物（1）	66
第27図 第11号住居跡出土遺物	32	第61図 グリッド出土遺物（2）	67
第28図 第12号住居跡	33	第62図 グリッド出土遺物（3）	68
第29図 第12号住居跡出土遺物	34	第63図 グリッド出土遺物（4）	69
第30図 第16号住居跡（1）	35	第64図 グリッド出土遺物（5）	70
第31図 第16号住居跡（2）	36	第65図 グリッド出土遺物（6）	71
第32図 第16号住居跡出土遺物	37	第66図 グリッド出土遺物（7）	72
第33図 第18号住居跡	38	第67図 グリッド出土遺物（8）	73
第34図 第18号住居跡出土遺物	39	第68図 グリッド出土遺物（9）	75

第69図 グリッド出土遺物（10）	76	第99図 古墳跡出土遺物（1）	111
第70図 グリッド出土遺物（11）	77	第100図 古墳跡出土遺物（2）	112
第71図 グリッド出土遺物（12）	78	第101図 第4号溝跡・第20号土壙	113
第72図 第1号住居跡・出土遺物	81	第102図 第47号土壙	113
第73図 第2号住居跡	82	第103図 グリッド出土遺物	114
第74図 第2号住居跡出土遺物	83	第104図 溝跡断面位置図	116
第75図 第4号住居跡	84	第105図 溝跡（1）	117
第76図 第4号住居跡出土遺物	85	第106図 第1号溝跡出土遺物（1）	118
第77図 第5号住居跡	87	第107図 第1号溝跡出土遺物（2）	119
第78図 第5号住居跡出土遺物	88	第108図 第1号溝跡出土遺物（3）	120
第79図 第7号住居跡・出土遺物	89	第109図 第1号溝跡出土遺物（4）	121
第80図 第8号住居跡・出土遺物	90	第110図 溝跡（2）	123
第81図 第13号住居跡・出土遺物	91	第111図 第6・8・10・11号溝跡出土遺物	
第82図 第14号住居跡・出土遺物	93		123
第83図 第15号住居跡	94	第112図 土壙 近世（1）	125
第84図 第15号住居跡出土遺物	95	第113図 土壙 近世（2）	126
第85図 第17号住居跡	96	第114図 土壙 近世（3）	127
第86図 第17号住居跡出土遺物	97	第115図 第55・64・65・71号土壙出土遺物	
第87図 第19号住居跡	97		128
第88図 第19号住居跡出土遺物	98	第116図 第66号土壙出土遺物（1）	129
第89図 第21号住居跡・出土遺物	98	第117図 第66号土壙出土遺物（2）	130
第90図 古墳跡（1）	100	第118図 第69号土壙出土遺物（1）	132
第91図 古墳跡（2）	101	第119図 第69号土壙出土遺物（2）	133
第92図 古墳跡石室確認状況図	103	第120図 第69号土壙出土遺物（3）	134
第93図 古墳跡石室	105	第121図 第69号土壙出土遺物（4）	135
第94図 古墳跡石室基底石・掘り方（1）		第122図 第1号不明遺構・出土遺物	137
	106	第123図 炉跡	137
第95図 古墳跡石室基底石・掘り方（2）		第124図 グリッド出土遺物（1）	139
	107	第125図 グリッド出土遺物（2）	140
第96図 古墳跡前庭部	108	第126図 グリッド出土遺物（3）	141
第97図 古墳跡遺物出土状況図	109		
第98図 古墳跡石室石材・加工痕拓影図			
	110		

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	6	第14表 第19号住居跡出土遺物観察表	
第2表 土壙一覧表	64		98
第3表 石器・石製品観察表	79・80	第15表 第21号住居跡出土遺物観察表	
第4表 第1号住居跡出土遺物観察表	81		98
第5表 第2号住居跡出土遺物観察表	83	第16表 古墳跡敷石組成表	104
第6表 第4号住居跡出土遺物観察表	85	第17表 古墳跡出土遺物観察表	111
第7表 第5号住居跡出土遺物観察表	88	第18表 グリッド出土遺物観察表	115
第8表 第7号住居跡出土遺物観察表	89	第19表 第1号溝跡出土遺物観察表	122
第9表 第8号住居跡出土遺物観察表	90	第20表 第6・8・10・11号溝跡 出土遺物観察表	124
第10表 第13号住居跡出土遺物観察表		第21表 土壙一覧表	127
	91	第22表 第55・64・65・71号土壙 出土遺物観察表	128
第11表 第14号住居跡出土遺物観察表		第23表 第66号土壙出土遺物観察表	131
	93	第24表 第69号土壙出土遺物観察表	136
第12表 第15号住居跡出土遺物観察表		第25表 ピット一覧表	138
	95	第26表 グリッド出土遺物観察表	141
第13表 第17号住居跡出土遺物観察表			
	97		

図版目次

- 卷頭図版 1 1 楽中遺跡遠景（東から）
2 楽中遺跡近景（北東から）
- 卷頭図版 2 1 繩文時代後期初頭の土器
2 古墳跡出土の大刀
- 図版 1 1 楽中遺跡近景（北東から）
2 調査区全景（北西から）
- 図版 2 1 第3号住居跡（南東から）
2 第3号住居跡炉跡
3 第6号住居跡（南西から）
4 第6号住居跡遺物出土状況
5 第9・10号住居跡（南西から）
6 第9・10号住居跡（南東から）
7 第9号住居跡（南から）
8 第9号住居跡炉跡
- 図版 3 1 第10号住居跡（北から）
2 第10号住居跡炉跡
3 第11号住居跡（南東から）
4 第12号住居跡（南東から）
5 第12号住居跡炉跡
6 第16号住居跡（南西から）
7 第16号住居跡埋甕 1・2
（南東から）
8 第16号住居跡埋甕 1（1）
- 図版 4 1 第16号住居跡埋甕 1（2）
2 第16号住居跡埋甕 2（1）
3 第16号住居跡埋甕 2（2）
4 第16号住居跡炉跡
5 第18号住居跡（北東から）
6 第18号住居跡壁断面
7 第20号住居跡（東から）
8 第1号竪穴状遺構（南東から）
- 図版 5 1 炉穴群（南東から）
2 第1号炉穴（南東から）
3 第1号炉穴遺物出土状況
4 第2号炉穴（南東から）
5 第3号炉穴（南東から）
6 第4号炉穴（南東から）
7 第5号炉穴（南東から）
8 第6号炉穴（南東から）
- 図版 6 1 第1号埋甕（南西から）
2 第1号埋甕半截状況
3 第2号埋甕（北西から）
4 第5号埋甕（南東から）
5 第1号土壙（南東から）
6 第27号土壙（西から）
7 第30号土壙（北西から）
8 第30号土壙遺物出土状況
- 図版 7 1 第32・33号土壙（南東から）
2 第32号土壙遺物出土状況
3 第59号土壙（南東から）
4 第59号土壙遺物出土状況
5 第60号土壙（南東から）
6 第68号土壙（南東から）
7 第75・76号土壙（南から）
8 第77号土壙（東から）
- 図版 8 1 第77号土壙遺物出土状況
2 第78号土壙（南西から）
3 第79号土壙（南西から）
4 第80号土壙（南西から）
5 第82号土壙（西から）
6 第82号土壙遺物出土状況
7 第1号集石土壙検出状況
8 第1号集石土壙（南東から）
- 図版 9 1 第1号住居跡（南東から）
2 第2号住居跡（南東から）
3 第2号住居跡炉跡
4 第4号住居跡（南東から）
5 第4号住居跡貯蔵穴
6 第4号住居跡炉跡
7 第5号住居跡（南東から）

- | | |
|---|---|
| 図版10
1 第5号住居跡カマド内
遺物出土状況
2 第7号住居跡(南から)
3 第8号住居跡(南東から)
4 第8号住居跡炉跡
5 第8号住居跡炭化材等検出状況(1)
6 第8号住居跡炭化材等検出状況(2)
7 第8号住居跡炭化材等検出状況(3)
8 第13号住居跡(北東から) | 8 第5号住居跡カマド跡
7 前室側壁(東面)石組
8 玄室外面(北東面)加工痕 |
| 図版11
1 第13号住居跡炉跡
2 第14号住居跡(南西から)
3 第14号住居跡炉跡
4 第15号住居跡(北東から)
5 第17号住居跡(南西から)
6 第17号住居跡遺物出土状況
7 第19号住居跡(北東から)
8 第21号住居跡
• 古墳跡前庭部(南から) | 図版15
1 古墳跡石室(南から)
図版16
1 石室掘り方(西から)
2 石室掘り方(東から)
3 石室完掘状況(1)
4 石室完掘状況(2)
5 羨道部切石検出状況
6 石室完掘状況(3)
7 玄室西壁切石工具痕
8 玄門切石(西側) |
| 図版12
1 古墳跡全景(南から)
2 石室検出状況
3 石室開口部
4 玄室内切石検出状況(1) | 図版17
1 直刀出土状況(1)(南東から)
2 直刀出土状況(2)
3 第4号溝跡・第20号土壙(南東から)
4 第20号土壙断面
5 第47号土壙(南から) |
| 図版13
1 玄室内切石検出状況(2)
2 前室内切石検出状況(1)
3 前室内切石検出状況(2)
4 閉塞施設検出状況(1)
5 閉塞施設検出状況(2)
6 玄門検出状況
7 玄室内切石除去状況
8 玄室奥壁 | 図版18
1 第1号溝跡(北西から)
2 第1号溝跡(北東から)
3 第2・3号溝跡(南西から)
4 第8・13号溝跡(北東から)
5 第6・9号溝跡(北西から)
6 第7号溝跡(北東から)
7 第7号溝跡土橋
8 第11号溝跡(北西から) |
| 図版14
1 玄室側壁(西面)
2 玄室側壁(東面)
3 玄室側壁(東面)加工痕
4 前室内切石除去状況
5 前室側壁(西面)
6 前室側壁(東面) | 図版19
1 第64号土壙(東から)
2 第66・67号土壙(東から)
3 第69号土壙・第1号溝跡断面
4 第71号土壙(南東から)
5 第1号不明遺構(北東から)
6 第1号不明遺構完掘(北東から)
7 第1号炉跡
8 第2号炉跡 |
| | 図版20
1～4 第6号住居跡出土遺物
5・6 第9号住居跡出土遺物
7 第10号住居跡出土遺物
8・9 第12号住居跡出土遺物
10・11 第16号住居跡出土遺物 |

	12	第1号堅穴状遺構出土遺物	7～18	第66号土壙出土遺物
	13	第1号炉穴出土遺物	図版31	1～13 第66号土壙出土遺物
図版21	1	第1号埋甕出土遺物		14～16 第69号土壙出土遺物
	2	第2号埋甕出土遺物	図版32	1～19 第69号土壙出土遺物
	3	第5号埋甕出土遺物	図版33	1・2 第69号土壙出土遺物
	4	第30号土壙出土遺物		3～16 グリッド出土遺物
	5・6	第32号土壙出土遺物	図版34	1 第3号住居跡出土遺物
	7	第45号土壙出土遺物		2・3 第6号住居跡出土遺物
	8	第54号土壙出土遺物	図版35	1 第6号住居跡出土遺物
	9	第59号土壙出土遺物		2・3 第9号住居跡出土遺物
	10	第60号土壙出土遺物	図版36	1・2 第9号住居跡出土遺物
	11～17	グリッド出土遺物		3 第10号住居跡出土遺物
図版22	1	第1号住居跡出土遺物	図版37	1 第11号住居跡出土遺物
	2～7	第2号住居跡出土遺物		2 第12号住居跡出土遺物
	8～16	第4号住居跡出土遺物		3 第18号住居跡出土遺物
図版23	1～5	第4号住居跡出土遺物	図版38	1 第20号住居跡出土遺物
	6～9	第5号住居跡出土遺物		2 第1号堅穴状遺構出土遺物
	10	第7号住居跡出土遺物		3 第5・6号炉穴出土遺物
	11	第8号住居跡出土遺物	図版39	1 第1・5・6・19号土壙
	12	第13号住居跡出土遺物		出土遺物
図版24	1・2	第13号住居跡出土遺物		2 第12・13・17・22号土壙
	3～7	第14号住居跡出土遺物		出土遺物
	8～10	第15号住居跡出土遺物		3 第21・23・24号土壙出土遺物
	11～18	第17号住居跡出土遺物	図版40	1 第25・30～33・37号土壙
図版25	1	第19・21号住居跡出土遺物		出土遺物
	2・3	古墳跡出土遺物		2 第34・35・39～42・48号土壙
	4～6	グリッド出土遺物		出土遺物
図版26	1～18	第1号溝跡出土遺物		3 第45号土壙出土遺物
図版27	1～17	第1号溝跡出土遺物	図版41	1 第46・52・54号土壙出土遺物
図版28	1～14	第1号溝跡出土遺物		2 第49・50号土壙出土遺物
図版29	1～4	第1号溝跡出土遺物		3 第51・56・57・61・68号土壙
	5～9	第6号溝跡出土遺物		出土遺物
	10～12	第8号溝跡出土遺物	図版42	1 第59号土壙出土遺物
	13	第10号溝跡出土遺物		2 第60・72・77・79号土壙
	14・15	第55号土壙出土遺物		出土遺物
図版30	1～4	第64号土壙出土遺物		3 第75・80号土壙出土遺物
	5・6	第71号土壙出土遺物		

図版43	1	第76・82・83号土壙出土遺物	図版51	1～3	グリッド出土遺物
	2	第1号集石土壙出土遺物	図版52	1	第1・8号溝跡出土遺物
	3	グリッド出土遺物		2	第64・66・69・71号土壙 出土遺物
図版44	1～3	グリッド出土遺物		3	グリッド出土遺物
図版45	1～3	グリッド出土遺物	図版53	1	グリッド出土遺物
図版46	1～3	グリッド出土遺物		2	第1・11号溝跡出土遺物
図版47	1	土製円盤		3	第55・65・71号土壙出土遺物
	2	旧石器出土遺物	図版54	1	第66号土壙出土遺物
	3	第3・10号住居跡出土遺物		2	第69号土壙出土遺物
図版48	1・2	第6号住居跡出土遺物		3	グリッド出土遺物
	3	第9号住居跡出土遺物	図版55	1～20	第69号土壙出土遺物
図版49	1	第9～11・20号住居跡出土遺物	図版56	1	第69号土壙出土遺物
	2	第11・12・18・20号住居跡 出土遺物		2～6	第69号土壙鍛造剥片
	3	第3号土壙出土遺物		7	第1号不明遺構出土錢貨
図版50	1	第5・8号土壙出土遺物			
	2	第13・21・31・32・50・51・60 ・68・76・77号土壙出土遺物			
	3	グリッド出土遺物			

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、『埼玉県5か年計画－安心・成長・自立自尊の埼玉へ－』において「埼玉の活力を高める道路整備」という基本目標を掲げている。こうした中で国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所は、県内において、一般国道17号（上尾道路）建設工事を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課（以下、当課）では、一般国道17号（上尾道路）建設事業に係る埋蔵文化財の保護について、国土交通省と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

本書で報告される箇所については工事計画に先立ち、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所長より平成16年1月26日付け大工第149号において、一般国道17号（上尾道路）建設事業に伴う埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて県教育委員会教育長（以下「県教育長」）あての照会があった。

当課は、平成23年7月27日～29日に試掘調査を実施し、遺構及び遺物を検出した。その結果を受けて平成24年2月24日付け教生文第2222号にて国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所長あて以下の通り回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
集中遺跡 (県遺跡番号 No.15-049)	集落跡	縄文・弥生・古墳	桶川市大字川田谷地内

2 取扱いについて

「発掘調査を要する区域」については、計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施して下さい。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（現在は公益財団法人）と国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所、当課の三者により調査方法、期間、経費等の問題を中心に協議が行われた。その結果、平成24年4月9日から平成25年3月29日までの期間で発掘調査を実施することになった。

文化財保護法第94条による発掘通知は国土交通省関東地方整備局長から平成24年2月28日付け大工第141号で提出された。それに対する埋蔵文化財の保護上必要な勧告は県教育長から平成24年3月15日付け教生文第4-1468号で行われた。

文化財保護法第92条の規定による発掘調査届については財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から県教育長あてに提出された。これに対する発掘調査の指示通知は以下の通りである。

平成24年5月24日付け教生文第2-17号

（生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

楽中遺跡の発掘調査は、一般国道 17 号上尾道路新設工事に先立ち、平成 24 年 6 月 1 日から平成 24 年 11 月 30 日まで実施した。調査面積は 5,030 m²である。

発掘調査は、6 月上旬に事務所設置及び重機による表土堀削を開始した。終了後、遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業を実施した。その後、人力による遺構確認と精査を行った。調査区内からは古墳をはじめ、縄文時代や古墳時代の住居跡、中・近世の溝跡や土壙が検出された。遺構については基準点測量の成果に基づき、順次土層断面図・平面図を作成し、これに併行して写真撮影も行った。また、9 月には遺跡見学会を開催した。10 月 16 日に空中写真撮影を行った。調査終了後、埋め戻しを行い、11 月下旬に事務所を撤去し、発掘調査を終了した。

(2) 整理報告書作成

整理報告書の作成事業は、平成 28 年 4 月 1 日から平成 28 年 12 月 28 日まで実施した。

遺物は水洗・注記の後、直ちに接合・復元を行った。復元を終えた遺物は、順次実測・トレース・採拓を経て、遺構ごとに印刷用の版下を作成した。10 月下旬から 11 月に、図版用の遺物写真を撮影した。

遺構は、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図を照合・修正した第二原図を作成し、スキヤナでコンピュータに取り込んだ。その後、画像編集ソフトを用いてトレースし、土層説明などのデータを組み込み、印刷用の版下を作成した。

12 月上旬までに原稿執筆を終えて、報告書の割付・編集を行った。その後、選定した印刷業者に入稿し、3 回の校正を経て、平成 29 年 2 月 24 日に事業団報告書第 429 集『楽中遺跡』を刊行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、12 月に整理・分類の上、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成24年度（発掘調査）

理 事 長	中 村 英 樹
常務理事兼総務部長	根 本 勝
総務部	
総務部副部長	富 田 和 夫
総務課長	矢 島 将 和

調査部

調 査 部 長	昼 間 孝 志
調査部副部長	劍 持 和 夫
調査監兼調査第一課長	瀧 瀬 芳 之
主 査	岩 瀬 讓
主 査	大 谷 徹
主 事	小 出 輝 雄

平成28年度（報告書作成）

理 事 長	塩野谷 孝 志
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭
総務部	
総務部副部長	黒 坂 祐 二
総務課長	曾 川 浩 二

調査部

調 査 部 長	金 子 直 行
調査部副部長	細 田 勝
主幹兼整理第二課長	山 本 靖
主 事	魚 水 環

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

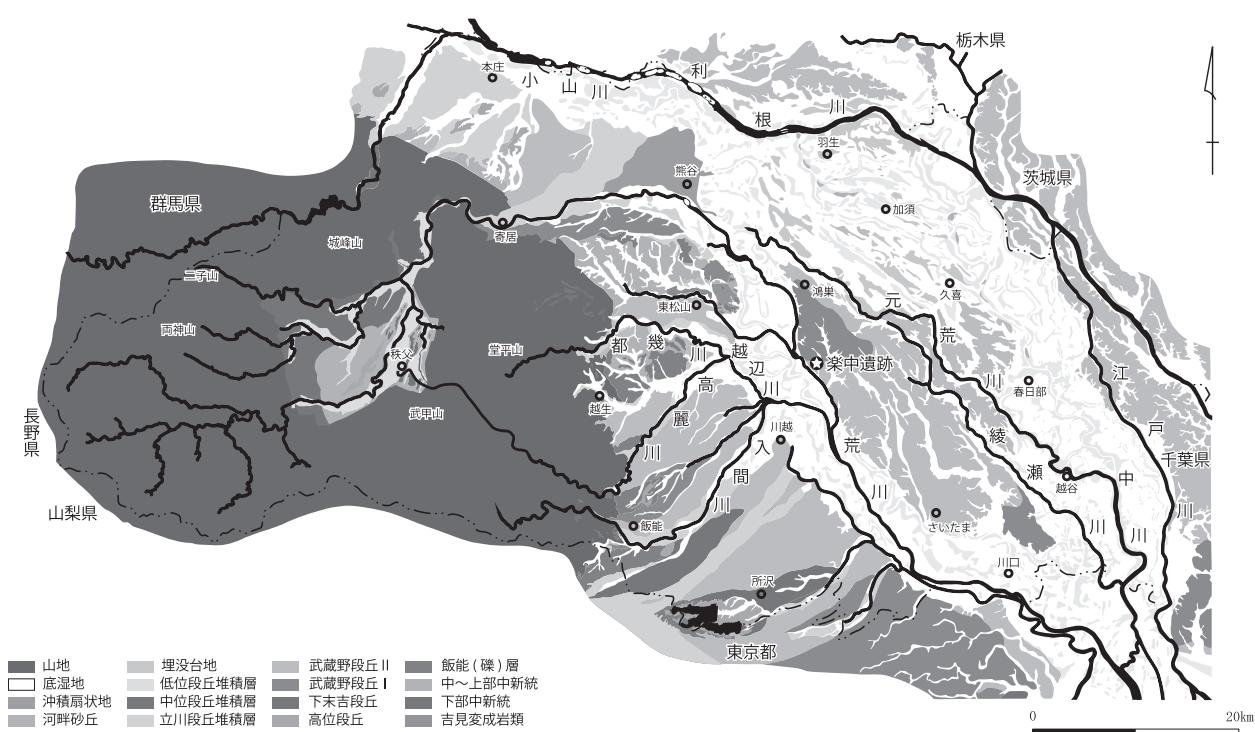
楽中遺跡は、埼玉県桶川市川田谷字楽中に所在する。JR 桶川駅から南西約 4 km に位置し、大宮台地西縁部に立地している。

大宮台地は、西側の荒川低地と北側の加須低地、東側の中川低地に挟まれた、舌状に細長い台地である。南北約38km、東西最大幅は約18kmに及び、最高地の標高点は北本市高尾付近で約30mである。台地は西から東、北から南に向かって標高が下がる傾向にあり、東辺・南辺では、台地と低地の高低差が明瞭でない箇所が多い。一方、楽中遺跡の周辺では台地部分と低地部分の比高差が約8mにも及ぶため、台地の崖線が明瞭に観察される。

桶川市は、大宮台地の中北部に位置している。『埼玉県地名誌』によると、市名の由来の一説に、川の始まる所を指す「お（興）き川」に由来するとされている。この説が示すように、市内には小

河川の起点となる大小の谷が樹枝状に展開し、台地部分が開析されている。楽中遺跡の南側を流れる江川はその中の一つである。江川は北本市高尾付近から流れ、上尾市領家付近で荒川と合流する全長約5kmの小河川で、桶川市域に入ってからは流域に低湿地帯を形成する。低湿地帯は、昭和31～32年の土地改良以前には、ドブッ田と呼ばれる生産性の低い強湿田で、ツミ田（摘田）と呼ばれる水稻直播栽培が行われていた。土地改良によって、現在は流域一面に田畠が営まれている。

楽中遺跡は、この江川流域の低地と荒川流域の低地に挟まれ、北東から南西へ細長く舌状に残された台地の南東側に位置する。現在、周辺の台地上には民家と畠地が点在し、平坦な地形が広がっている。



第1図 埼玉県の地形図

2. 歴史的環境

楽中遺跡の調査では、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、中・近世の遺構と遺物が発見されている。遺跡の周辺では、旧石器時代から人間活動の痕跡が確認され、この地域は非常に古くから人々の暮らしが営まれていたことが窺える。

旧石器時代

遺跡周辺には、旧石器時代の遺物を出土した遺跡が点在している。特に殿山遺跡（68）はナイフ形石器・搔器・削器など多量の石器が出土し、学史上著名である。また川田谷狐塚遺跡（40）・大沼遺跡（30）・楽上遺跡（39）・山下遺跡（60）・在家遺跡（72）等では、尖頭器やナイフ形石器等が出土している。

縄文時代

草創期では、上尾市十二番耕地遺跡が掲げられる。隆起線文土器・爪型文土器等が出土したが、遺構に伴うものではない。また、江川左岸の愛宕遺跡（49）や高井遺跡（52）では有舌尖頭器が出土した。

早期から遺構・遺物が増え始め、宿北II遺跡（77）では、撫糸文土器を伴う住居跡が検出された。殿山遺跡・西台遺跡（22）・楽中遺跡（1）でも撫糸文土器が出土した。早期末葉になると遺跡数は増加し、小在家遺跡（36）・畔吉貝塚（75）・西通I遺跡（70）・中井遺跡（59）で条痕文土器が出土し、楽中遺跡や大平遺跡（31）では炉穴群も調査された。

前期に入ると、遺構の検出数が増大する。江川に面した滝の宮坂遺跡（55）で前期初頭、やや下流側の後山遺跡（56）では前期前葉の住居跡が検出された。また楽中遺跡・宿北II遺跡でも同時期の住居跡が検出された。

前期後葉から末葉にかけての遺跡も確認されている。前原遺跡（23）では前期末葉の甕被り葬と推定される事例が報告され、楽中遺跡や在家遺跡（72）でも住居跡が検出された。さらに、後山遺

跡・殿山遺跡・西通I遺跡・石神遺跡（62）等でも土器が出土している。台地上のみならず、荒川低地内の東野遺跡（25）や芝沼堤外遺跡（16）でもこの時期の住居跡等が確認されており、注目される。

中期初頭～前葉の遺跡は検出されていないが、中葉になると周辺の遺跡数は再び増加する。集落の立地が荒川支流や支谷沿いに移っていくと見られ、中期中葉から後葉に諏訪野遺跡・高井遺跡・中井遺跡・畔吉前原遺跡（10）等で大規模な集落が営まれている。これらの大集落の周辺には諏訪南遺跡（29）や大平遺跡・小谷津遺跡（57）・袋I遺跡（58）・堀口遺跡（61）・楽中遺跡等の比較的小規模な集落が所在している。

後期初頭には遺跡数が減少し、楽中遺跡等で小規模な集落が散見されるに留まる。しかし、中葉からは、再び集落跡の山下遺跡が営まれ始める。山下遺跡周辺の小林遺跡（71）・領家・宮下遺跡（65）・前領家遺跡（32）等でも遺構が検出された。

晩期には遺跡数が減少するが、桶川市後谷遺跡や高井東遺跡（47）・高井泥炭層遺跡（53）では、多量の遺物が出土した。また砂ヶ谷戸II遺跡（37）でも後期から晩期中葉の遺物が出土し、在家遺跡では、晩期終末の住居跡が検出された。

弥生時代

遺跡周辺で前期・中期に位置づけられる遺跡は見つかっておらず、遺構・遺物が見られるのは後期以降のことである。江川右岸の台地上に砂ヶ谷戸II遺跡（37）、荒川沿岸の八幡耕地遺跡（43）で住居跡が確認されたのを皮切りに、後期終末には江川右岸では砂ヶ谷戸I遺跡（41）・楽上遺跡が後続する。この段階には河川沿岸の台地上に遺跡が増加し始め、石川堀右岸台地上の三ツ木遺跡（34）や荒川沿岸の台原遺跡（21）では後期終末の住居跡が検出された。

古墳時代

弥生時代後半から荒川の支流域で始まった遺跡の増加は、急速に荒川左岸の一帯へ波及する。江川右岸の楽上遺跡・楽上II遺跡（38）は荒川左岸の遺跡の中でも規模の大きな集落と位置づけられる。荒川左岸では集落に伴って墳墓の造営が開始され、畔吉遺跡（74）・雲雀遺跡（67）の集落跡は、それぞれ領家・宮下遺跡（65）・殿山遺跡の方形周溝墓に対応する可能性がある。この時期の集落跡は、他に台原遺跡・西台遺跡・宮前遺跡（45）等が確認され、八幡耕地遺跡は後期まで継続して営まれた集落である。また、ほぼ同時期に低地へも集落が広がり、元宿遺跡（6）・尾崎遺跡（3）・西谷遺跡（13）・白井沼遺跡（12）・富田後遺跡（11）等が荒川を挟んだ低地帯に形成される。しかし、これらの集落は、中期まで継続しない。

中期になると遺跡数は急激に減少する。八幡耕地遺跡以外では、高井遺跡・愛宕遺跡・宮遺跡（50）などが江川中流左岸で集中して確認されるに留まる。

後期になると遺跡数は再び増加する傾向を見せる。宿北II遺跡・領家・宮下遺跡・畔吉遺跡・庚塚遺跡（19）等が、荒川左岸に展開する。荒川を挟んだ低地帯にも、富田後遺跡等が営まれた。

この地域の荒川左岸には、前期と後期の古墳跡が確認されている。畿内系石製品等の副葬品で知られる熊野神社古墳（44）は、前期の4世紀第3四半期の造営と位置づけられている。既に消滅した江川山古墳（73）からは、4世紀後半とされる彷彿獸形鏡・捩文鏡が出土している。

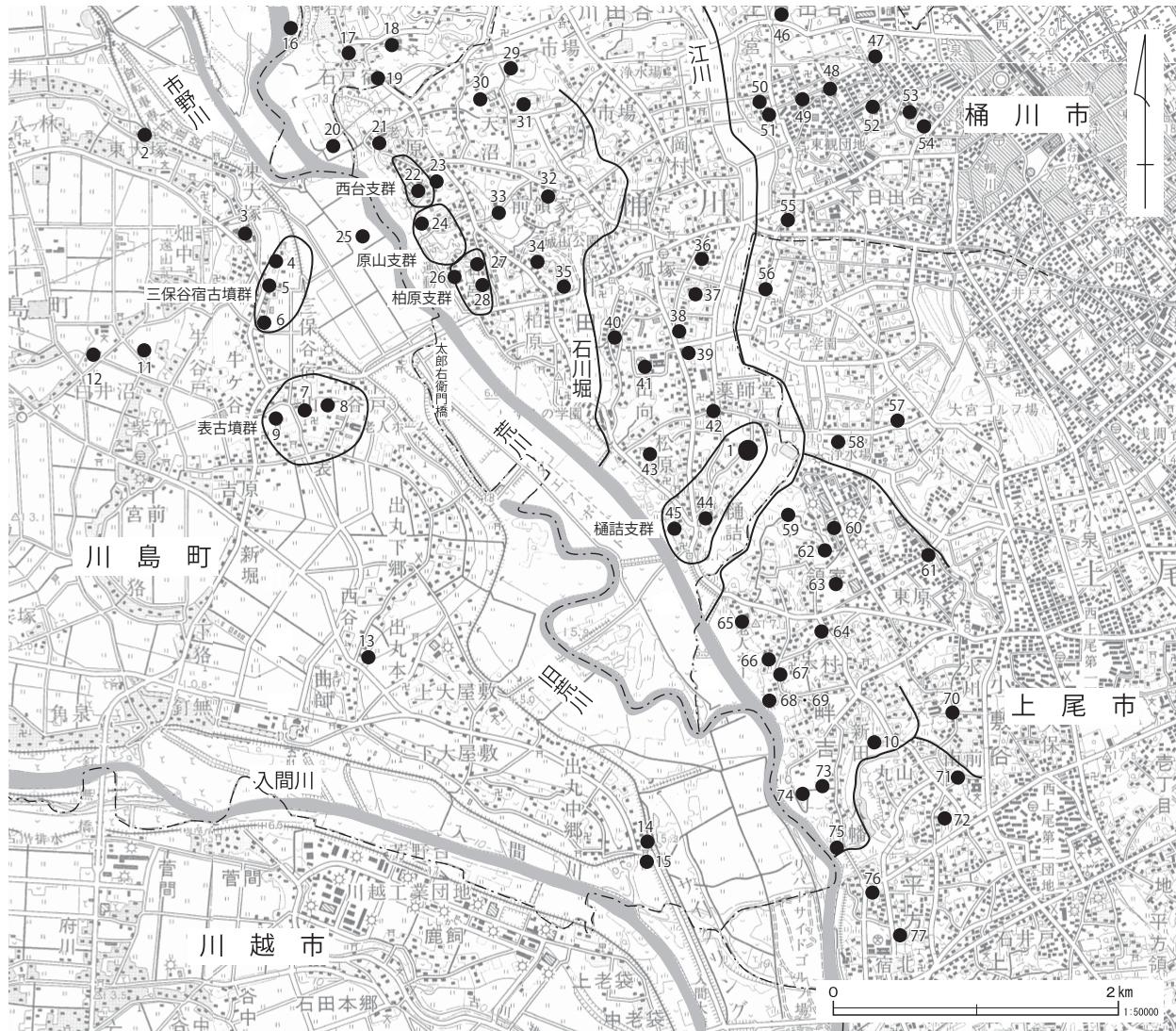
後期には、江川以北の荒川左岸に60数基に及ぶ古墳が造営されている。これらは川田谷古墳群（24）と呼称され、北から西台、原山、柏原、^{ひの}樋詰の4つの支群に分けられている。楽中遺跡から発見された古墳跡は、樋詰支群の第6号墳にあたる。この他にも、荒川左岸に殿山古墳（69）をはじめとする畔吉古墳群、江川中流左岸に氷川神社裏古墳（51）などが造営されている。遺跡の増加に併行するように、荒川右岸でも6世紀前葉から中葉に古墳の造営が開始される。富士浅間塚古墳（4）・愛宕塚古墳（5）等が三保谷宿古墳群を、廣徳寺古墳（7）・養竹院内古墳（9）等が表古墳群を形成する。また、白山古墳（14）の南隣では三竹遺跡（15）が調査されており、5世紀後葉から末葉に位置づけられる古墳跡が2基調査された。

奈良・平安時代

奈良・平安時代になると遺跡数は激減する。石川堀谷奥の前領家遺跡は、鍛冶炉を伴う平安時代の集落跡である。また、江川と荒川の合流点を臨む台地上には、領家・宮下遺跡が6世紀末～10世紀初頭の長期間にわたって断続的に営まれた。竪穴住居跡・掘立柱建物跡が検出され、円面硯や雁股鎌の出土は注目される。このほか、楽中遺跡周辺では、江川左岸の上流側に後山遺跡（56）、荒川左岸の宿北II遺跡が7世紀中～後葉に位置づけられる。また、中井遺跡で8世紀前葉、石神III遺跡で8世紀中葉、在家遺跡で9世紀後葉の住居跡、さらに、荒川右岸の川島町三竹遺跡では9世紀代の溝跡が検出されている。しかし、いずれも集落としては小規模である。

中・近世

楽中遺跡の所在する川田谷は、古くは「河田や」と書き、中世の河田郷（河田村）に比定されている。応永4（1397）年から遅くとも15世紀半ばまでは、円覚寺の塔頭黄梅院領であった。遺跡周辺では三ツ木城跡（35）が存在し、土壘・堀の痕跡が残っている。また、石神遺跡では中世の火葬遺構、西通I遺跡・薬師堂遺跡では、中世の地下式坑等が検出されている。天正18（1590）年以降、河田郷を含む石戸領は、徳川家臣の牧野氏の所領となった。大平遺跡では、この牧野氏の陣屋の一部と寺院跡が調査された。



第2図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧表（第2図）

1	楽中遺跡	17	下宿遺跡	33	永久保I遺跡	49	愛宕遺跡	65	領家・宮下遺跡
2	大塚古墳	18	元屋敷遺跡	34	三ツ木遺跡	50	宮遺跡	66	宮内IV遺跡
3	尾崎遺跡	19	庚塚遺跡	35	三ツ木城跡	51	氷川神社裏古墳	67	雲雀遺跡
4	富士浅間塚古墳	20	東台I遺跡	36	小在家遺跡	52	高井遺跡	68	殿山遺跡
5	愛宕塚古墳	21	台原遺跡	37	砂ヶ谷戸II遺跡	53	高井泥炭層遺跡	69	殿山古墳
6	元宿遺跡	22	西台遺跡	38	楽上II遺跡	54	高井南遺跡	70	西通I遺跡
7	廣徳寺古墳	23	前原遺跡	39	楽上遺跡	55	滝の宮坂遺跡	71	小林遺跡
8	廣徳寺遺跡	24	川田谷古墳群	40	川田谷狐塚遺跡	56	後山遺跡	72	在家遺跡
9	養竹院内古墳	25	東野遺跡	41	砂ヶ谷戸I遺跡	57	小谷津遺跡	73	江川山古墳
10	畔吉前原遺跡	26	若宮台遺跡	42	薬師堂遺跡	58	袋I遺跡	74	畔吉遺跡
11	富田後遺跡	27	バチ山遺跡	43	八幡耕地遺跡	59	中井遺跡	75	畔吉貝塚
12	白井沼遺跡	28	ひさご塚遺跡	44	熊野神社古墳	60	山下遺跡	76	箕輪III遺跡
13	西谷遺跡	29	諏訪南遺跡	45	宮前遺跡	61	堀口遺跡	77	宿北II遺跡
14	白山古墳	30	大沼遺跡	46	愛宕西遺跡	62	石神遺跡		
15	三竹遺跡	31	大平遺跡	47	高井東遺跡	63	石神III遺跡		
16	芝沼堤外遺跡	32	前領家遺跡	48	高井北遺跡	64	雲雀I遺跡		

III 遺跡の概要

楽中遺跡は、大宮台地北西部の桶川市川田谷字樂中に所在する。遺跡は大宮台地上に立地し、東南側に江川の氾濫原低湿地と接している。遺構確認面の標高は 16.0 m～15.2 m であり、調査区北西の台地側から南東の江川方向へ緩やかに傾斜する。

現地表面から遺構確認面までの深さは、70～80 cm である（第3図）。深さ約 30 cm 程度から黒ボク土の堆積（第3図②X層）が見られ、縄文時代後期の包含層（第3図②XI層）も部分的に残存している。また第3図①中に灰褐色土と示したⅡ～VII層は、耕作客土の所謂「ヤドロ」である。

今回の発掘調査では旧石器時代、縄文時代、古墳時代、中・近世の遺構と遺物が発見された。

旧石器時代の遺構は確認されていないが、3点のナイフ型石器及び剥片が出土した。

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡 9軒、竪穴状遺構 1基、炉穴 6基、埋甕 3基、土壙 64基、集石土壙 1基が検出された。竪穴住居跡は前期が 5軒、中期が 1軒、後期が 3軒である。炉穴は早期で、調査区北部に集中していた。また、遺構に伴わない早期初頭～後期中葉の土器片が出土した。

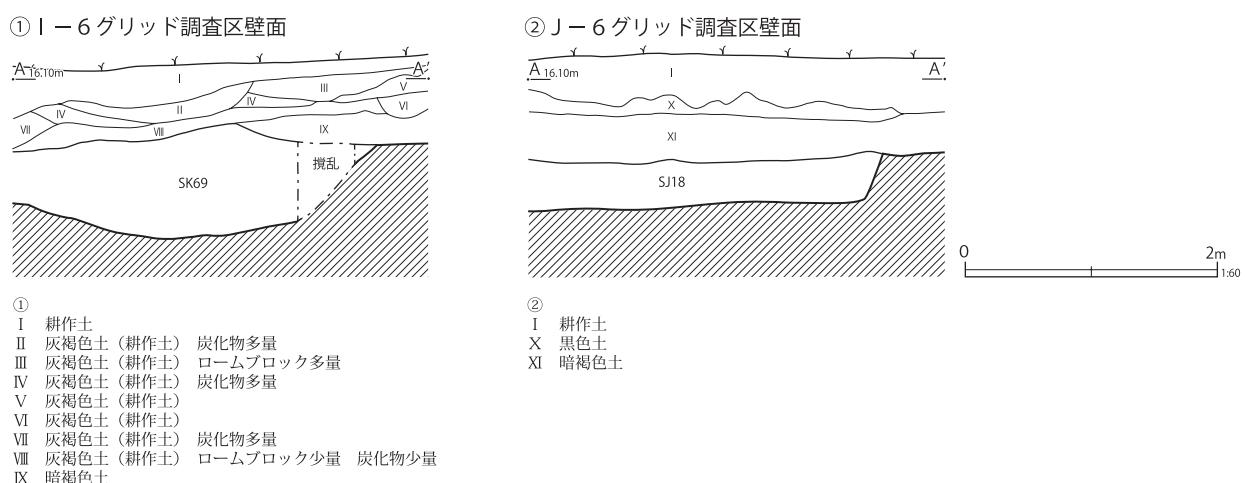
古墳時代の遺構は、竪穴住居跡 12軒、古墳跡 1基、溝跡 1条、土壙 2基が検出された。竪穴住

居跡は前期が 11軒、後期が 1軒である。前期の竪穴住居跡は 1軒のみ円形が見られ、それ以外は方形であった。北西～南東に主軸を向けて建てられたものが多い。

古墳跡は調査区の中央部に検出された。川田谷古墳群の樋詰支群に属する樋詰 6号墳である。円墳で、墳丘は既に削平されていたが、周溝および横穴式石室の基礎部分が確認された。また石室の解体作業中、副葬品と思われる直刀が出土した。直刀の装具から、7世紀第2四半期の造営と推定される。さらに、調査区北端の第4号溝跡と第20号土壙は、小型の円墳の一部の可能性がある。

中・近世の遺構は、溝跡 11条、土壙 19基、不明遺構 1基が検出された。溝跡は調査区を方形に区分して検出された。土壙は廃棄土壙を含み、陶磁器類・鉄製品・鍛冶関係遺物等が出土した。

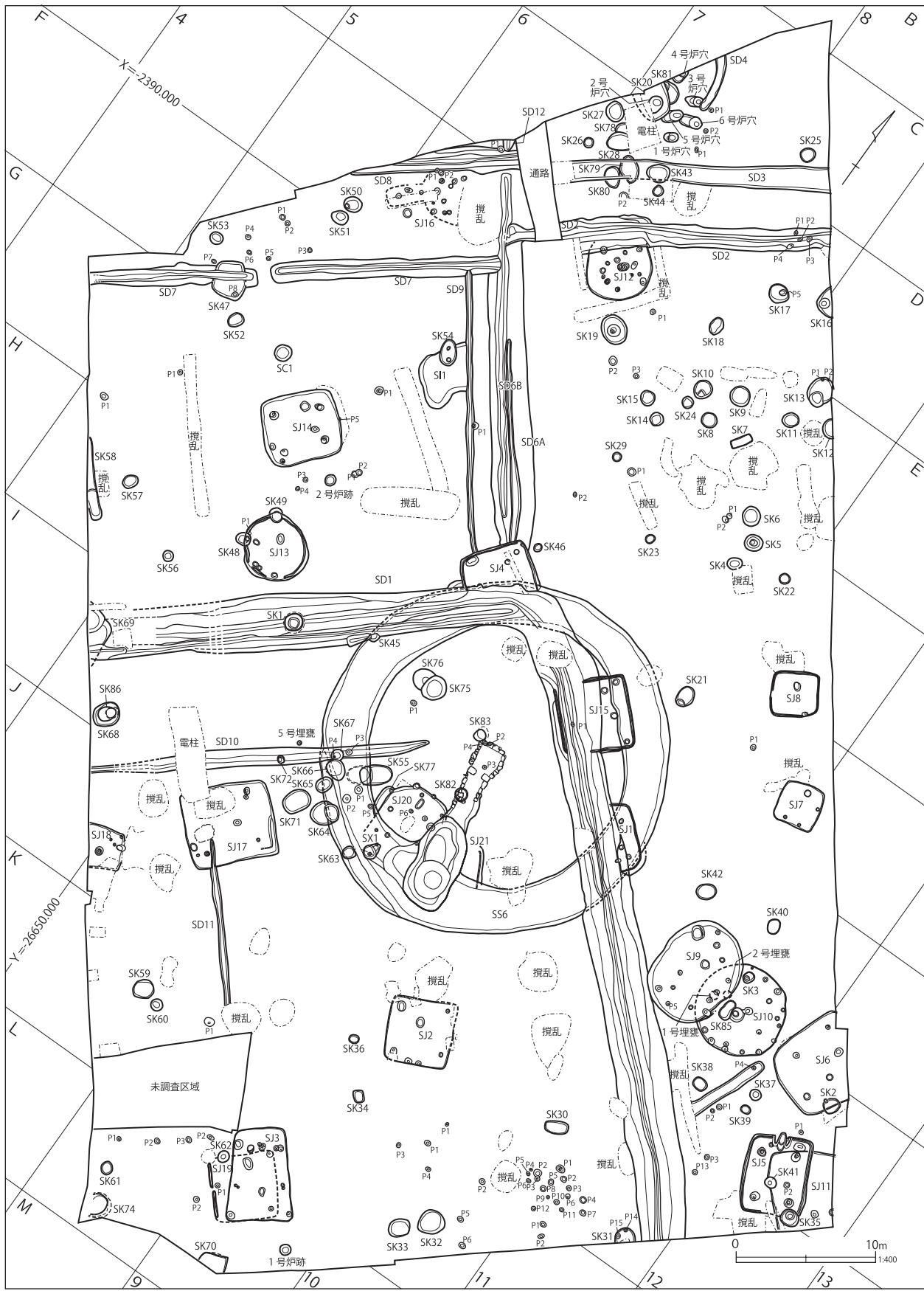
この他に、楽中遺跡については、縄文時代早期および中期の土器が採集され、紹介されている（塩野 1968）。また、桶川市教育委員会によって、今回の調査区の隣接地が 1987 年に調査され、古墳時代後期の住居跡が 1軒確認された。今回調査された古墳時代後期の住居跡と主軸方位は異なるが、出土遺物から同時期と思われる。



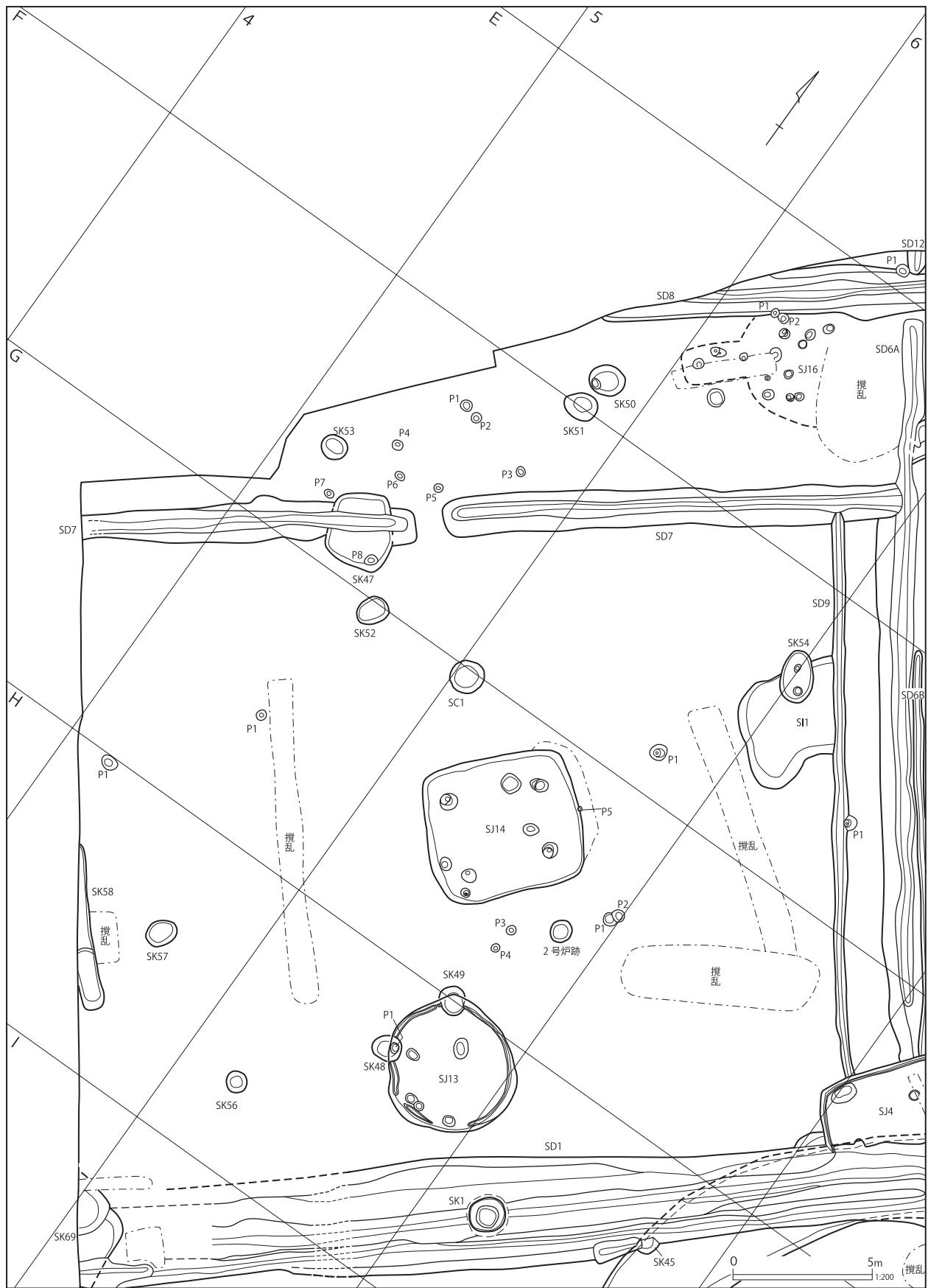
第3図 基本層序



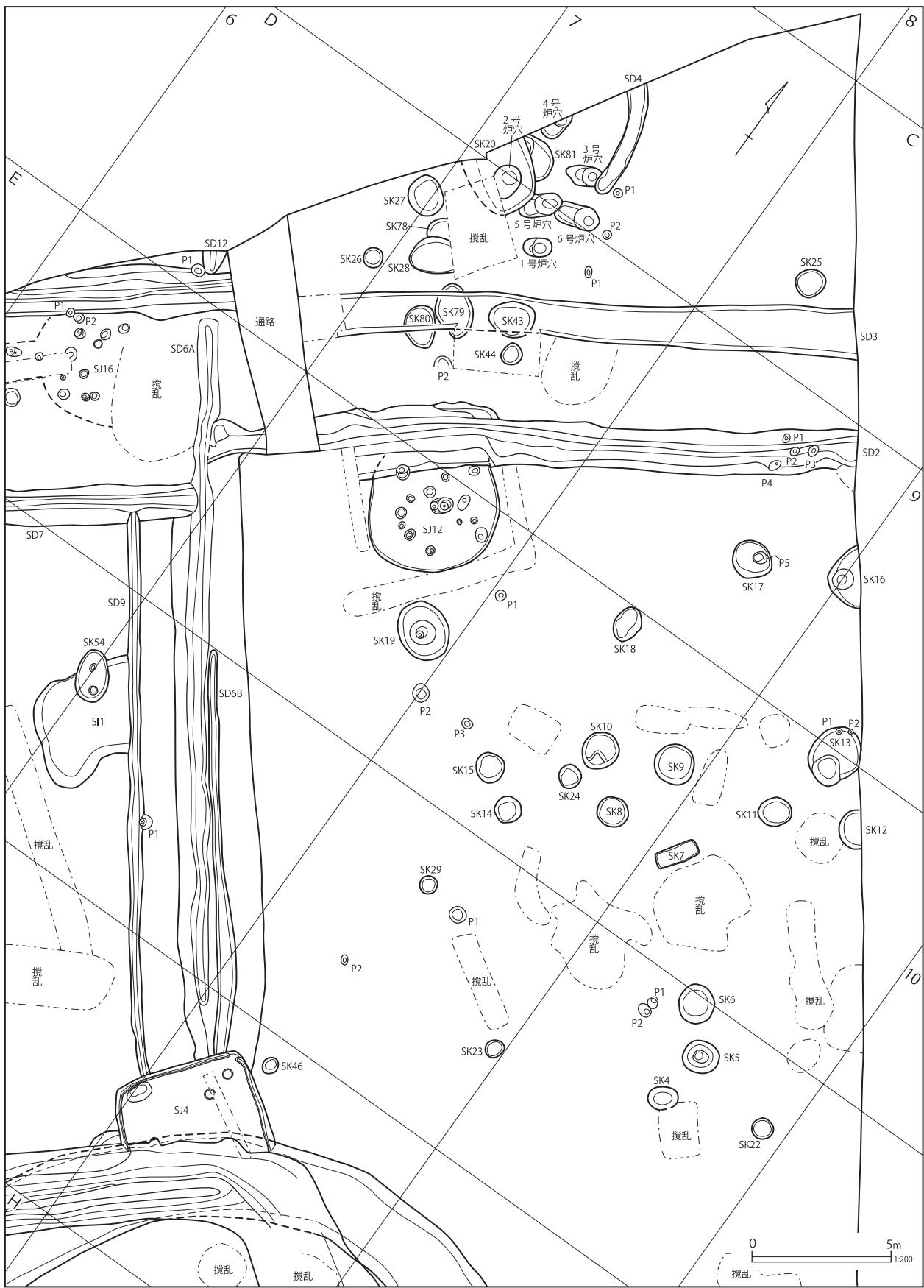
第4図 調査区位置図



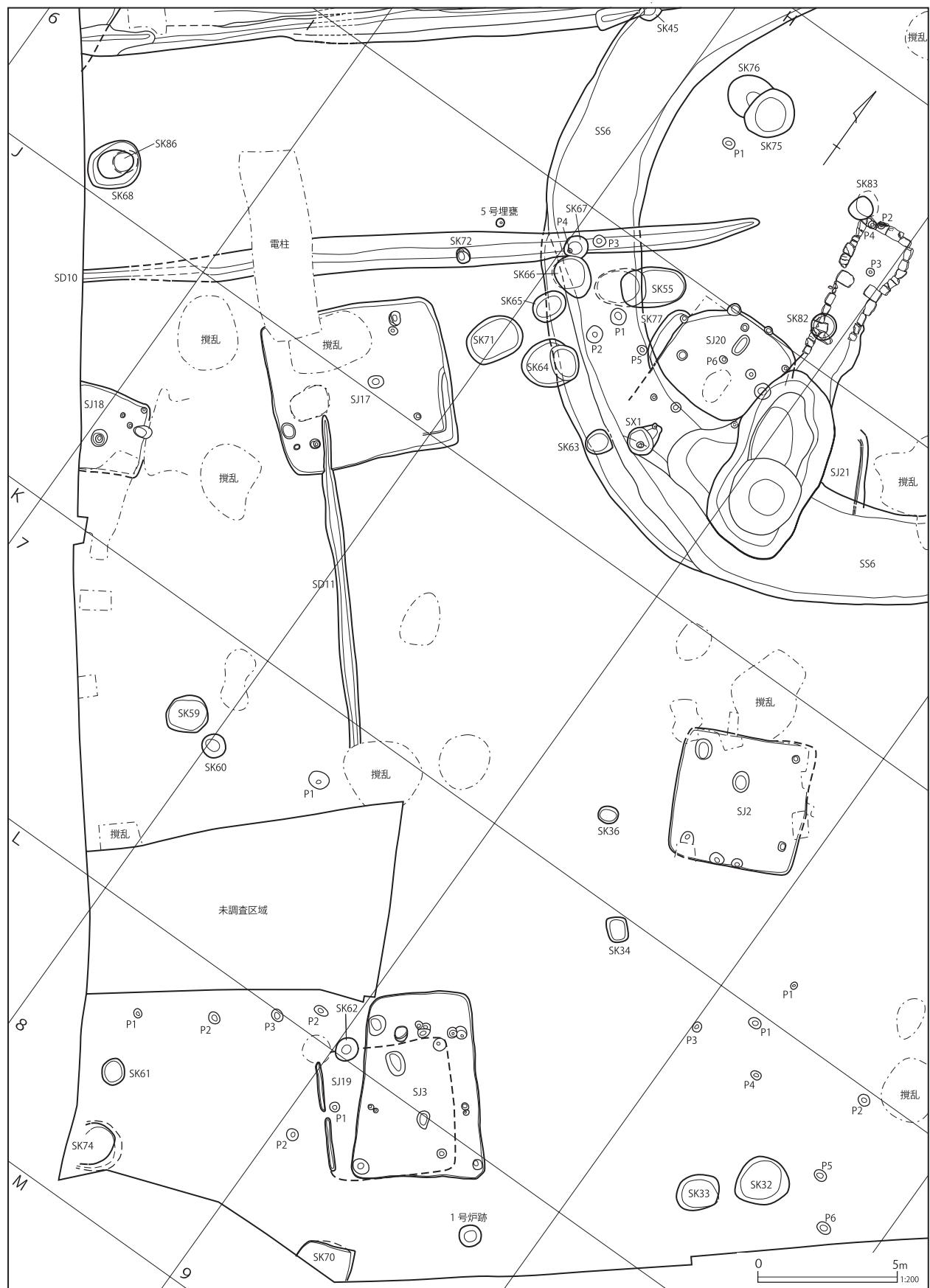
第5図 楽中遺跡全体図



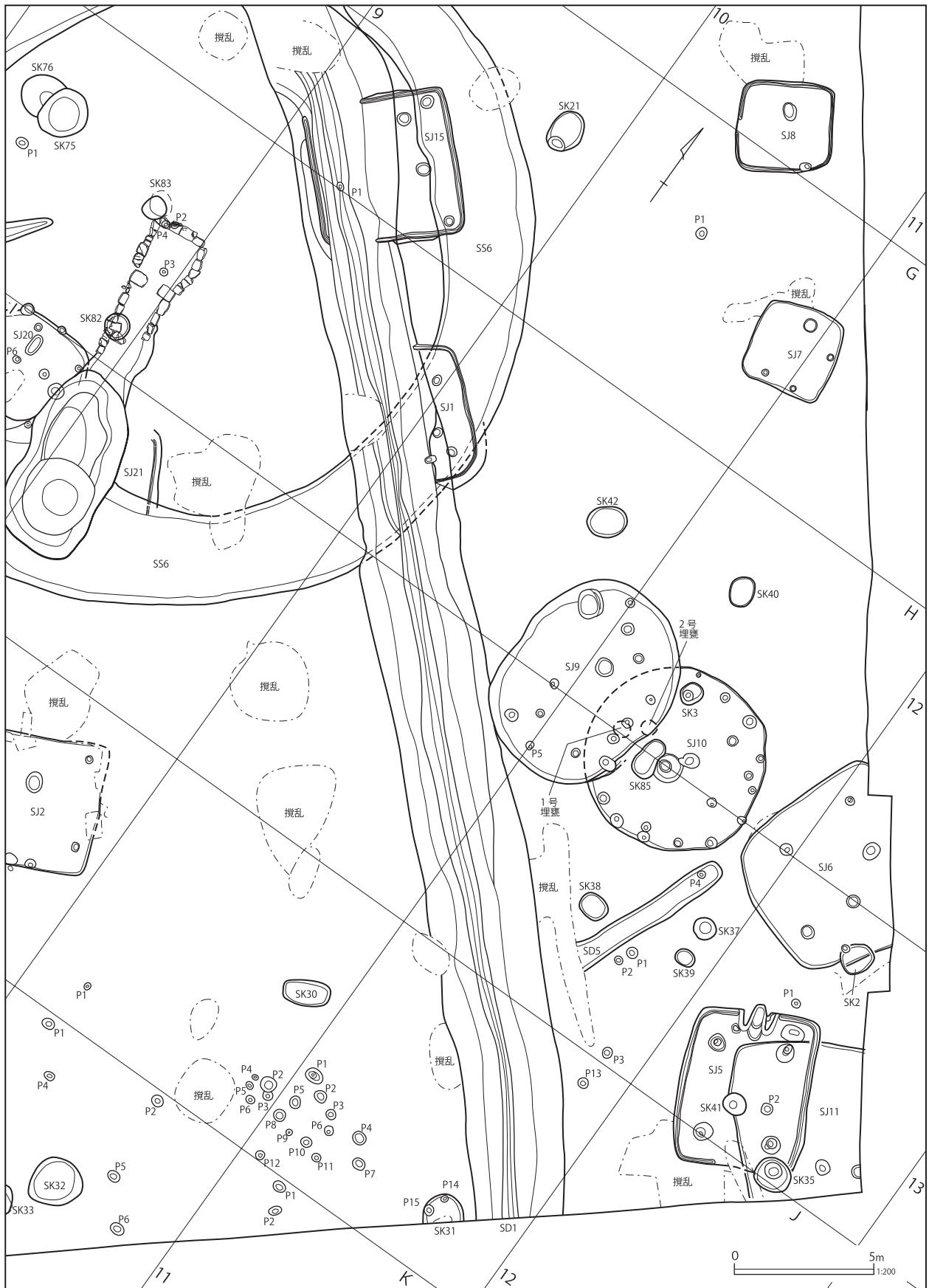
第6図 濟中遺跡区割り図（1）



第7図 楽中遺跡区割り図（2）



第8図 濟中遺跡区割り図（3）



第9図 楽中遺跡区割り図 (4)

IV 遺構と遺物

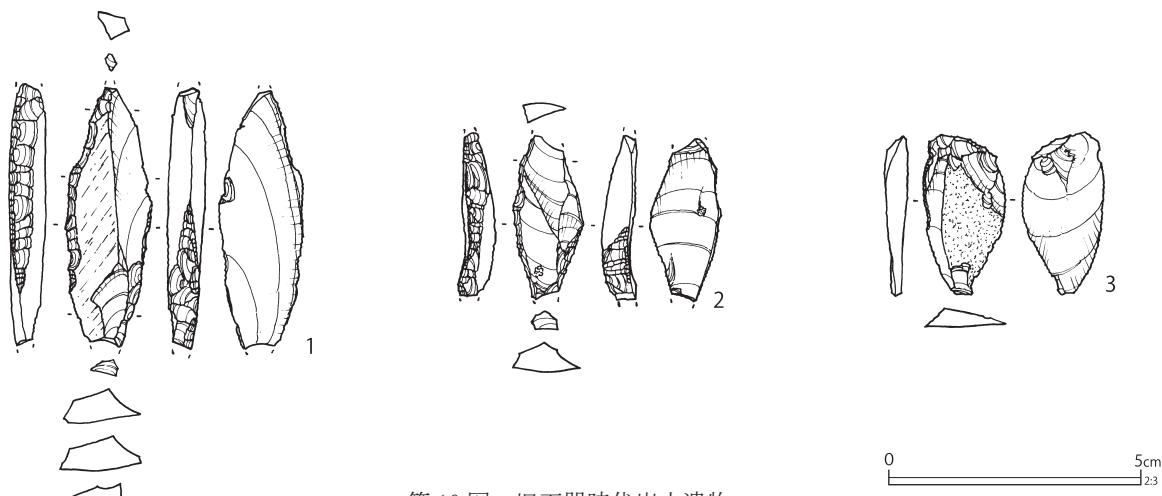
1. 旧石器時代の遺物（第10図）

遺構精査時に旧石器時代の遺物が出土したが、石器集中等の遺構は検出されなかつた。

1・2はナイフ形石器である。共に先端と基端部を欠損する。1は右下位方向からの縦長剥片を素材とする。外形は菱形に近く、調整加工は二側縁に施されている。正面には、節理による平坦面と主要剥離面と同一方向の剥離面がみられる。大きさは、長さが現存で5.15cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm、重さ6.0gである。石材は頁岩である。

2は下位方向からの縦長剥片を素材とする。外形は菱形を呈する。調整加工は二側縁に施されている。正面には、上下両方向からの剥離面がみられる。長さは現存で3.2cm、幅1.4cm、厚さ0.65cm、重さ2.4gである。石材は黒曜石である。

3は縦長剥片である。打面は単剥離面で正面に自然面が大きく残されている。大きさは、長さ3.2cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重さ1.9gである。石材は黒曜石である。



第10図 旧石器時代出土遺物

2. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡9軒、竪穴状遺構1基、炉穴6基、埋甕3基、土壙64基が検出された。遺構は調査区全域に散在していた。

なお、石器については第3表に記載した。

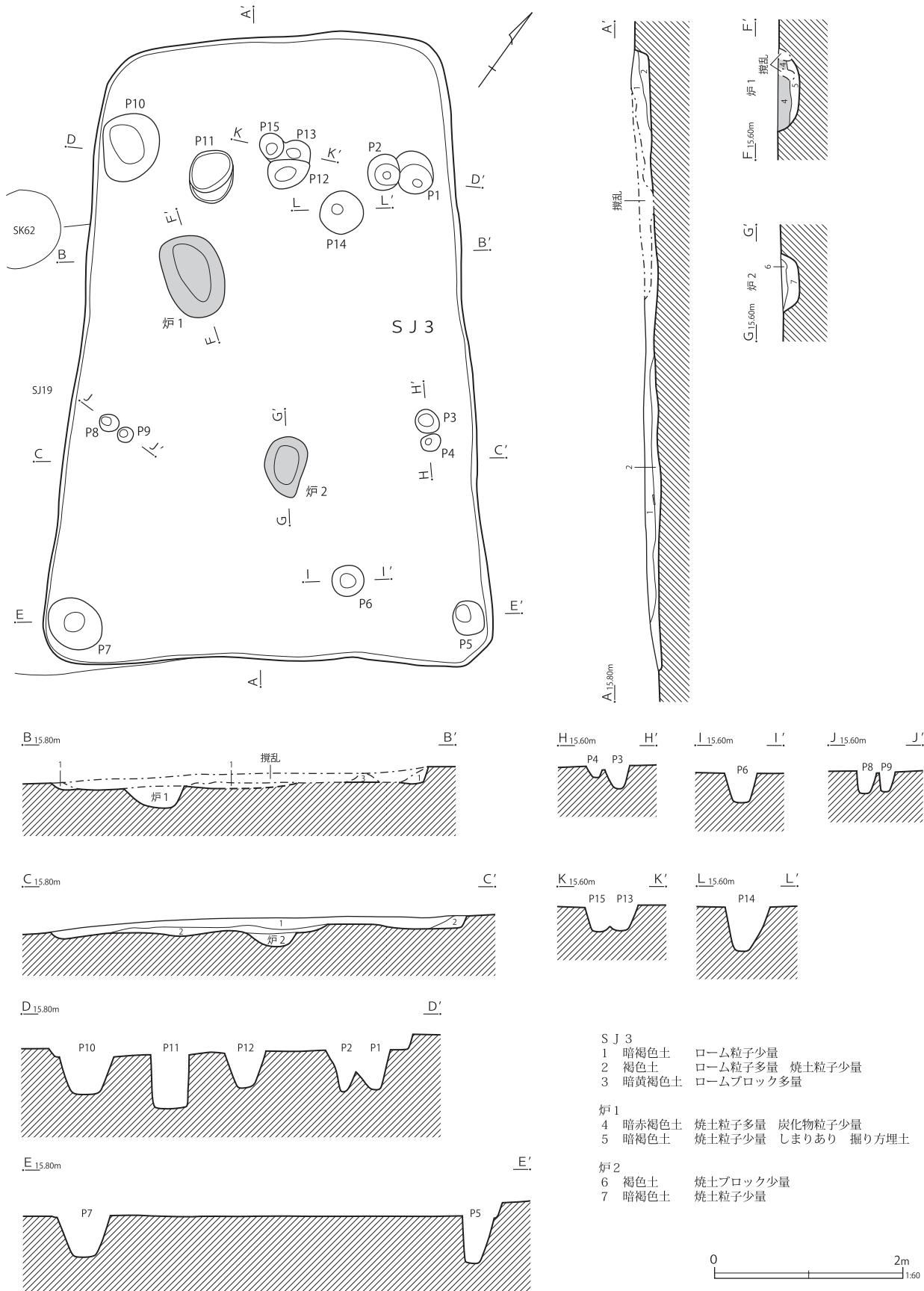
(1) 住居跡

第3号住居跡（第11・12図）

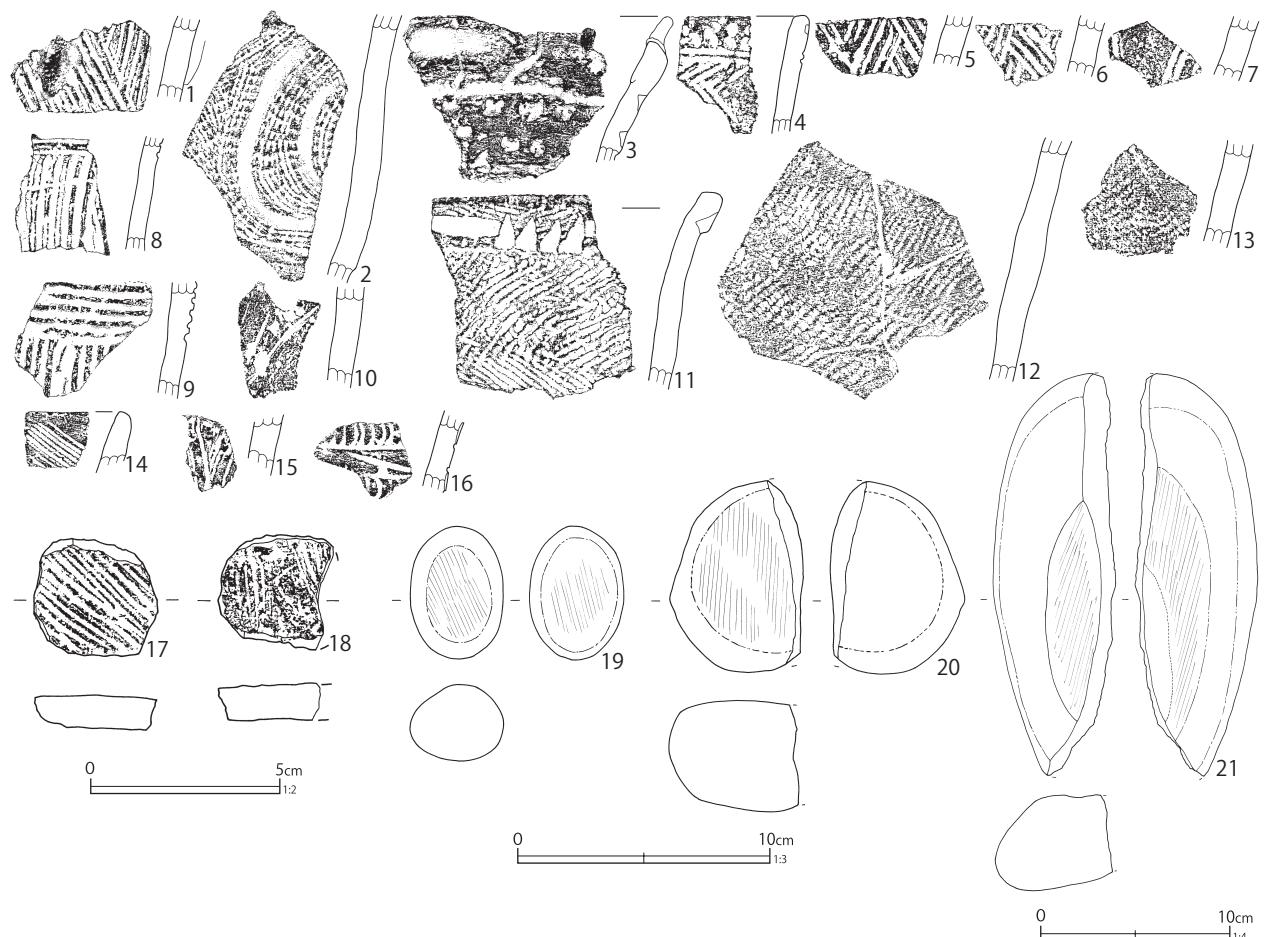
調査区南側のK・L-9グリッドに位置する。古墳時代前期の第19号住居跡と重複するが、第3号住居跡の床面には影響が及ばなかつた。平面形態は南北方向に長い台形を呈し、長軸方位はN-36°-Wである。長軸方向の長さは6.76m、北辺は3.5m、南辺は4.8m、壁高は最も高い部分で0.20mを測る。床面に凹凸があり、硬化

面は判然としない。覆土は、壁際から順に自然堆積した様子が観察できた。

ピットは15基検出された。ピットの規模(直径m×深さm)は、P1(0.46×0.43)、P2(0.40×0.44)、P3(0.25×0.25)、P4(0.23×0.12)、P5(0.35×0.50)、P6(0.34×0.31)、P7(0.62×0.45)、P8(0.21×0.24)、P9(0.17×0.22)、P10(0.70×0.45)、P11(0.55×0.56)、P12(0.44×0.39)、P13(0.45×0.29)、P14(0.46×0.46)、P15(0.26×0.25)である。うちP1・5・7・10が配置と規模から主柱穴と推定される。P2と1、P3と4、P8と9及びP12・13・15はそれぞれ近接しており、炉跡が2ヶ所にあることから建て替えの可能性もある。



第 11 図 第 3 号住居跡



第12図 第3号住居跡出土遺物

炉跡は住居跡の西側に炉1、南東側に炉2が検出されている。炉1は北西—南東方向に長軸を持つ楕円形の地床炉である。長軸0.88m、幅0.62m、掘り方までの深さは0.23mである。深さ約0.1mで全面的に焼けている。

炉2は主軸方向に長軸を持つ楕円形の地床炉である。長軸0.6m、幅0.42m、掘り方までの深さは0.18mである。炉床と床面の高さはほぼ等しく、焼土が薄く検出された。前述の近接するピットを建て替えに伴うものと考えれば、建て替え後の炉の可能性がある。

住居跡の時期は、出土した土器から前期末葉の十三菩提式期と考えられる。

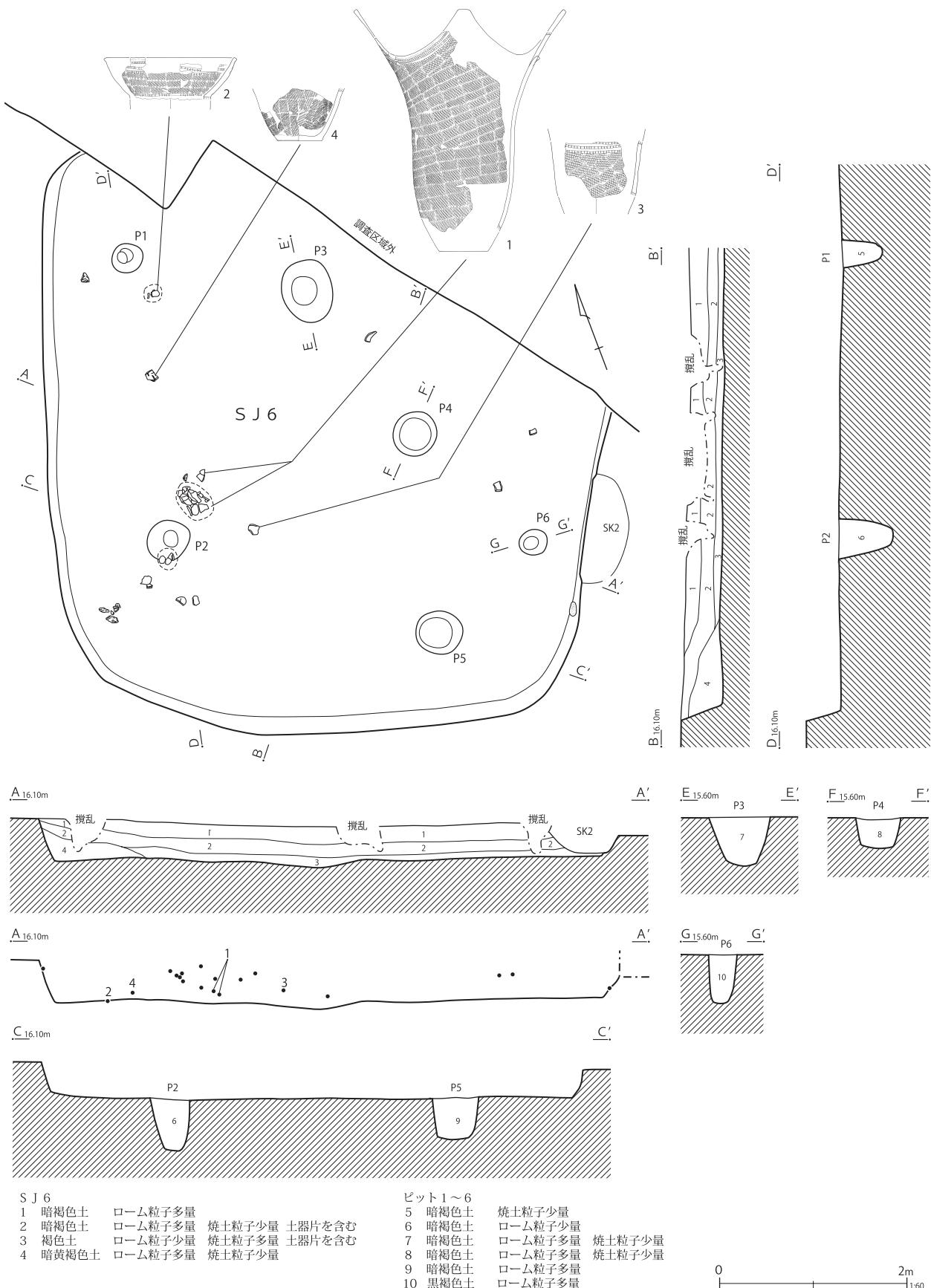
第12図（1～21）は出土した遺物である。

1～16は出土土器である。1は沈線文上に貼付が施された諸磯c式土器である。2～15は十三菩提式土器である。2は多截竹管による渦巻き状の

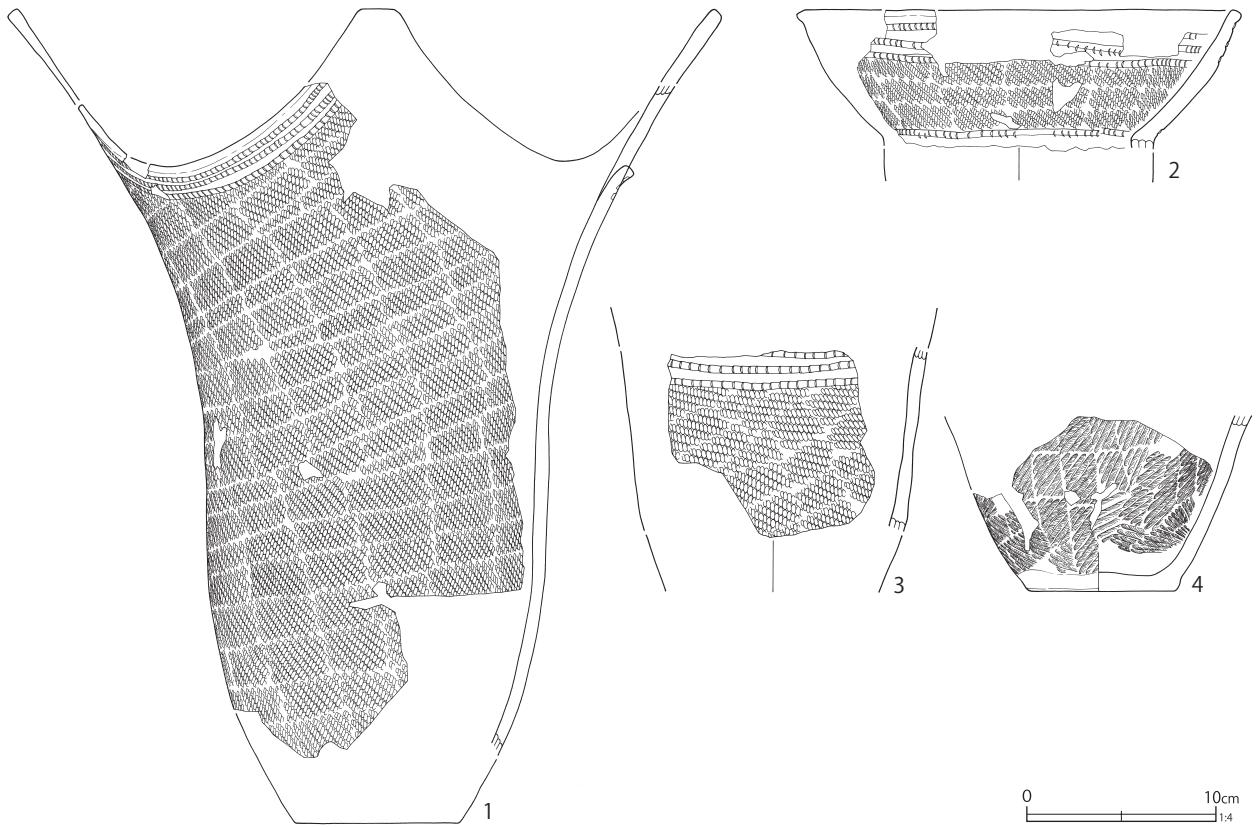
刺突文間に沈線が施され、印刻手法に似た立体的な施文となっている。3は口唇部に扇状の把手を持ち、頸部に刺突が施されている。4は口唇部に刺突が施された多帶構成の土器であろう。5～7は縦位の矢羽根沈線文が施文されている。8・9は半截竹管内面で、断面カマボコ状の対弧状沈線文が施文されている。10は細い沈線が描かれた土器で、胎土からこの時期に含めた。11～13は繩文施文の土器で、11はRとLの原体による羽状施文である。口唇が肥厚し、三角印刻や長方形の押圧が施されている。12・13はLの原体による施文である。14は櫛歯状工具による施文で、粗製土器であろう。15は多帶構成の可能性がある。16は中期初頭の土器であろう。17・18は十三菩提式期の土製円盤である。19～21は出土石器である。

第6号住居跡（第13～17図）

調査区東側のH・I-11・12グリッドに位置する。



第13図 第6号住居跡



第14図 第6号住居跡出土遺物（1）

縄文時代の土壙と思われる第2号土壙と重複するが、土壙は浅く、住居跡の床面に影響しなかった。平面形態は隅丸方形と推定され、北東側の隅は調査区外へ広がる。南側を入り口とすれば主軸方位はN-29°-Eである。主軸方向の長さ6.45m、直交軸方向の長さ6.08m、壁高は約0.5mを測る。覆土は壁際の第4層から堆積し、続いて焼土を多量に含む第3層が堆積している。所々の床面に被熱も見られることから、仮に焼失住居とすれば、焼失以前に壁が崩落していた可能性がある。

ピットは6基検出された。ピットの規模(長径m×深さm)は、P1(0.36×0.43)、P2(0.48×0.58)、P3(0.66×0.53)、P4(0.48×0.33)、P5(0.5×0.45)、P6(0.3×0.53)である。うちP1・2・6は主柱穴と考えられる。炉跡は検出されなかった。

住居跡の時期は、出土した土器から前期後葉の諸磣a式期と考えられる。

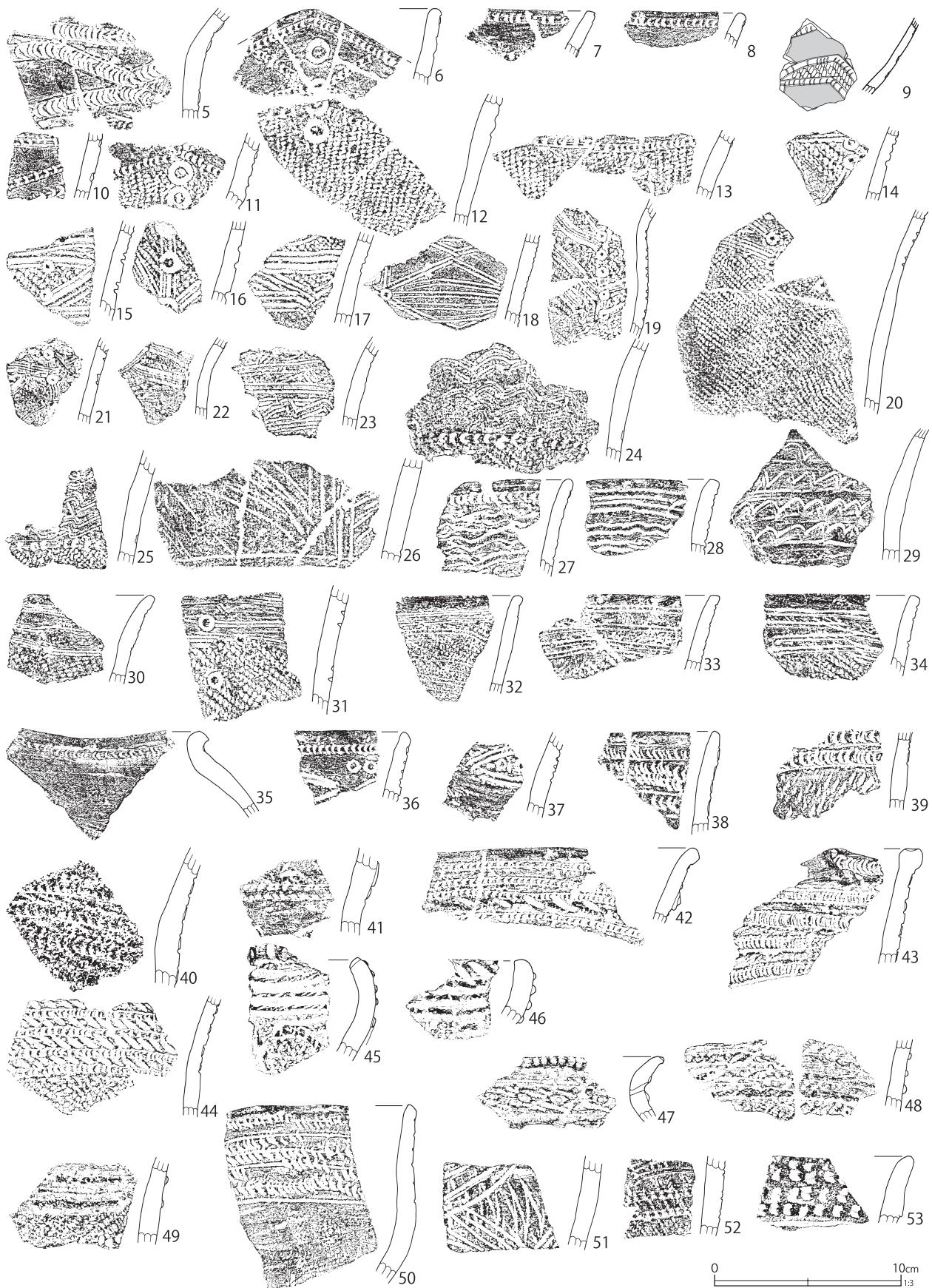
第14図～第16図は出土した遺物である。

第14図1～4は器形が復元できた土器である。

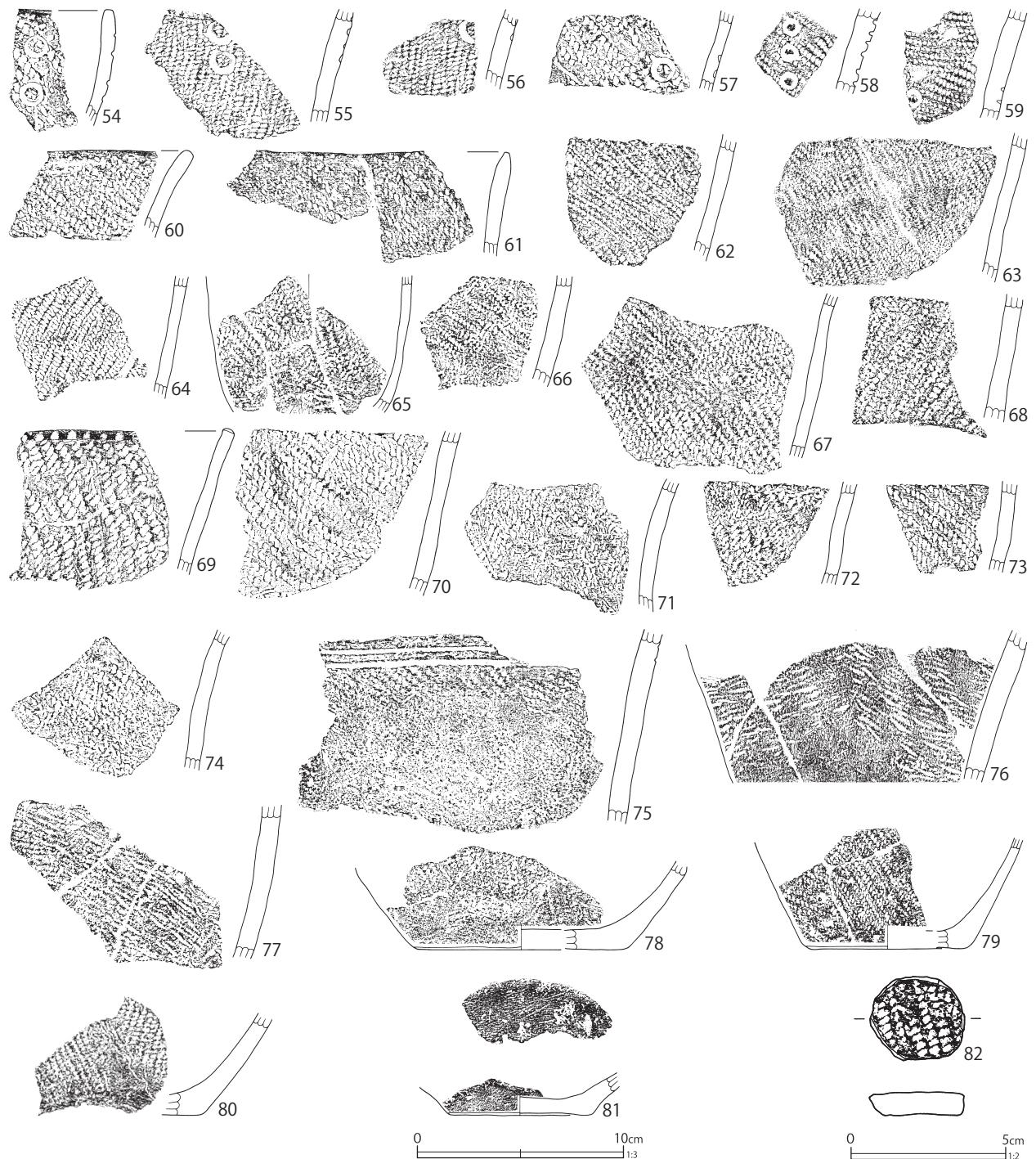
1は口縁が強く開き、波頂部が山形状となる4単位の大波状口縁の深鉢形土器である。口唇直下に3条の竹管文が廻り、以下は底部まで縄文が施文されている。縄文は1段3条のRL原体で、横位に施文されている。推定口径37cm、現存高36cm、推定高47cmである。胎土には砂粒を多く含み、褐色の色調である。

2は口縁部が内湾気味に開く深鉢形土器である。口唇無文部下と胴部との境界に竹管文が廻り、口縁部文様帯が区画されている。地文は1段3条のRL原体による横施文である。推定口径23cm、現存高7cmである。胎土は砂粒を含むが精選されている。色調は明褐色である。

3は深鉢形土器の胴部で、現存部分で3条の竹管文が器面を廻り、口縁部と胴部が区画されているものと思われる。現存部の最大径が24cm、現存高10cmである。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗褐色である。



第15図 第6号住居跡出土遺物（2）



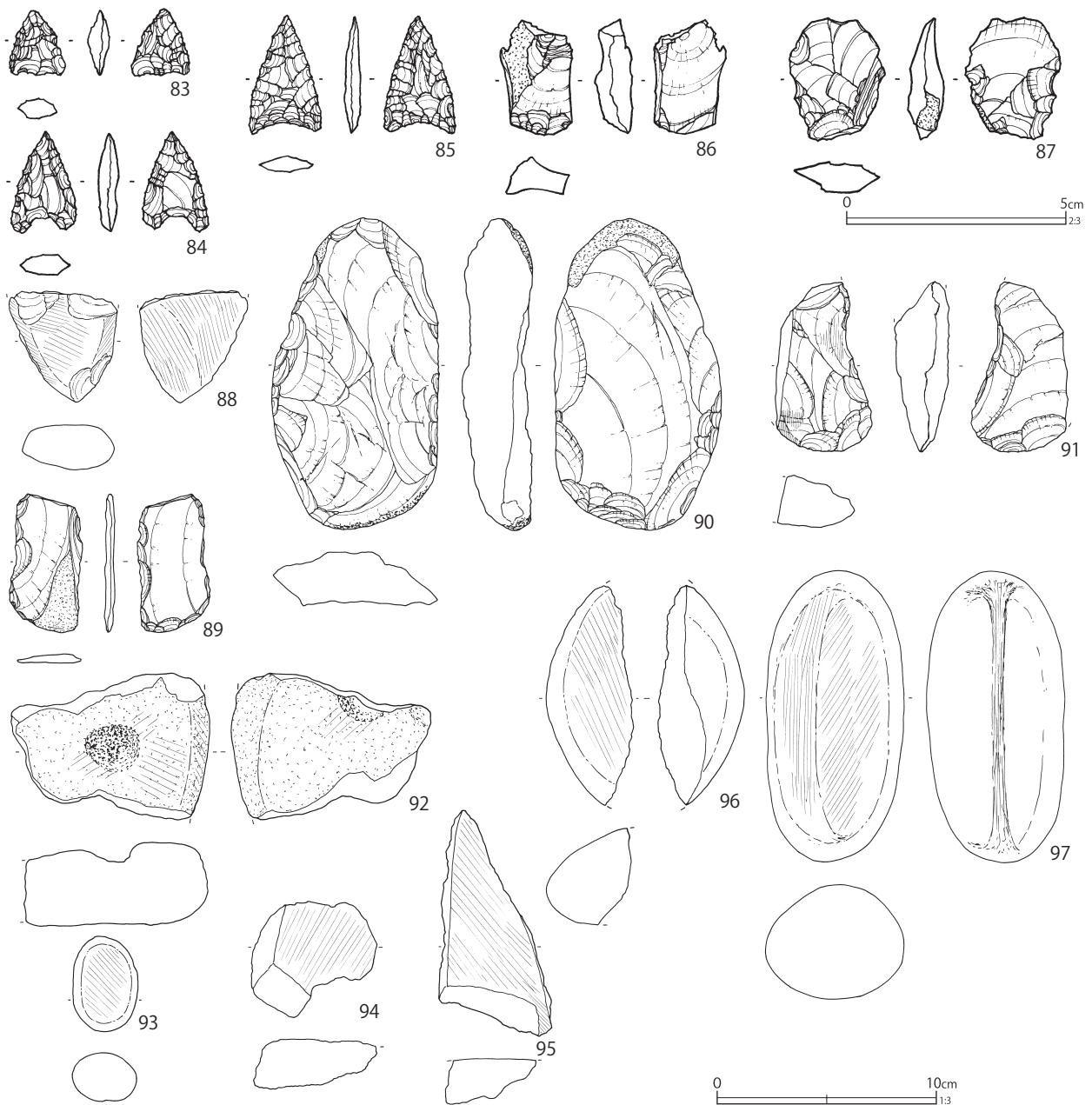
第16図 第6号住居跡出土遺物（3）

4は深鉢形土器で、胴下部から底部にかけて遺存している。地文は無節Lで、横位に施文されている。底径8cm、現存高9cmである。胎土は砂粒を多く含み、色調は暗褐色である。

第15図5～53、第16図54～81は土器の破片資料である。

5は半截竹管により上下対向の鋸歯文が描かれた有尾式土器で、胎土には纖維を含んでいる。

有文土器では、6～37が諸磯a式と考えられ、無纖維の土器である。6は米字文が施文された土器で、波頂部下の円形刺突文を中心に、半截竹管による文様が施文されている。7・8・10～



第17図 第6号住居跡出土遺物（4）

14・18も同様の土器である。15・17・18は沈線で区画された幅狭い横帯間に鋸歯状の沈線文が施文され、15には円形刺突文が垂下している。18は縦区画間がさらに横区画され、対向する鋸歯状の沈線文が施文されており、接点には円形刺突が施されている。19～22・26は肋骨文の土器である。19～22は垂下する円形刺突文間に、櫛状工具により斜行する条線が施文されている。26は半截竹管の平行沈線による施文である。23

～25・27～29は小波状文が施文された土器で、24・25は、半截竹管文で文様帶が区画されている。30～34は口縁と並行する沈線文が施文された土器である。9は浅鉢形土器で、半截竹管による爪形文を持ち、赤彩されている。35は鉢形土器で、口唇端部が外反し、直下に爪形文が廻っている。

36・37は単位文化した木の葉状文の土器で、諸磯a式新段階であろう。

38～44は諸磯b式古段階の土器である。やや

幅広い爪形文を有し、42は一部が浮線文で、押圧が加えられている。

45～49は諸磯b式新段階の浮線文土器である。47は屈曲部に貫通穴が廻る浅鉢形土器であろう。

50～53は浮島式土器である。50は半截竹管、51・52は貝殻腹縁文が施文されている。

54～80は縄文施文の土器を一括した。54～59には円形刺突が施されている。75は諸磯b式新段階の沈線文の土器であろう。

81は浅鉢形土器の底部である。

第16図82は土製円盤である。

第17図83～97は出土した石器である。83～85は石鏃である。84・85の基部は浅い抉りが入る。86は楔形石器である。表面に自然面が残存している。87は石鏃の未成品で裏面に一次加工面が大きく残っている。88は磨製石斧の破片を、再利用している。89～91は打製石斧である。いずれも調整は粗雑である。92は石皿の破片で、両面に凹部が認められる。93～97は磨石である。

第9号住居跡（第18～22図）

調査区東側のH・I-10・11グリッドに位置する。重複する第10号住居跡に後続し、第1・2号埋甕に先行する。平面形態は縦長の楕円形を呈し、南側を入り口として、主軸方位はN-6°-Eである。主軸方向の長さ7.37m、直交軸方向の長さ5.64m、壁高0.5mを測る。覆土は壁際から順に自然堆積した様子が観察できた。

ピットは11基検出された。ピットの規模（長径m×深さm）は、P1(0.32×0.19)、P2(0.36×0.80)、P3(0.70×0.52)、P4(0.42×0.55)、P5(0.64×0.51)、P6(0.34×0.57)、P7(0.34×0.65)、P8(0.28×0.36)、P9(0.50×0.26)、P10(欠番)、P11(0.38×0.37)、P12(0.40×0.69)である。主柱穴はP6・9・11で、北西の主柱穴は土壙等に壊された可能性がある。北西方向にはピットは検出できなかった。

炉跡は住居跡の北側に検出された。径0.46m

を測る円形の地床炉で、底面までの深さは0.09mを測る。底面にごくわずかに焼土が検出されており、炉床の可能性がある。

住居跡の北西側に土壙1基が検出された。北西-南東方向に長軸を持つ楕円形で、長軸1.0m、幅0.88m、深さ0.6mを測る。北東側に浅いテラス状の段を持つ。用途・性格は不明であるが、主柱穴を壊した可能性がある。

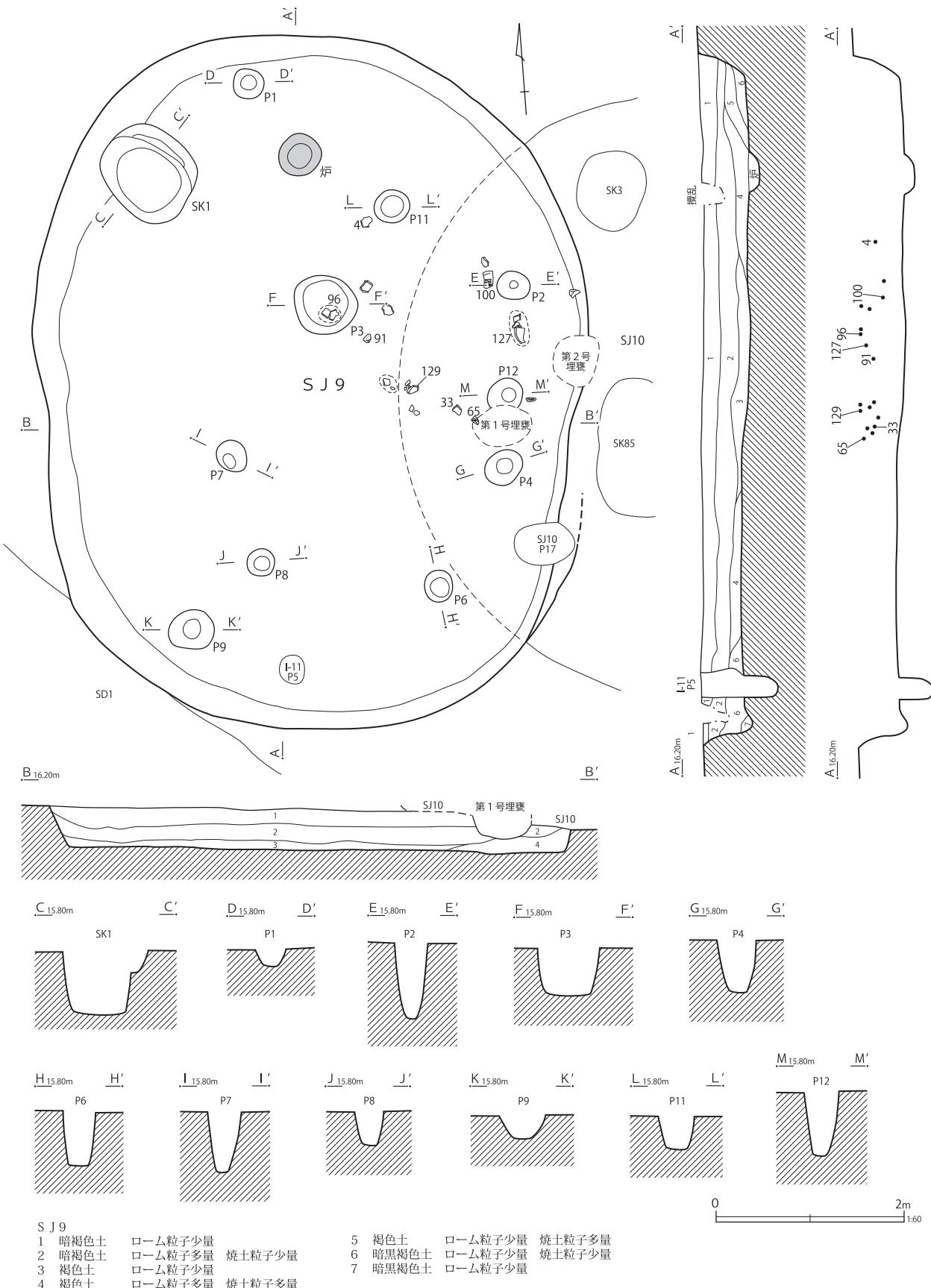
出土土器の時期は前期後葉と中期後半に大別されるが、前期後葉が主体的である。中期後半の土器は住居跡の東側に集中して一定量出土しており、該期の遺構が存在したと考えられる。しかし、第9号住居跡の東側は後期初頭の第10号住居跡と重複していることから、該当する遺構は、第10号住居跡の構築によって壊されたと思われる。中期後半の土器は第21図に一括して図示した。

第19～22図は出土した遺物である。

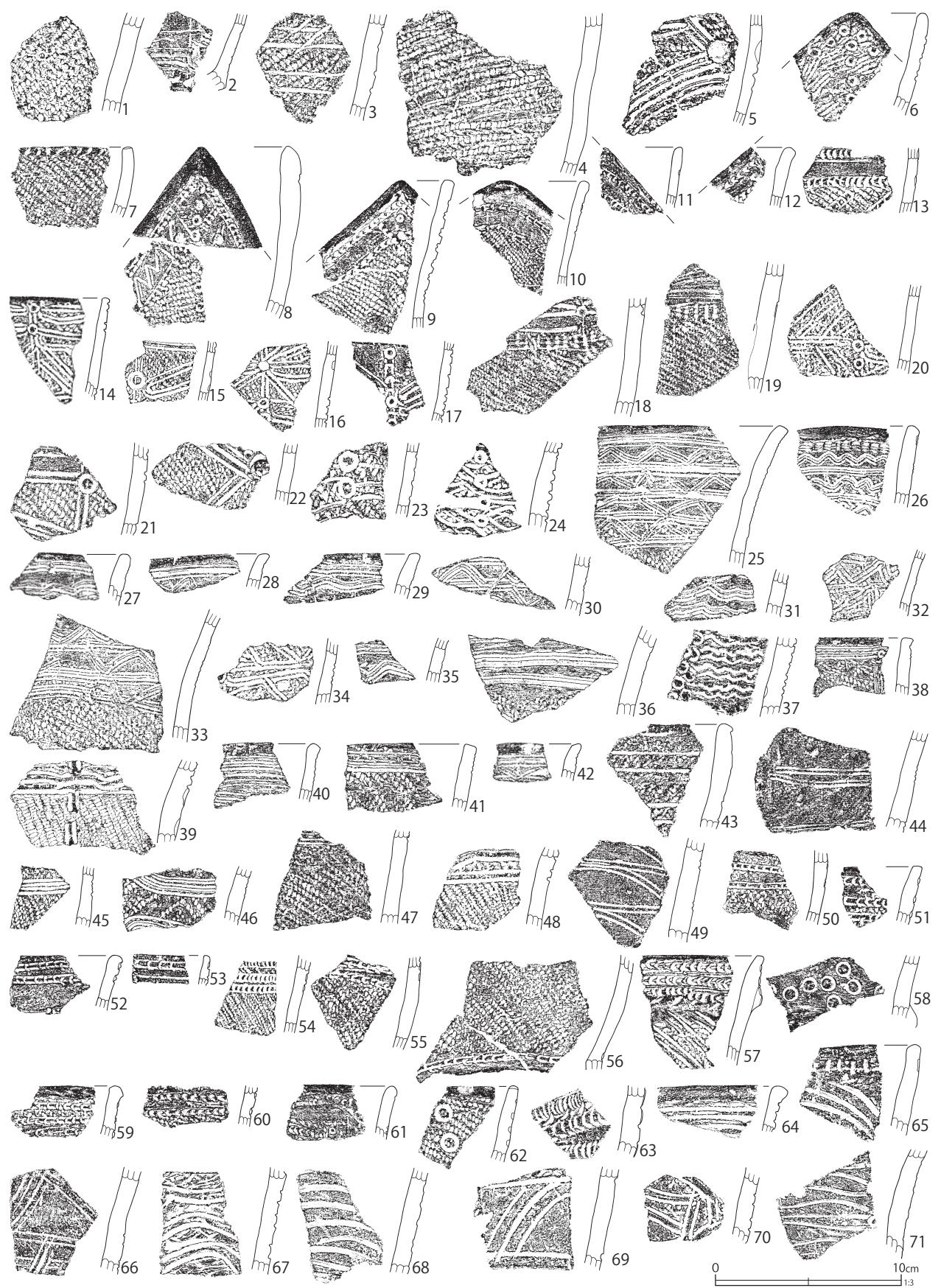
第19図1～71、第20図72～94は住居跡に伴うと考えられる前期の土器を主体としている。

1～7は黒浜式土器で、胎土に纖維が含まれる。1は多層のループ文が施文されている。2は肋骨文、3は格子目文と考えられる土器である。4は附加条縄文により、菱形状の意匠が施された可能性がある。5は米字文の土器であろう。6は波状口縁で、波頂部から円形刺突文が垂下している。

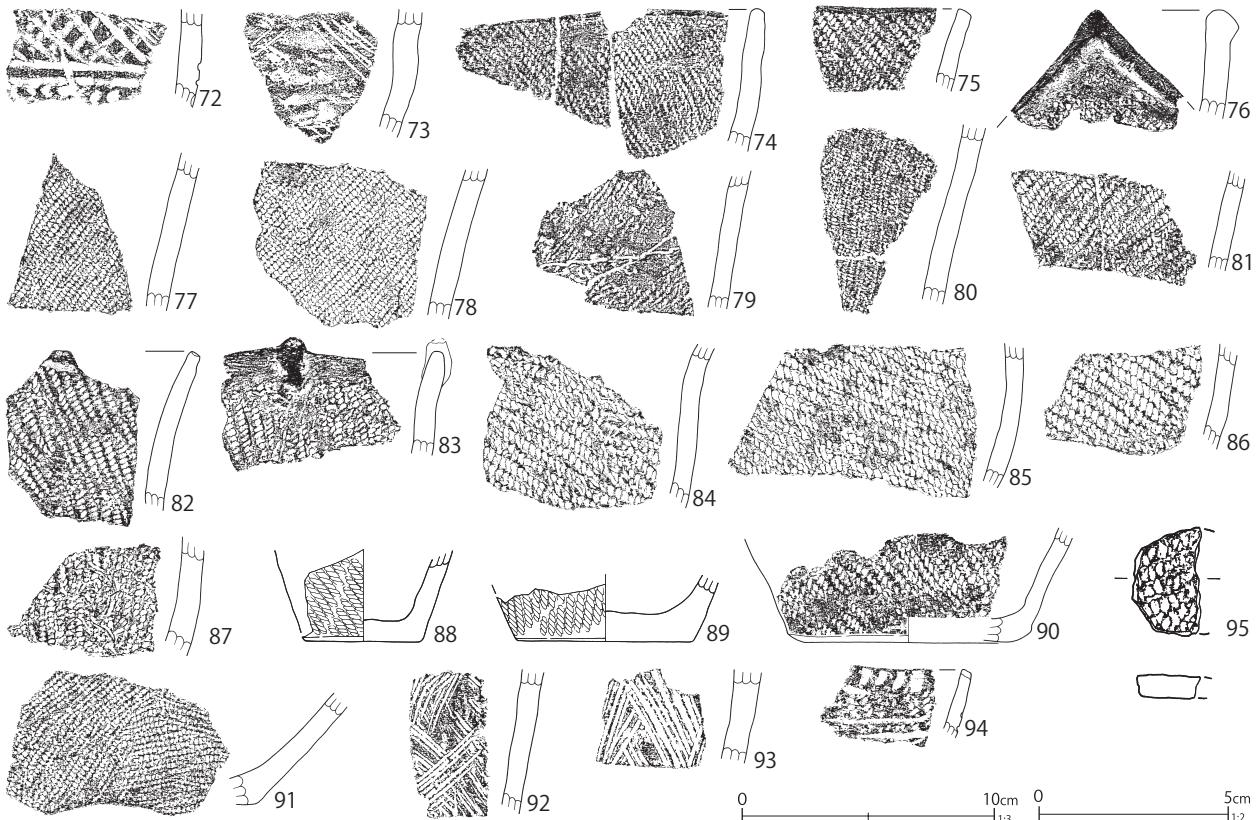
8～62は諸磯a式の有文土器で、纖維は含んでいない。8～12は波状口縁で、口唇に沿って幅狭い文様帯をもち、8には鋸歯文が施文されている。8・9は波頂部から円形刺突文が垂下されている。13～22、38は米字文の土器と考えられる。13は爪形文、他は平行沈線文により文様が描かれている。14～18、20～23には、縦位と横位の沈線により区画され、区画間に斜行沈線で米字文が描かれている。文様と区画線接点には、円形刺突が施されている。23も同様の土器と推定される。24は小波状文の可能性がある。38は現存部位には米字文の痕跡がないが、縦に



第18図 第9号住居跡



第19図 第9号住居跡出土遺物（1）



第20図 第9号住居跡出土遺物（2）

垂下する沈線から同類と想定した。25～37・39・42は鋸歯文が施文された土器である。施文は櫛歯状もしくは半截竹管で、器面を横走する幅狭い横帶間に、鋸歯文が施文されている。37には縦位の円形刺突が施文されている。39は半截竹管による縦長の刺突が垂下されている。40・41・43～48は、横位に平行沈線ないしは櫛歯状工具による条線が施された土器で、文様の全容は不明である。49は平行沈線と弧状の沈線が施文されていることから、木の葉文と考えられる。50～56・59～61は半截竹管による爪形文で区画が描かれた土器で、残存部位にモチーフは認められない。57は爪形文下が肥厚し、斜位の刻みが施されており、やや新しい様相を有している。58・62は円形刺突が施文されるが、58は地文を持たず、やや新しい様相を示すと思われる。63はやや幅広い爪形文が施文され、諸磯b式古段階と考えられる。

64～71は、単沈線もしくは半截竹管による平

行沈線で、弧状や曲線的なモチーフが描かれており、浮島式土器と考えられる。

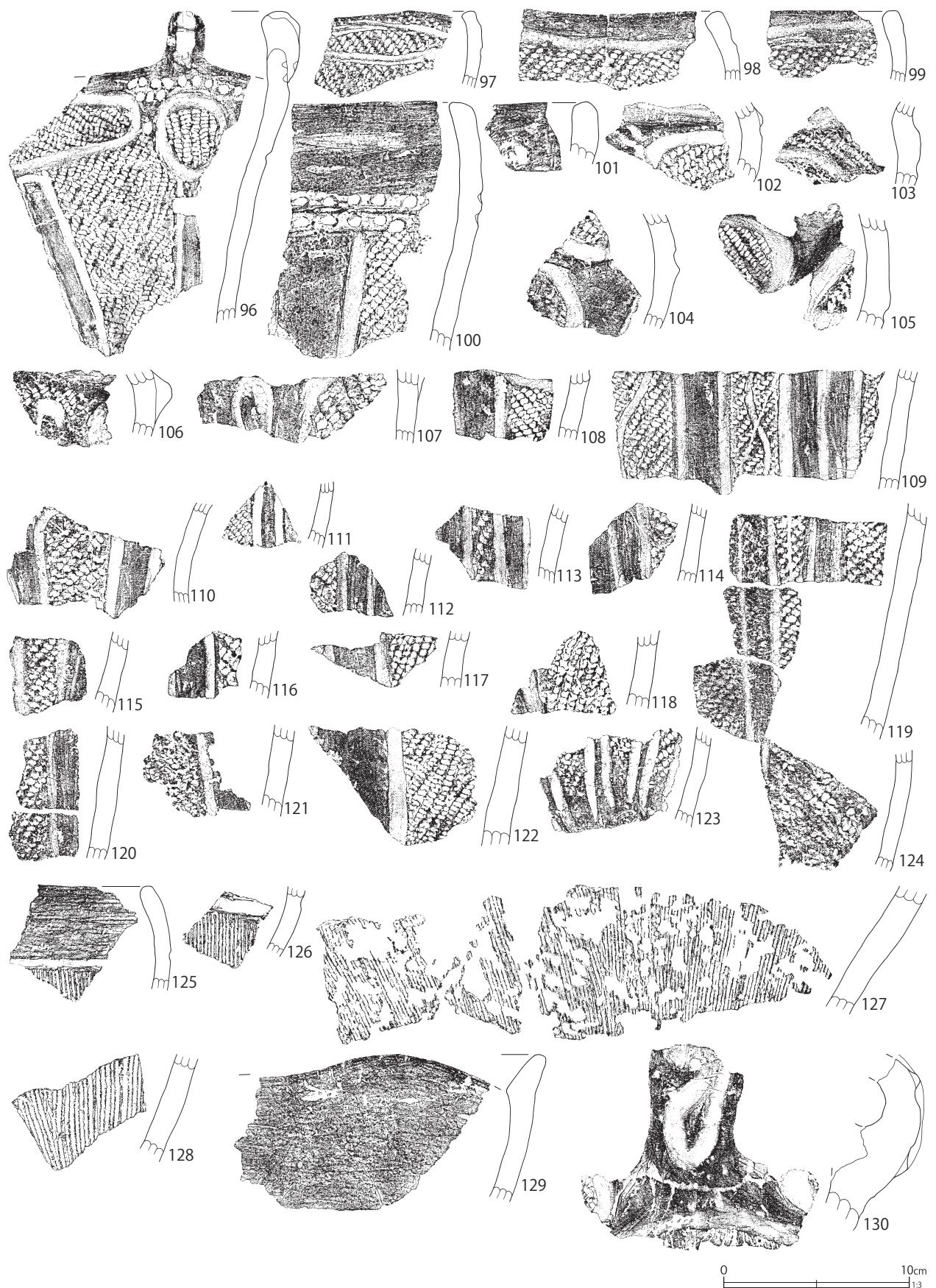
72・73は早期中葉の沈線文系土器で、72は田戸下層式、73は田戸上層式と考えられる。

74～91は縄文のみ施文される土器を一括した。

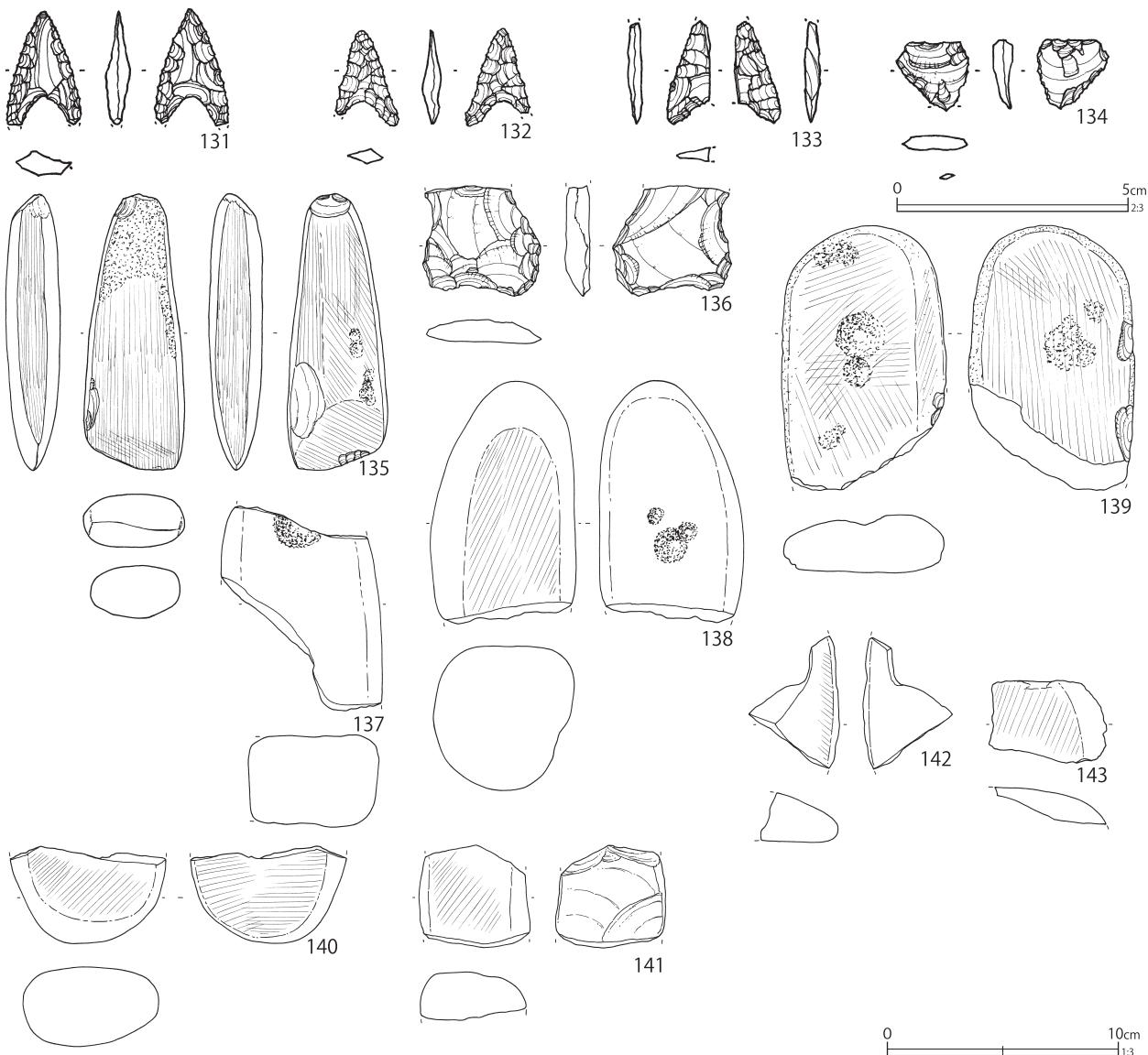
92～94は十三菩提式期と考えられる。

第20図95は土製円盤で、諸磯a式期の深鉢形土器の胴部片が加工されている。

第21図96～130は中期後半の加曽利EⅢ式期の土器である。96～124は深鉢形土器である。96～105は口縁部、106・107は頸部から胴上部、108～124は胴部の破片である。土器の口縁部文様帶は簡略化され、96や97のように沈線で円形や楕円区画文が施文されるのみとなっている。100では口縁部文様ではなく、無文帶となっている。胴部文様は2本または3本1組の沈線で、この時期の特徴である磨消懸垂文が施文されている。地文は単節RLまたはLRの縄文が施文されている。単節RLは96～100・103～106・109・



第21図 第9号住居跡出土遺物（3）



第22図 第9号住居跡出土遺物（4）

110・113・115・117～120・122・123・他は単節LRの縄文が施文されている。

125～129は浅鉢形土器である。125～128の胴部は条線が施文されている。

130は両耳壺の把手部分である。

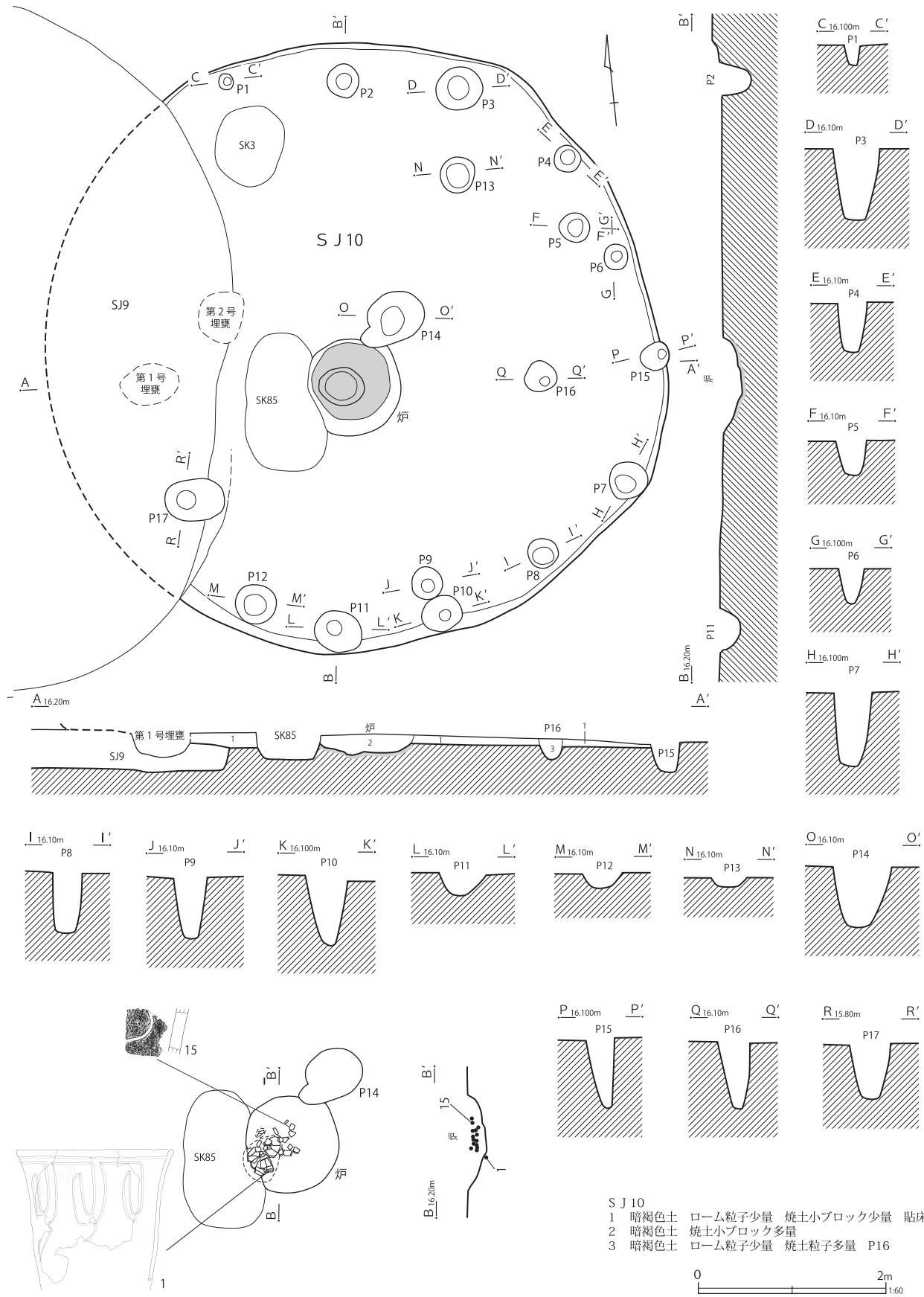
第22図131～143は出土した石器である。131～133は石鏸で、いずれも丁寧に加工され基部はやや深く抉りが入っている。134は石錐で、素材となる剥片に最小限の加工が施されている。135は磨製石斧である。定角式に近いが、側縁はやや丸みを帶びている。基部には敲打痕が認められる。136は打製石斧である。刃部のみ残存して

いる。137～143は磨石で、137～139は凹部が認められる。

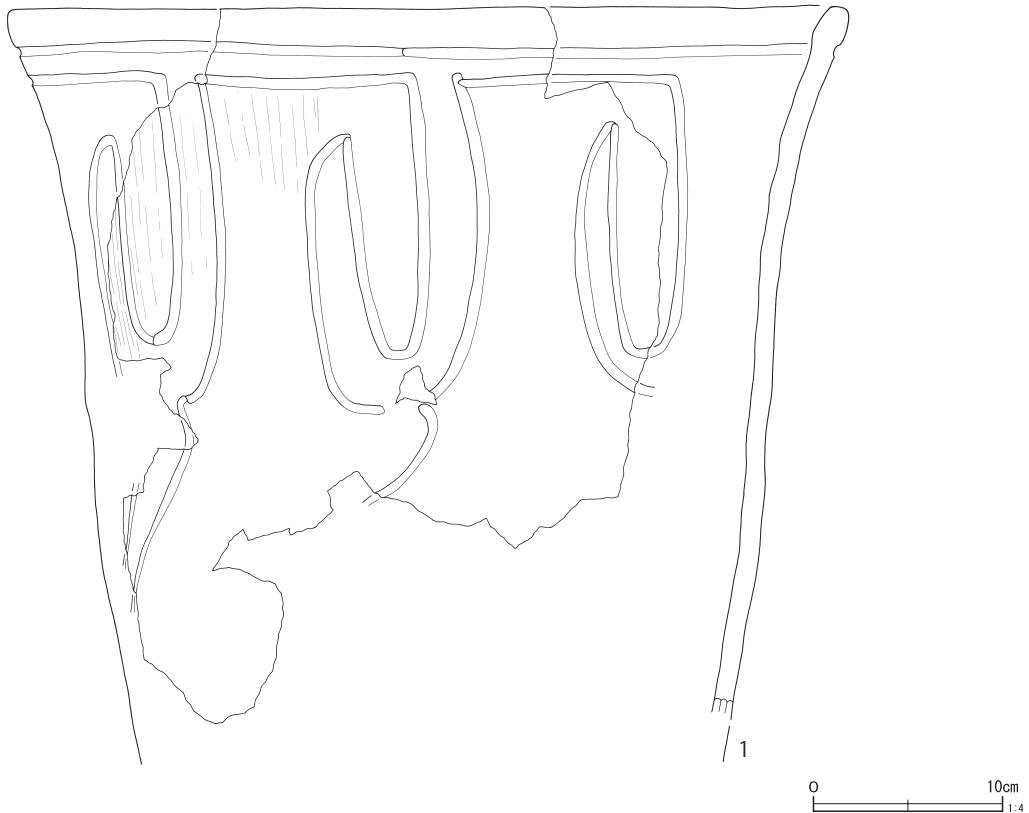
第10号住居跡（第23～25図）

調査区東側のH・I-11グリッドに位置する。第9号住居跡・第3号土壙・第85号土壙と重複し、いずれの遺構よりも先行する。平面形態は円形を呈し、南側を入り口と考えれば主軸方位はN-7°-Eである。直径約6.3m、壁高は最も高い部分で0.1mを測る。第1層は貼床の一部と考えられ、床面が露出した状態で確認された。

ピットは17基検出された。ピットの規模（直径m×深さm）は、P1(0.18×0.22)、P2(0.36



第23図 第10号住居跡



第24図 第10号住居跡出土遺物（1）

$\times 0.35$)、P 3 (0.50×0.47)、P 4 (0.38×0.50)、P 5 (0.33×0.35)、P 6 (0.37×0.36)、P 7 (0.41×0.77)、P 8 (0.32×0.64)、P 9 (0.34×0.66)、P 10 (0.43×0.73)、P 11 (0.52×0.23)、P 12 (0.44×0.18)、P 13 (0.38×0.09)、P 14 (0.74×0.63)、P 15 (0.3×0.7)、P 16 (0.34×0.68)、P 17 (0.62×0.56) である。15基のピットが壁際に配されている。また、P 14は炉に隣接して住居の中央に位置している。これを所謂センターピットと仮定すれば、壁際の支柱穴を伴う竪穴住居の構造が推定され、また、掘り込みの浅さから、平地式住居の可能性も考えられる。さらに、壁際のピットを、P 13・5・16・9と P 1・2・3・4・6・15・7・8・10・11に二分すると、住居跡の建て替えなどの行為が想定できる。

炉跡は住居跡の中央やや南寄りに検出された。径 1.04 m を測る円形の地床炉で、中央に径約 40 cm、深さ約 0.05 m の凹みをもつ。地山を掘りくぼめた箇所は全面的に被熱による焼土化が見られ

る。炉跡から出土した深鉢（第24図1）は、炉床の上から検出されており、埋甕炉の可能性は低い。この土器から、住居跡の時期は後期前葉の堀之内1式期と考えられる。

第24・25図は出土した遺物である。

第24図1は炉跡から出土した土器で、器形を復元できた唯一の土器である。深鉢形土器の口縁部から胴部が残存している。器面は荒れており、調整痕は明確ではない。文様は沈線で施文され、口縁部は沈線を巡らして狭い無文となっている。胴上部はJ字文、胴下部の文様はJ字文と連結して施文されるが、文様は器面が荒れておりはっきりしない。推定口径 44.5 cm、残存高 38 cm である。

第25図2～27は出土した破片土器である。

2～6は中期後葉の土器である。2は把手部分で、波頂部から口縁部にかけて隆帯の渦巻き文が施文される。3は胴部の破片で微隆起状の隆帯で文様が施文されている。4・5は連弧文系の土器で3本1組の沈線が波状に施文される。2・3は

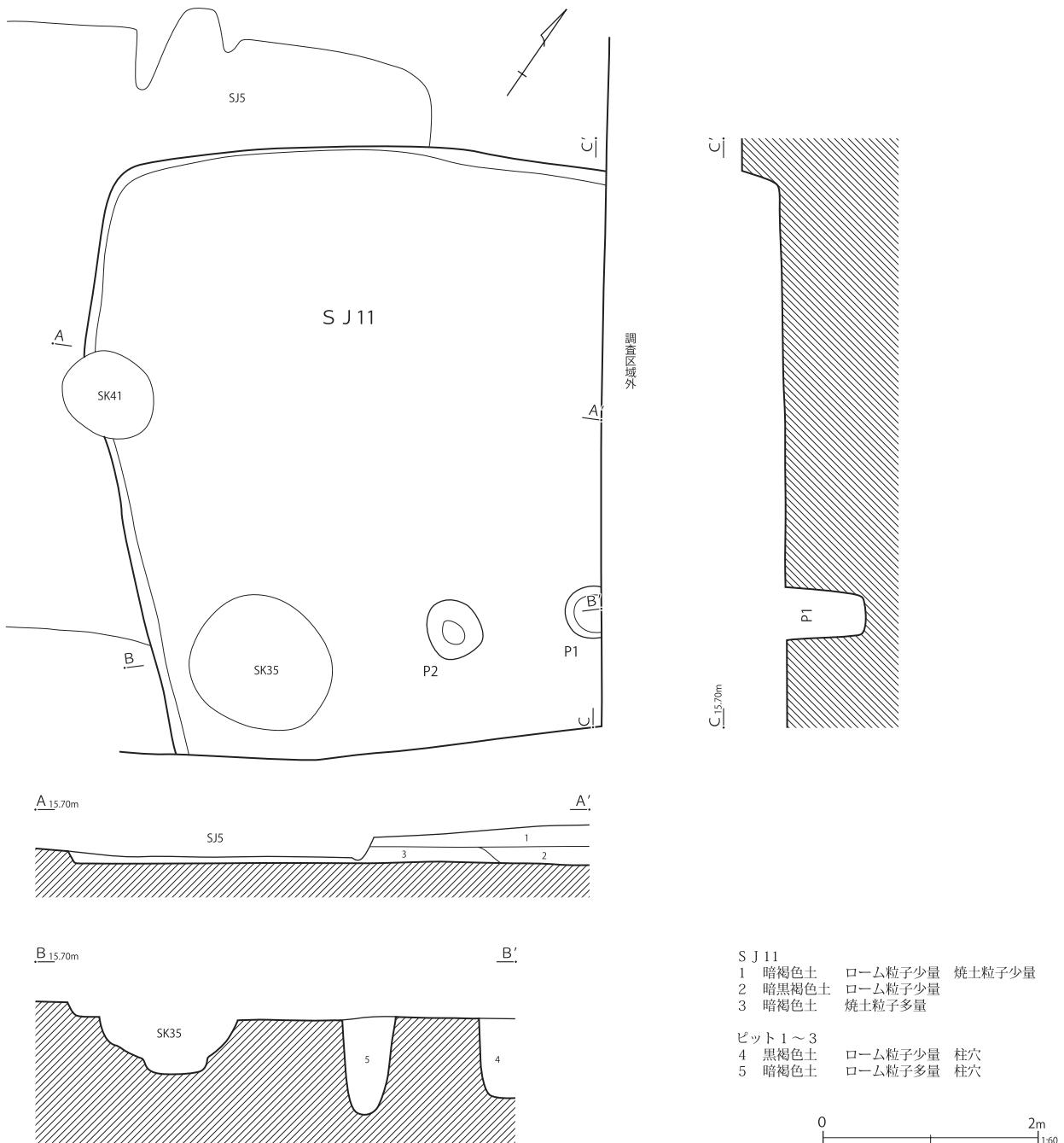


第25図 第10号住跡出土遺物（2）

単節 RL の縄文を、4・5は撚糸文 R を地文としている。6は櫛歯状の条線が施文されている。

7～27は後期初頭から前葉の土器である。7～17は称名寺式系の文様を施文する土器である。

9は沈線文間に条線、10～14は列点文を施文している。18・19は波状口縁の頂部に円形刺突文を施文しそこから隆帯を垂下させている。20は器面全体に地文である単節 LR の縄文を施文している。



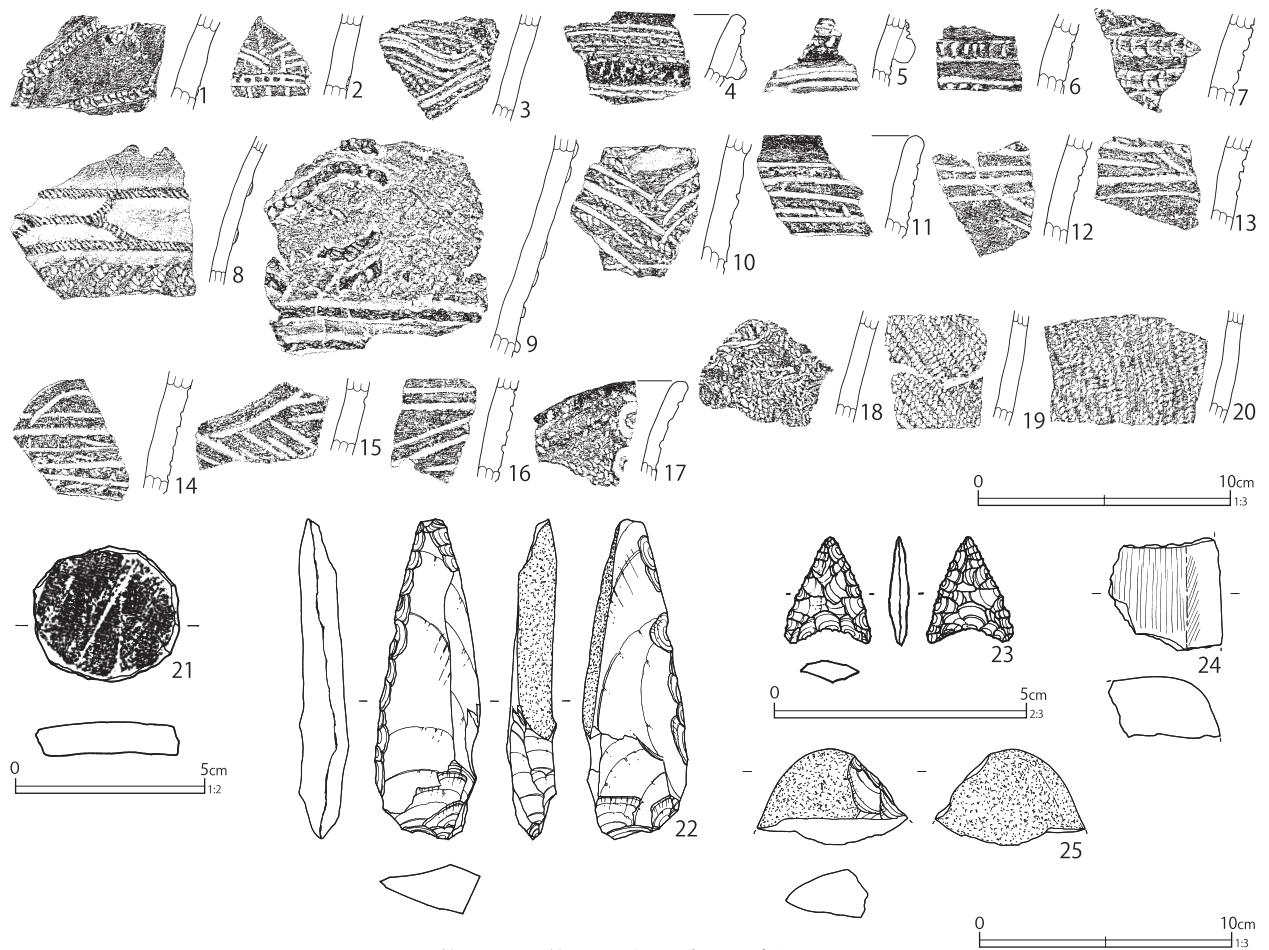
第 26 図 第 11 号住居跡

第 25 図 28 ~ 36 は出土した石器である。28 は使用痕のある剥片である。29 ~ 32 は打製石斧である。29 は薄い剥片を利用しており、裏面に大きく 1 次剥離面が残っている。33・34 は磨石である。35 は敲石である。表面の一部のみが残存する。側縁に敲打痕が認められる。36 は石皿の破片である。

第 11 号住居跡（第 26・27 図）

調査区東端の I・J - 12 グリッドに位置する。

第 35・41 号土壙、古墳時代後期の第 5 号住居跡と重複し、そのいずれよりも先行する。平面形は方形と推定される。北東辺および南東辺が調査区外に存在する。残存長は長軸 5.6 m、短軸 4.6 m、壁高は 0.25 m を測る。住居覆土は、西側が第 5 号住居跡に掘削されて薄くなってしまっており、堆積の状況を捉えがたいが、床面直上に堆積した第 3 層に焼土粒子が多量に混入し、一方で床面に被熱痕が



第27図 第11号住居跡出土遺物

ないことから埋戻し行為が想定される。

ピットは2基検出された。ピットの規模（長径m×深さm）は、P 1 (0.48×0.72)、P 2 (0.56×0.88)である。深さからいざれも柱穴と思われる。また、2基に隣接する縄文時代中期の第35号土壙の底部中央に凹みが残されており、柱穴の一部の可能性がある。

炉跡は検出されなかった。

出土した遺物は少量であるため明確ではないが、時期は前期後葉の諸磯b式期と考えられる。

第27図1～25は出土した遺物である。

1～20は出土した土器片である。1は無文地に、爪形文が施文されており、円形刺突も認められることから、木の葉文もしくは米字文の土器と推定される。2は木の葉文、3は鋸歯状文が施文される土器であろう。

4～5は隆帯が貼付され、隆帯上に刻みが施さ

れていることから、諸磯a式新段階と考えられる。

6～7はやや幅広い爪形文を持ち、諸磯b式古段階であろう。

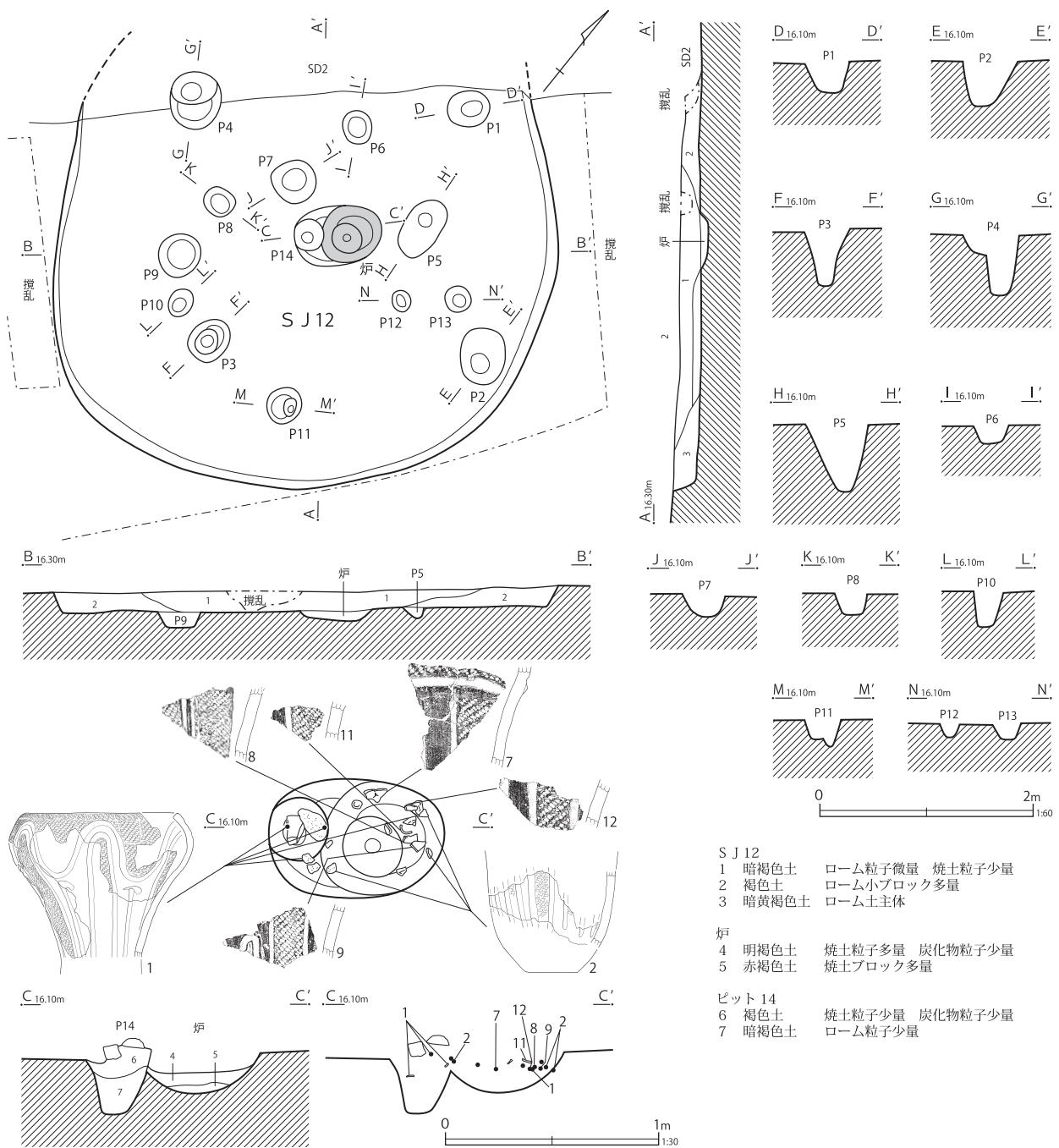
8は平行する浮線間に、上下対向する弧状の浮線が貼付され、浮線上には密な刻み目が施されている。浮線下には多条の原体LRが横走施文されており、北白川下層式土器である。器厚は4mm程度と薄く、良質な胎土である。

9は諸磯b式新段階の浮線文土器である。地文上に、浮線により曲線的なモチーフが描かれている。浮線には押圧が施されている。

10～16は、半截竹管による平行沈線で文様が描かれており、残存部位に地文は見受けられない。浮島式土器で、9と比較すると砂質の胎土である。

17～20は縄文施文の土器で、17は波頂部から円形刺突が垂下されている。

21は浮島式の土器片が用いられた土製円盤で



第28図 第12号住居跡

ある。

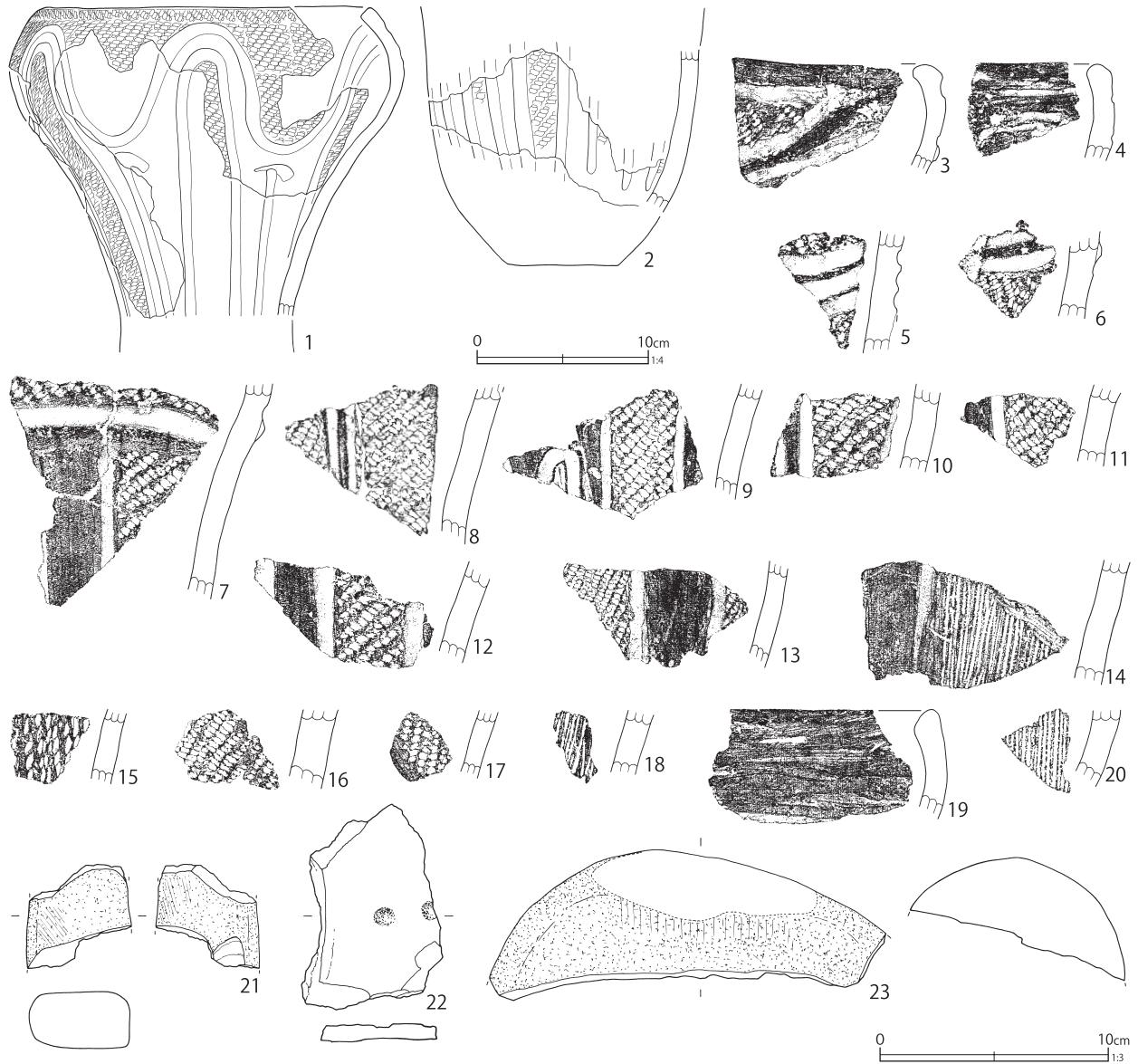
22～25は出土した石器である。22は石鏃である。丁寧な調整が施され、側縁は鋸歯状に近い。23は打製石斧である。右側縁に大きく自然面を残している。24は敲石で器面全体に敲打痕が認められる。25は磨石である。

第12号住居跡（第28・29図）

調査区北側のD・E-7グリッドに位置する。

重複する近世の第2号溝跡に先行する。平面形態は橿円形ないし不整円形と思われ、主軸方位はN-40°-Wと推定される。長軸の残存長は3.90m、短軸4.72m、壁高は最大で20cmを測る。覆土は、壁際から順に自然堆積した様子が観察できた。

ピットは14基検出された。ピットの規模（長径m×深さm）は、P 1 (0.41 × 0.30)、P 2 (0.53 × 0.42)、P 3 (0.42 × 0.55)、P 4 (0.54 ×



第29図 第12号住居跡出土遺物

0.57)、P 5 (0.57 × 0.63)、P 6 (0.32 × 0.18)、P 7 (0.4 × 0.22)、P 8 (0.29 × 0.2)、P 9 (0.41 × 0.14)、P10 (0.27 × 0.33)、P11 (0.35 × 0.26)、P12 (0.21 × 0.13)、P13 (0.25 × 0.15)、P14 (0.45 × 0.26) である。P 1・2・3・4 が主柱穴と考えられる。

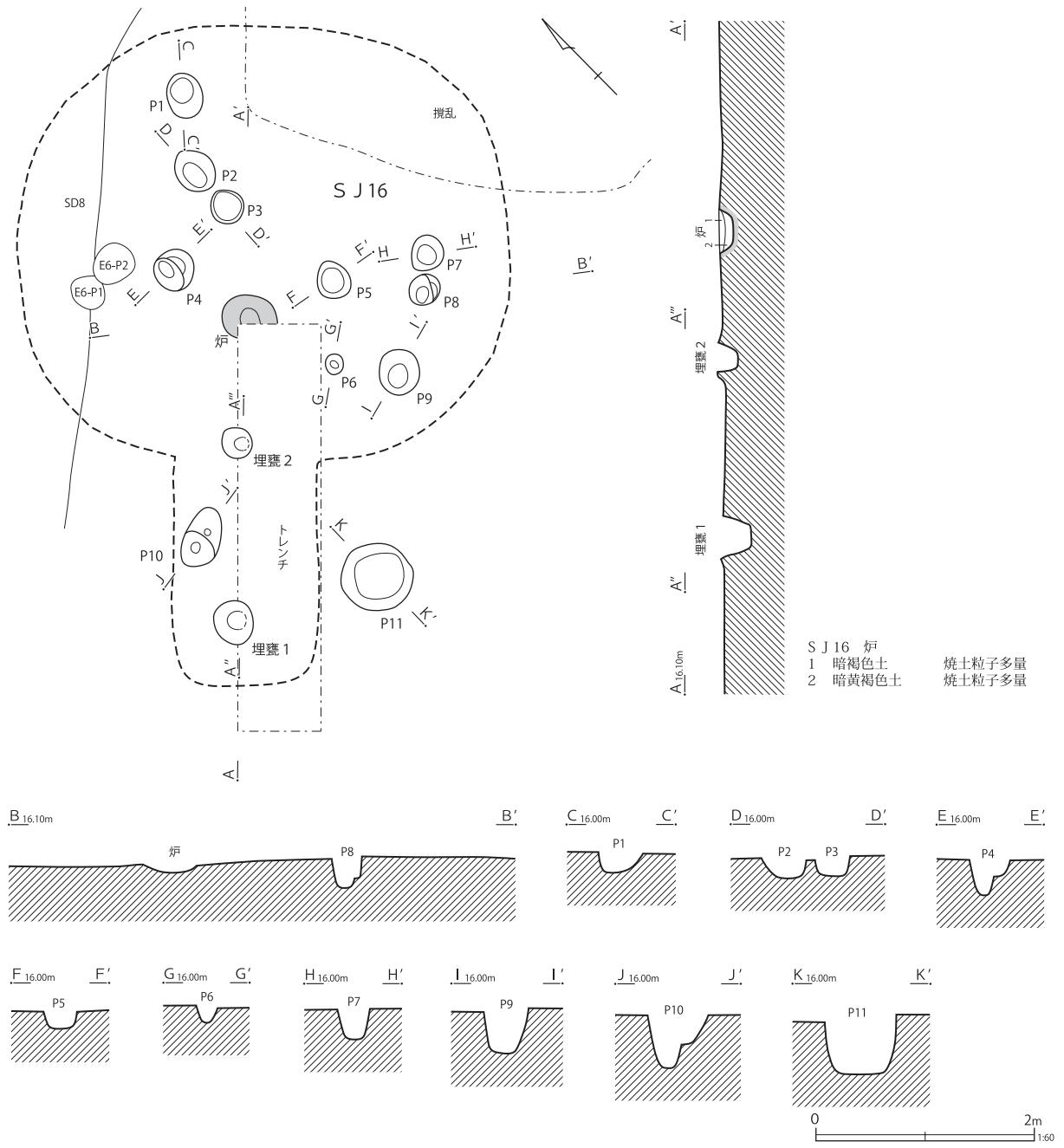
炉跡は住居跡の中央に検出された。径約 0.5 m の円形の地床炉で、底面までの深さは 0.19 m を測る。底面は南方がやや凹んでいる。側面および底面の全体が焼土化しており、火床面が明確である。

炉跡出土の土器から、住居跡の時期は中期後半

の加曾利 E III式期である。

第29図 1～23 は出土した遺物である。

1、2 は器形復元できた深鉢形土器である。1 は吉井城山類の土器で、口縁部下に最大径を持つ。胴中央で大きく括れる。底部は欠損している。口縁直下に幅を狭く横方向に地文を 1 段廻らし、口縁部文様としている。文様は幅広の沈線で施文される。胴上部は波状文が施文される。胴上部から下部にかけて波頂部に入れ込むように逆 U 字文が施文される。波底部下には、蕨手文状の懸垂文が施文される。地文は波状文から口縁部側と逆 U 字文内に施文されており、他は磨消縄文となって



第30図 第16号住居跡（1）

いる。地文は単節RLの縄文である。推定口径は19.0cmである。残存高は18cmである。2は胴下半部のみ残存している。2本1組の幅広の磨消懸垂文が施されている。地文は単節RLの縄文で縦方向に施されている。残存高は10cmである。

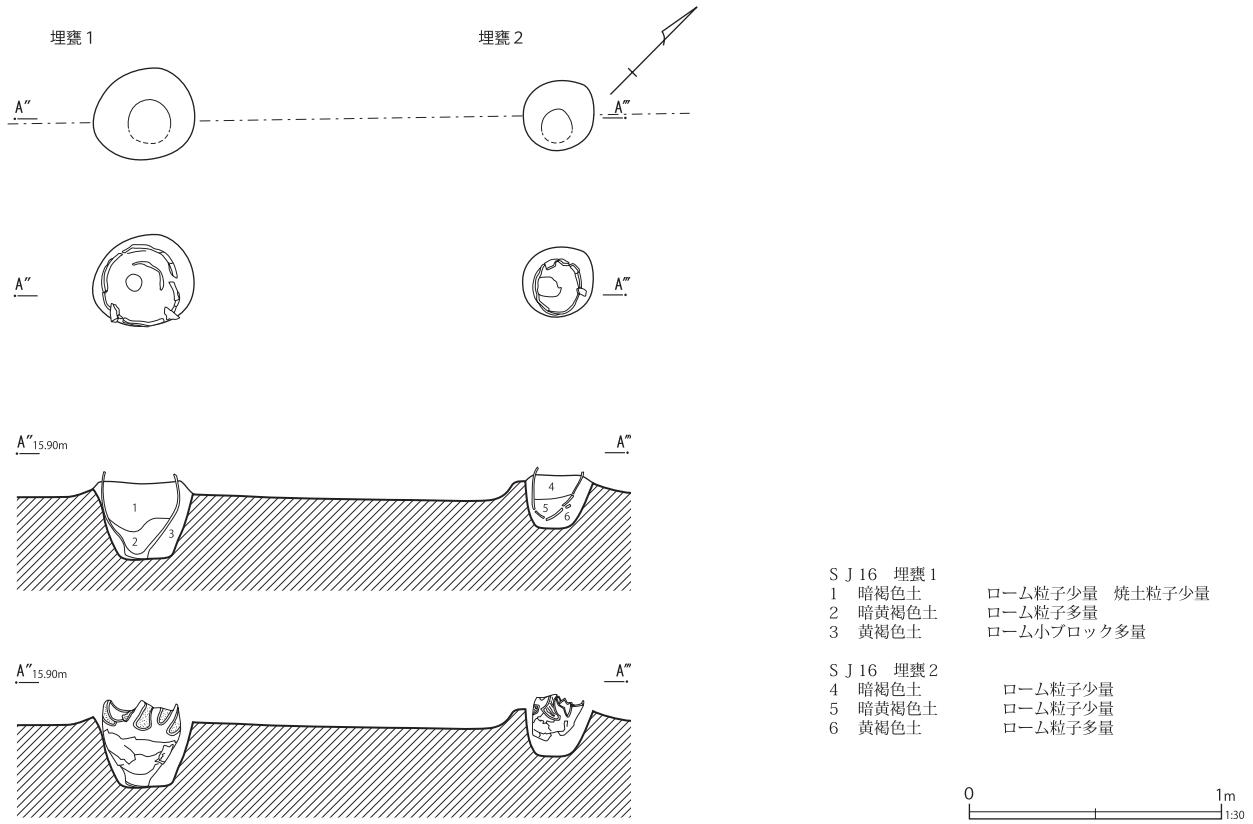
3～20は土器片である。3～7は口縁部から胴上部の破片である。8～14は胴部の破片で、沈線で磨消懸垂文が施文されている。3～13の地文は単節RLの縄文である。14の地文は条線で、

曾利系土器と考えられる。15～18は地文のみが施文されるもので、15は撚糸文L、16・17は単節RLの縄文、18は条線が施文されている。

第29図21～23は出土した石器である。

第16号住居跡（第30～31図）

調査区北西側のE-6グリッドに位置し、近世の第8号溝跡に壊されている。掘り込みが確認されず、当初は住居跡と認識できなかつたが、2基の埋甕と炉が同一線状に検出されたことから柄鏡



形住居跡と想定した。東側は木根による搅乱を受け、北側は一部を第8号溝跡によって壊されている。主軸方位はN-47°-Eである。残存長は第1号埋甕～P1まで5.12m、直交軸方位の残存長はP4～P7まで2.7mを測る。壁は検出されず、床面が露出していた。

ピットは11基検出されている。ピットの規模(直径m×深さm)は、P1(0.4×0.18)、P2(0.42×0.2)、P3(0.34×0.17)、P4(0.38×0.31)、P5(0.36×0.18)、P6(0.18×0.15)、P7(0.34×0.27)、P8(0.3×0.27)、P9(0.42×0.41)、P10(0.58×0.48)、P11(0.66×0.52)である。

炉跡は住居跡の中央から検出された。径約50cmのわずかに扁平な円形の地床炉で、底面までの深さは12cmを測る。炉は底面から壁面まで全面的に焼土化している。

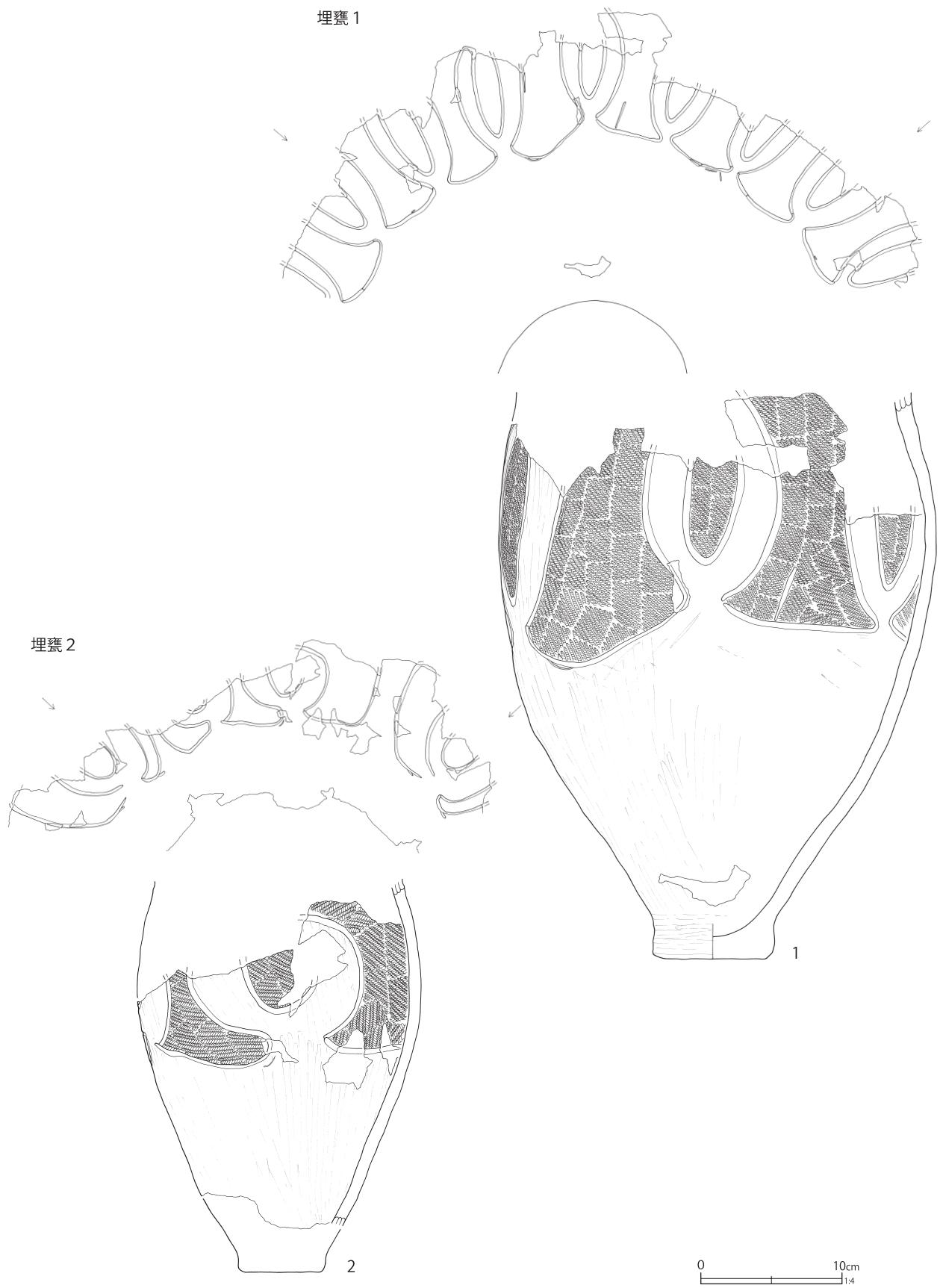
柄鏡形住居の張出し部先端から埋甕1(第32図1)、張出部と主体部の連節部から埋甕2(第32図2)が検出された。

埋甕1は、径0.8m、深さ0.28mの円形の小穴中に直立した状態で埋設されていた。底部から胴部は完存するが、口縁部は失われている。

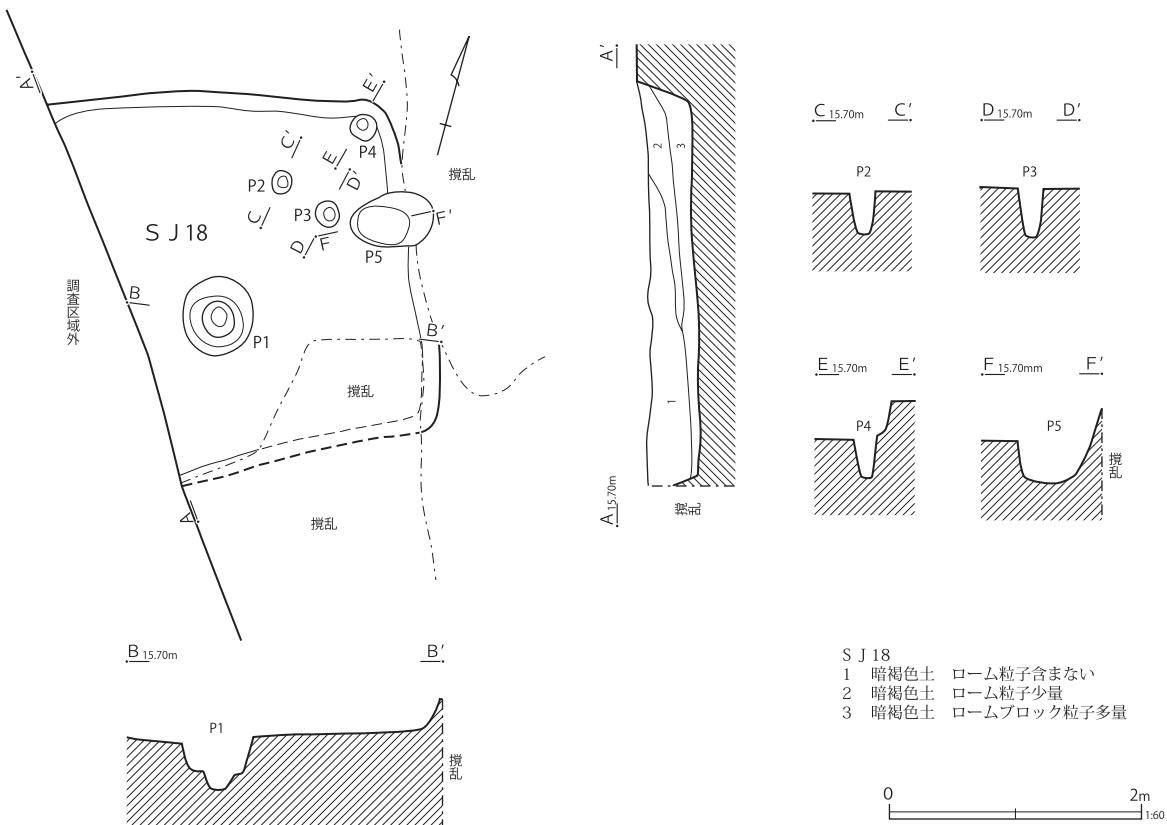
埋甕2は、径0.55m、深さ0.18mの円形の小穴中に直立した状態で埋設されていた。底部は打ち欠かれている。口縁部も失われており、胴部のみが残存する。

埋甕として使用された1・2以外に明確に住居跡に伴う遺物は出土しなかった。住居跡の時期は後期初頭の称名寺I式期である。

1、2ともに関沢類型の土器で、いずれも口縁部は失われ胴部文様が残っている。1の文様はJ字文を反転させたものが沈線で区画されたもので、6単位施文されている。文様内には単節LRの縄文を施文されている。2の文様は反転させたJ字文や玉抱文と考えられ、J字文1単位、玉抱文2単位の3単位と考えられるが文様は崩れ気味で明確ではない。文様内には太細交互に条を撚り合わせた単節LRの縄文が文様の形状に合わせて充填さ



第32図 第16号住居跡出土遺物



第33図 第18号住居跡

れている。1の残存高は41cm、底径は8.5cmである。2の残存高は25cmである。

第18号住居跡（第33・34図）

調査区南西のJ-6・7グリッドに位置する。他遺構との重複はないが、東壁および南壁の多くが後世に搅乱され、西側は調査区外に延びている。平面形態は方形、南側を入り口と考えれば、主軸方位はN-13°-Wと推定される。主軸方向の長さは3.08m、直交軸方向の長さは2.78m、壁高は0.41mを測る。住居覆土は、壁際から自然堆積した様子が観察できた。

ピットは5基検出された。ピットの規模（長径m×深さm）は、P1（0.62×0.4）、P2（0.19×0.36）、P3（0.2×0.38）、P4（0.2×0.32）、P5（0.66×0.35）である。このうちP1は中央に径0.25m、深さ0.10mの円形の凹みをもつ。炉跡は検出されなかった。

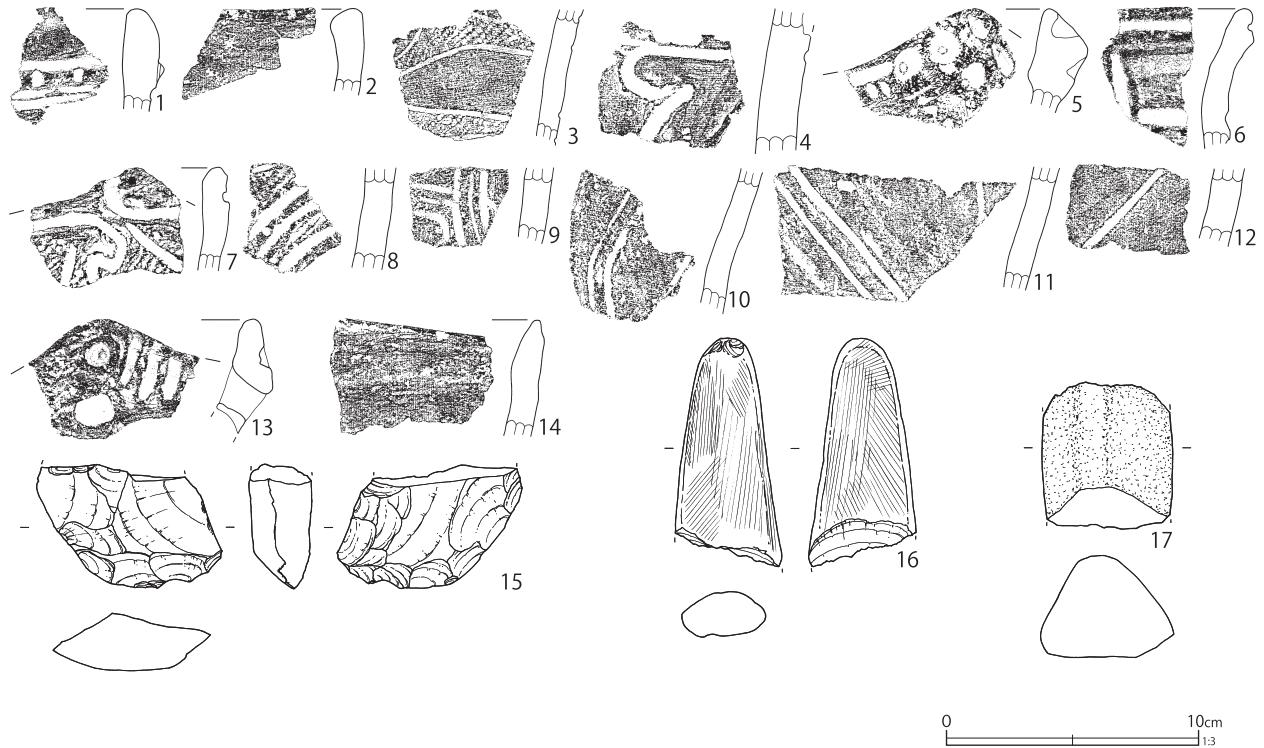
出土した土器から、住居跡の時期は後期前葉の堀之内1式期である。

第34図1～14は出土した土器で、いずれも小破片である。1～12・14は深鉢形土器の破片である。1・2は口縁部に狭い無文帶を持つ土器である。3は胴部片で、磨消懸垂文で横位や曲線的な区画文様が施文されている。区内には単節LRの縄文が施文されている。4は称名寺式系の文様が施文される胴部の破片である。5～7は口縁部の破片で、5は波状口縁で、波頂部に上下左右4個の盲孔が施文されている。肥厚する口縁部には盲孔を起点として沈線が巡らされている。6は平縁で、肥厚する口縁部に沈線が巡らされている。7は地文が施文される土器で、波状口縁の波頂部から胴部に蕨手状の懸垂文を垂下させている。地文は無節Lの縄文である。8～12は沈線のみが施文される胴部の破片である。14は口縁部の破片で無文である。13は浅鉢形土器の口縁部の破片である。

第34図15～17は出土した石器である。

第20号住居跡（第35・36図）

調査区中央のH・I-8グリッドに位置する。



第34図 第18号住居跡出土遺物

重複する第77号土壙に後続し、また古墳跡に先行する。住居跡の東側及び南側は古墳跡の周溝と前庭部によって失われているが、平面形態は橢円形ないしは不整円形と思われる。主軸方位はN—0°—Eと推定される。主軸方向の残存長は4.40m、直交軸方向の残存長は4.35m、壁高は0.4mを測る。住居覆土は、壁際から順に自然堆積した様子が観察できた。

ピットは10基検出された。ピットの規模(長径m×深さm)は、P1(0.48×0.4)、P2(0.3×0.24)、P3(0.28×0.18)、P4(0.26×0.15)、P5(0.36×0.28)、P6(欠番)、P7(0.36×0.28)、P8(0.25×不明)、P9(0.23×0.37)、P10(0.35×0.35)である。柱穴は壁際を巡るように配置されている。

炉跡は2基検出された。炉1は住居跡の中央北寄り、炉2は中央東寄りから検出された。炉1は南北に長軸を持つ橢円形の地床炉で、長軸0.82m、幅0.4m、深さは0.09mを測る。炉2は円形の地床炉で、径0.55m、深さは0.18mを測る。

炉1・2とも底面および壁面が焼土化していた。

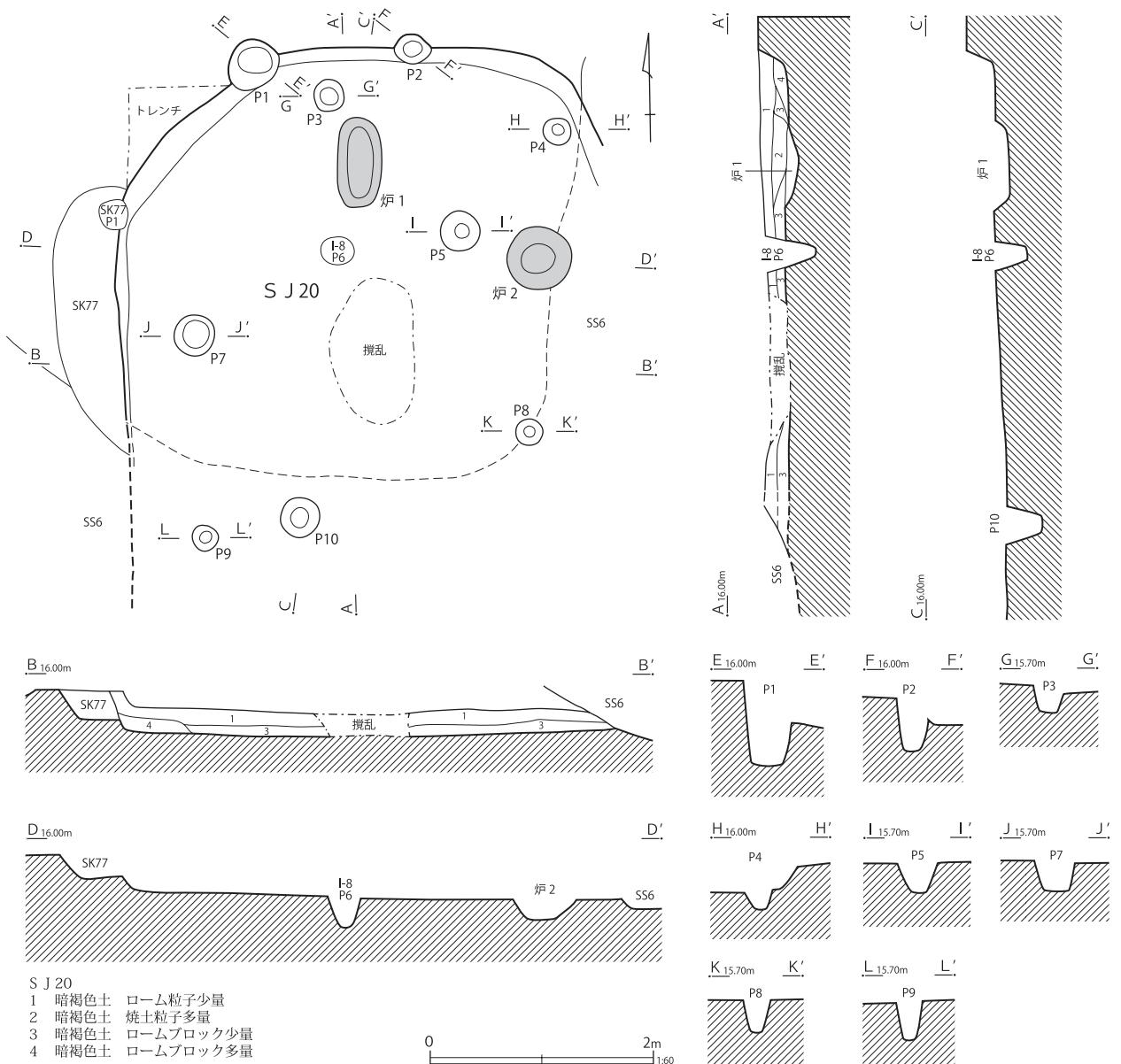
出土した土器から、住居跡の時期は前期後葉の諸磯a式期である。

第36図1～43は出土した土器である。

1～7は黒浜式土器で、纖維が含まれている。1は米字文が施文された土器である。口唇直下に、口縁部文様帯を区画する2条の爪形文が廻り、爪形文間の地文は磨消されている。口縁部は多帶構成と考えられる。地文の条と方向を同じくして爪形文が施文されている。2は口唇直下に平行沈線が廻り、さらに円形刺突文が施されている。地文は逆方向の附加条縄文である。3は順方向の附加条縄文が施文され、円形刺突文が施されている。附加縄の圧痕が明瞭で、一見すると沈線のような印象を与え、縄により米字文様の意匠が現された可能性がある。5・6も同様に施文されている。4は斜行する平行沈線が施され、肋骨文の土器と考えられる。

8～43は纖維の含まれない土器である。このうち8～29は、諸磯a式でも古相を示す有文土器である。

8～21は米字文の土器と考えられる。8～12



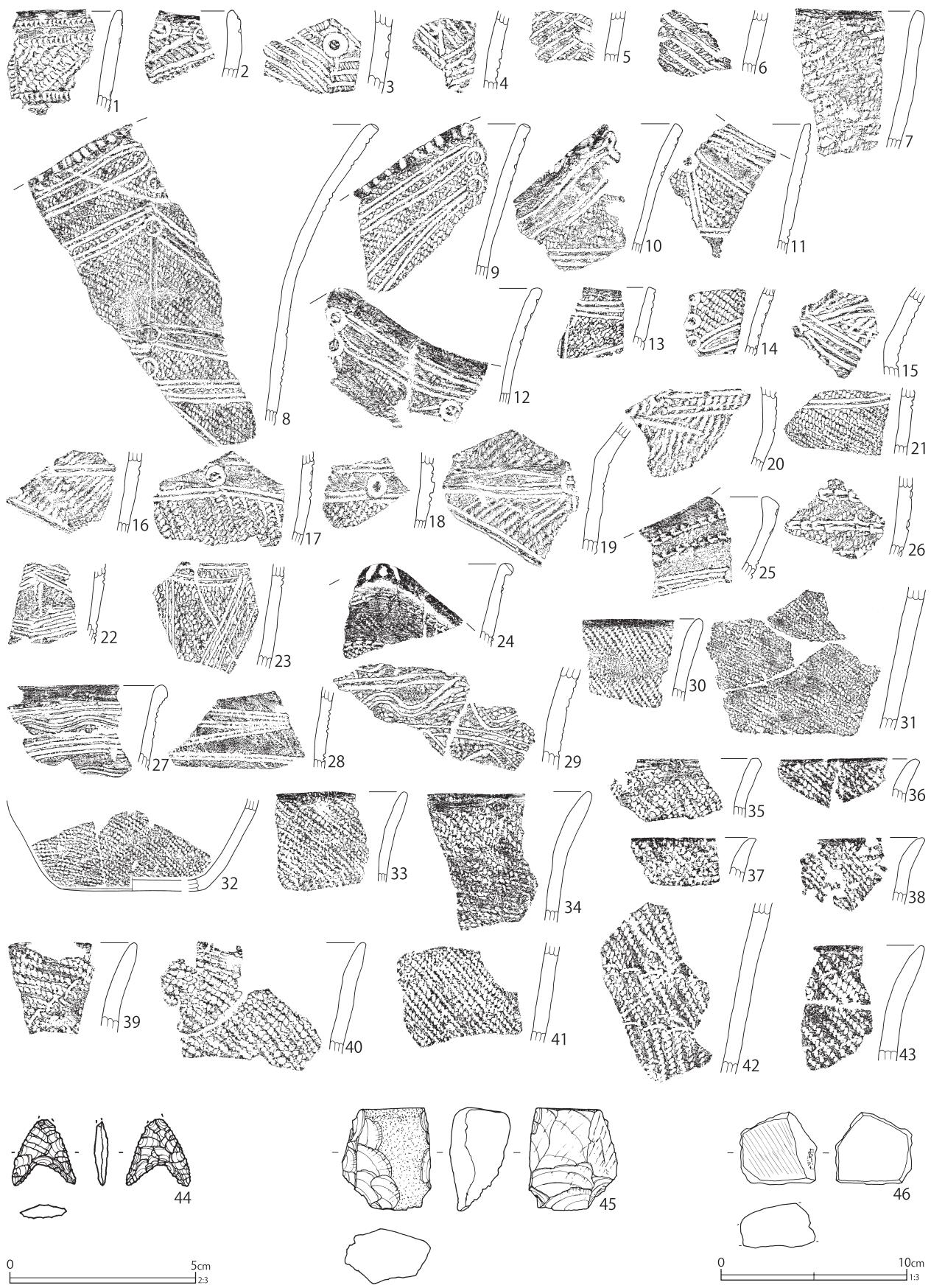
第35図 第20号住居跡

は波状口縁で、口唇上に刻目を持つ。波頂部から垂下する1条の沈線で、器面が縦位に区画されている。縦区画間には、2条を1単位とする平行沈線文が施文され、縦区画線と沈線文の接点には円形刺突文が施されている。8・9は接合しなかつたが、同一個体と思われる。11・14は平行沈線文間の地文が磨消されている。13～23も同様のモチーフ構成を持つ土器と考えられる。17・18は、文様施文部分の地文が磨消されている。22は文様施文部位に地文が施されず、円形刺突も認められない。24～26は、幅狭い爪形文が施文され

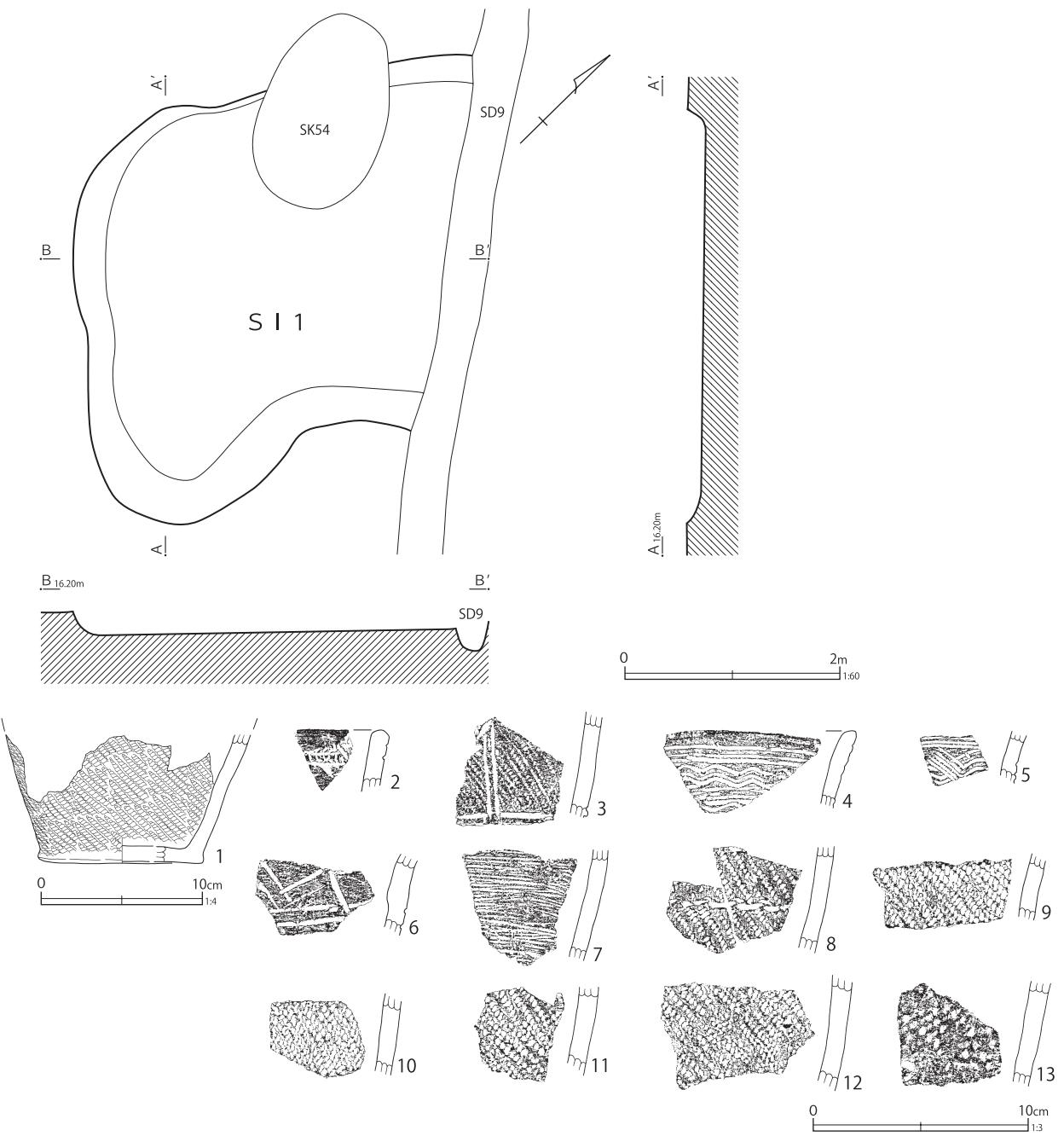
ている土器で、24・25は波状口縁である。24は、口唇に沿って平行する爪形文間の地文が磨消されている。25は地文を持たない口縁部破片である。27～29は鋸歯文が施文された土器である。いずれも多帯に区画された幅狭い横帯間に鋸歯文が施されている。28は鋸歯文が直線的に施文されている。

30～43には縄文が施文された土器を一括した。原体や施文の在り方などから、諸磕a式と考えられる。

第36図44～46は出土した石器である。



第36図 第20号住居跡出土遺物



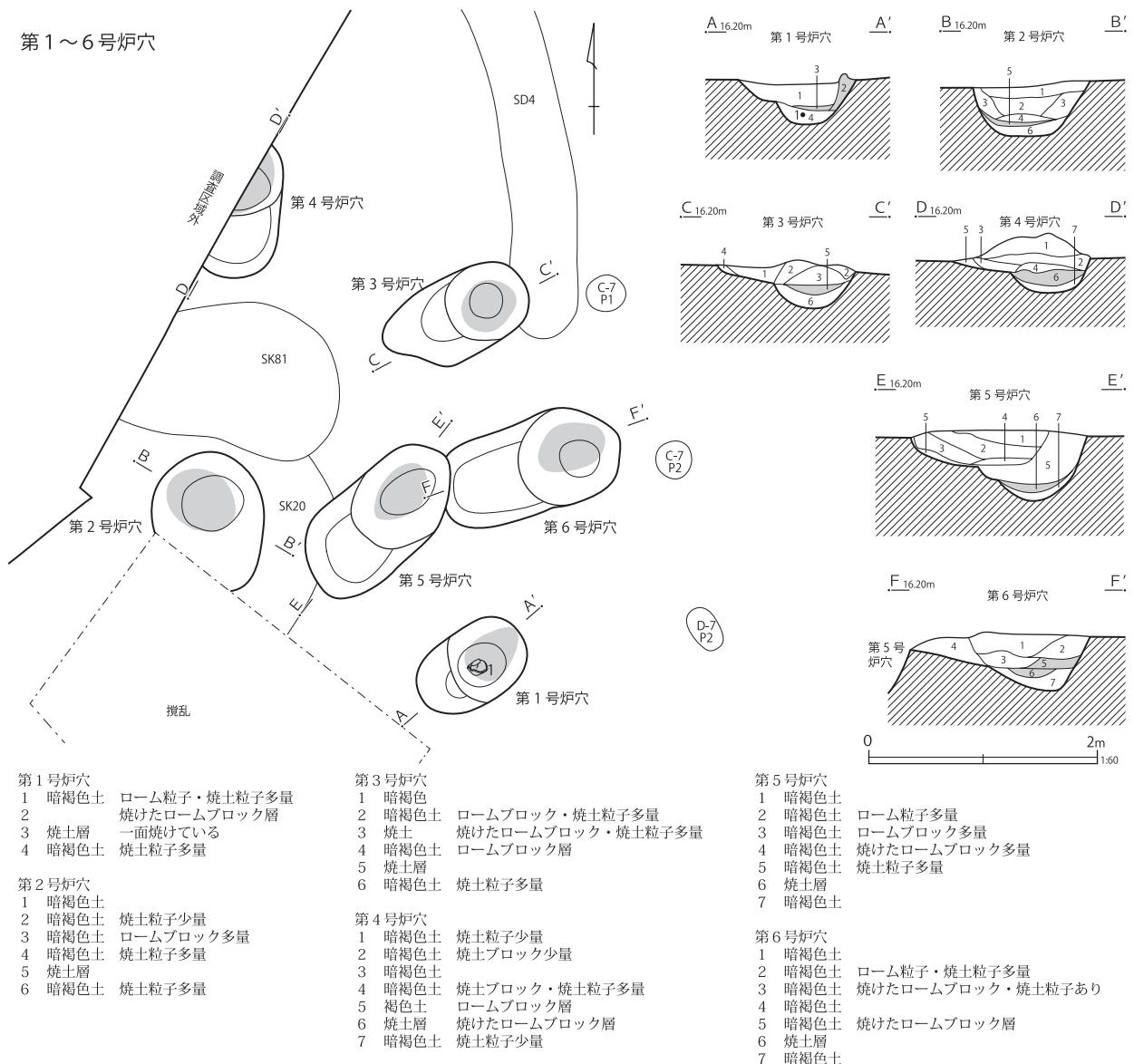
第37図 第1号竪穴状遺構・出土遺物

(2) 竪穴状遺構（第37図）

調査区北側のF-6・7グリッドに位置する。第54号土壙および第9号溝跡と重複し、いずれにも先行する。逆L字状を呈しており、長辺は2.64m以上、短辺は2.64m、深さは最大で0.22mを測る。堆積状況は不明である。2基の土壙が重複しているとも考えられたが、遺構の底面がおおむね平坦であったこと、同時期の遺物が一定量出土したことから単独の遺構と判断した。

時期は前期後葉の諸磯a式期である。

第37図1～13は出土した土器である。1は底部で、原体などから諸磯a式と考えられる。2は平行沈線施文後に爪形文が施文されている。3は米字文の土器であろう。4～6は鋸歯状文の土器である。2～6は諸磯a式である。7は櫛歯状工具により、横位の条線が施文されており、諸磯b式に下る可能性がある。8～13は縄文施文の胴部破片である。



第38図 炉穴群

(3) 炉穴

炉穴は、調査区北側のC・D - 7グリッドから6基がまとまって検出された。いずれも平面形態は橢円形で、南西を中心として放射状に広がるように位置している。また、いずれの炉穴も奥側に炉床が設けられている。

出土遺物は少ないが、第1号炉穴出土土器などから、時期は早期後半と考えられる。第2～4号炉穴からは遺物が出土していない。

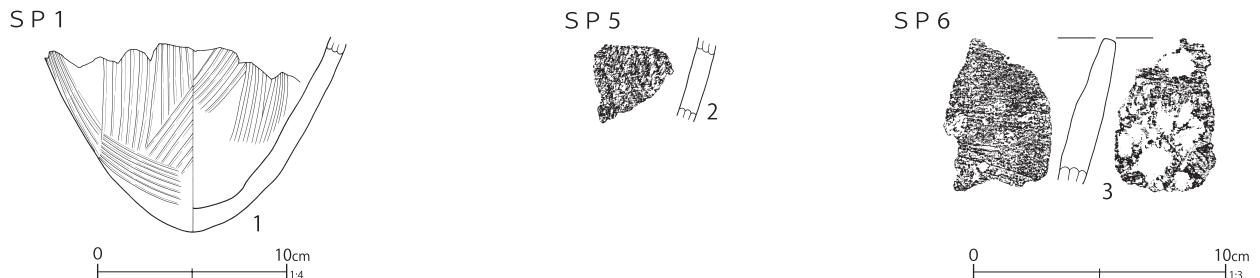
第1号炉穴（第38・39図）

長軸方位はN - 49° - E、長軸1.00 m、幅0.68 m、深さは最大で0.48 mを測る。底面およ

び立ち上がりの一部に焼土が確認された。火床面は第4層下面である。火床面からは尖底土器の底部（第39図1）が検出された。第3層は崩落した天井部、第2層は残存した奥壁の可能性がある。第39図1は出土した尖底土器である。第4層の火床面から出土した条痕文土器で、内外面に明瞭な条痕整形が施される。尖底外部には回転状の線条痕が見られる。

第2号炉穴（第38図）

重複する第20号土壙に先行する。長軸方位はN - 3° - W、長軸1.24 m、幅0.98 m、深さ0.47 mを測る。火床面は第5層、掘り方は第6層。



第39図 炉穴群出土遺物

第3号炉穴（第38図）

重複する古墳時代の第4号溝跡に先行する。長軸方位はN-70°-E、長軸1.34m、幅0.72m、深さ0.44mを測る。火床面は第6層下面である。

第4号炉穴（第38図）

西側半分が調査区外に延びている。長軸方位はN-15°-E、長軸1.20m、推定幅0.80m、深さ0.33mを測る。火床面は第6層下面である。掘り方は第7層である。

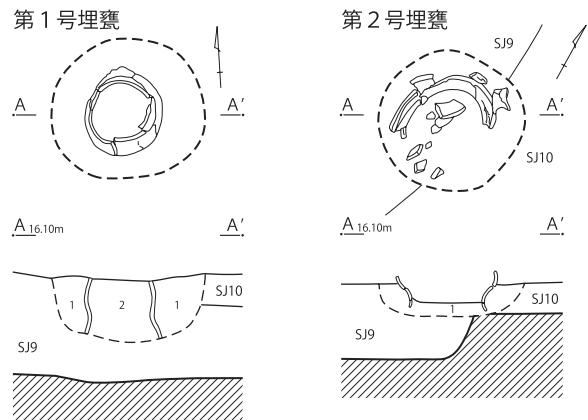
第5号炉穴（第38・39図）

重複する第6号炉穴に後続し、古墳時代の第20号土壙に先行する。長軸方位はN-43°-E、長軸1.60m、幅0.80m、深さは0.49mを測る。火床面は第6層下面である。掘り方は第7層である。

遺物は第39図2が出土した。撚糸文系土器群で、胎土に白色粒子を多く含み、単節RLの縦走縄文が施文される。

第6号炉穴（第38・39図）

重複する第5号炉穴に先行し、長軸方位N-70°-E、長軸1.62m、幅0.84m、深さ0.52mを測る。火床面は第6層下面、掘り方は第7層。



第40図 第1・2・5号埋甕

遺物は第39図3が出土した。条痕文系土器群の胴部破片で、内外面に条痕整形が施される。

(4) 埋甕

5基が確認された。このうち第3・4号埋甕は第16号住居跡に伴うものと判断し、欠番とした。

第1号埋甕（第40・41図）

調査区東側のH-11グリッドに位置する。第9号住居跡および第10号住居跡と重複し、いずれにも後続する。平面形態は橢円形で、長軸0.6m、幅0.4m、深さ0.26mを測る。倒立した状態で検出された伏甕である。下半部は本来残存していたと思われるが、失われている。口縁部は打ち欠かれていた。被熱痕跡は確認できなかった。時期は後期前葉堀之内1式期である。

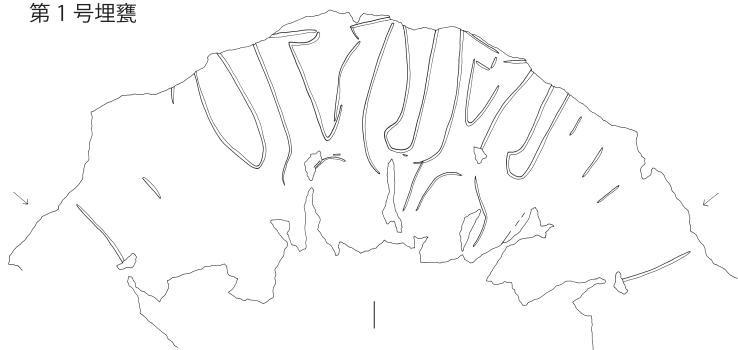
第41図1は埋甕に使用された深鉢形土器である。胴部のみが残存している。胴部には沈線で文様が施文され、地文は施されていない。スペード文、J字文が交互に施文されている。胴部下半は特に器面の剥落が著しく、文様はごく一部が残るのみである。残存高は25cmである。



第1号埋甕	
1	暗褐色土 焼土粒子少量
2	暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
第2号埋甕	
1	暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
第5号埋甕	
1	暗褐色土 ローム粒子少量
2	暗褐色土

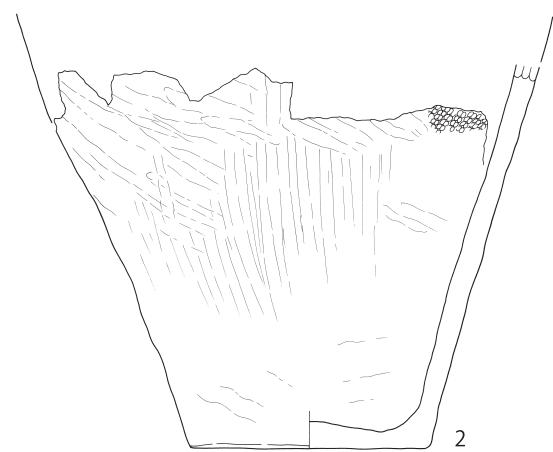
0 1m 1:30

第1号埋甕



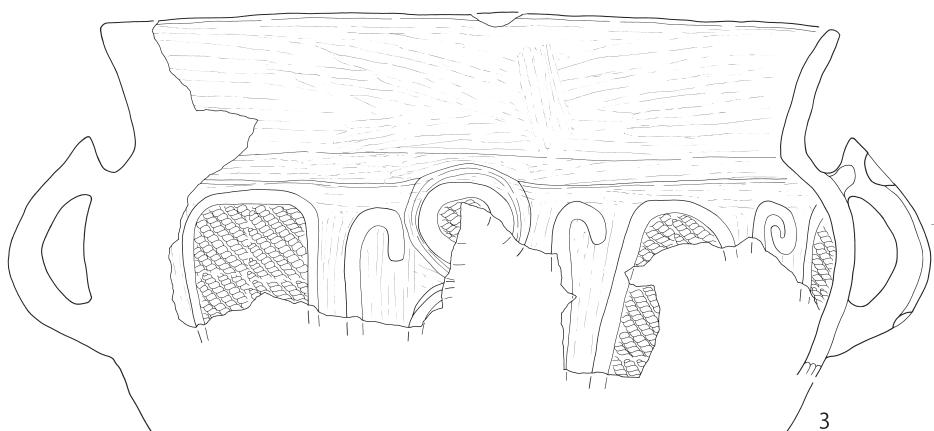
1

第5号埋甕

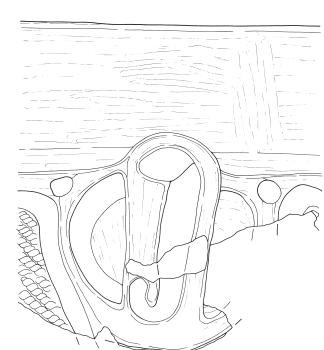


2

第2号埋甕



3



0 10cm
1:4

第41図 第1・2・5号埋甕出土遺物

第2号埋甕（第40・41図）

調査区東側のH-11グリッド、第1号埋甕の北東約1mに位置する。重複する第9号住居跡に先行し、第10号住居跡に後続している。平面形態は円形で、径0.56m、深さ0.12mを測る。直立した状態で検出され、下半部は打ち欠かれていた。被熱痕跡は確認できなかった。時期は中期末葉加曽利E IV式期である。

第41図3は埋甕に使用された両耳壺である。肩部2箇所に把手が貼付されている。文様は中央に円形の貼付文を施し、他はわらび手文、渦巻文の懸垂文と逆U字文を、交互に施文されている。逆U字文内には単節LRの縄文を施文されている。推定口径は39cmで、残存高は18.5cmである。

第5号埋甕（第40・41図）

調査区中央のI-7グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形態は円形で、径0.3m、深さ0.16mを測る。直立状態で検出され、上半部は失われていた。被熱痕跡は確認できなかった。

時期は後期前葉と考えられる。

第41図2は埋甕に使用された深鉢形土器である。器面の調整は粗く剥落も著しい。地文は複節RLRの縄文である。底径は12.8cm、残存高は20cmである。

（5）土壙

土壙は調査区内から64基検出された。ここでは特徴的な掘り込みや、遺物を出土した土壙について記載した。ほかは第2表に記載した。

第1号土壙（第42・49図）

袋状の土壙である。壁が底面から0.5～0.8mほどの高さまでオーバーハングし、ここより上はほぼ垂直に立ち上がる。底面中央には、径0.8m、深さ0.2mの凹みがある。覆土下層にはローム質土が多く含まれ、開口部の崩落が想定される。遺構の上部は第1号溝跡により削平されている。

第49図1～12は深鉢形土器の破片である。

2～5は称名寺系の文様が施文される。6～12は堀之内1式土器である。

第3号土壙（第42・50図）

第10号住居内の北西部に位置し、これに後続する。土壙中にはピット状の落ち込みが見られ、第10号住居跡のピットを埋めて造られたと考えられる。

第50図1・2は出土した石器である。1はほぼ完形の石棒で、2は石皿の破片である。1と2は並列して出土している。時期は重複する第10号土壙の時期から、後期前葉以降と考えられる。

第5号土壙（第42・49図）

立ち上がりの緩やかな土壙であるが、中央に長軸55cm、幅44cm、深さ35cmを測るピット状の落ち込みが見られる。

第49図13～16は深鉢形土器の小破片で、中期後半加曽利E式期である。17～19は石器である。

第6号土壙（第42・49図）

第49図20・21の深鉢形土器の胴部小破片が出土した。20は中期後半加曽利E III式、21は後期初頭と考えられる。

第8号土壙（第42・49図）

第49図22～24は出土した石器である。22・23は磨製石斧の破片である。24は磨石である。

第12号土壙（第43・51図）

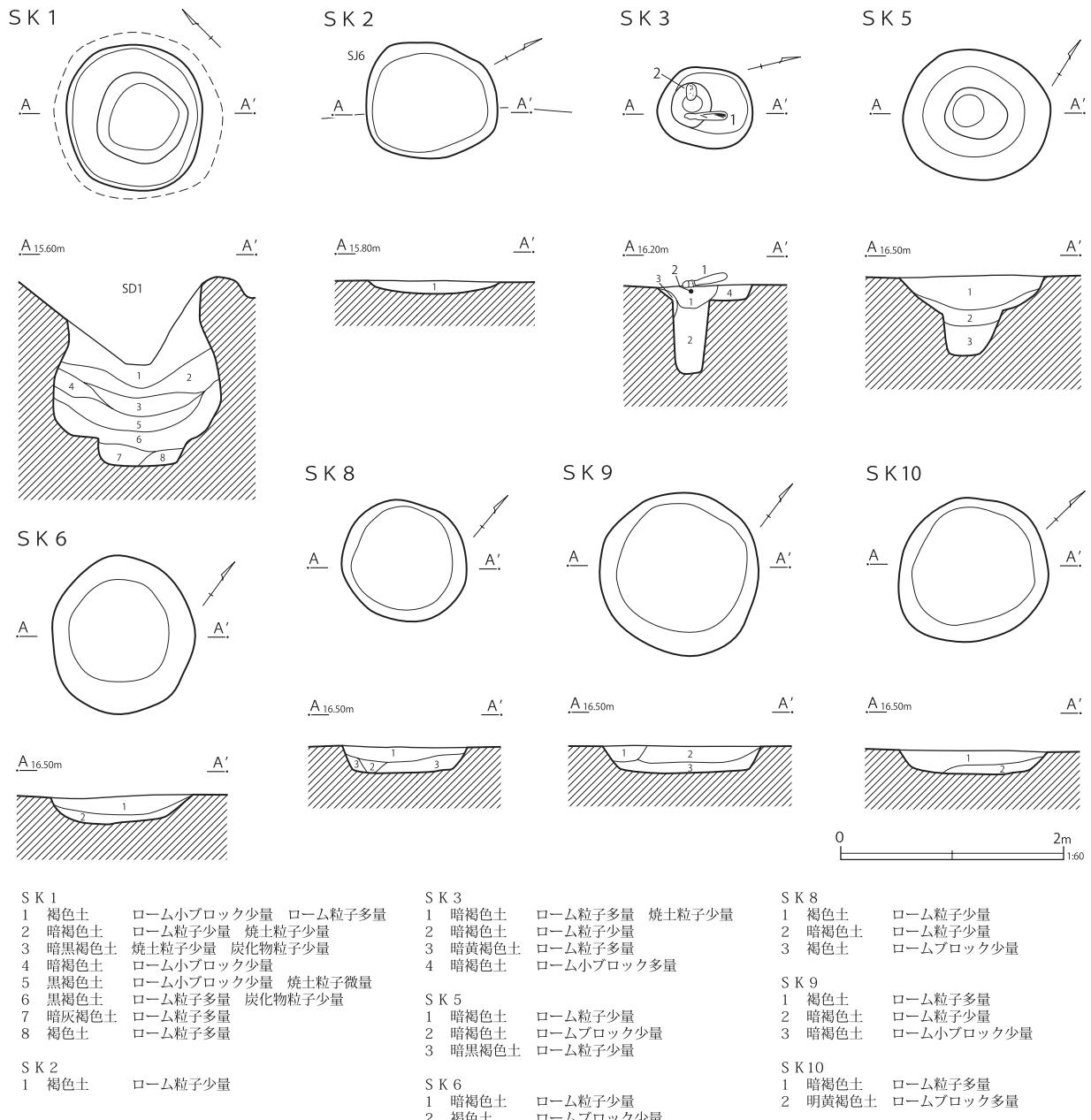
第51図1・2は出土した土器片である。1はミニチュア土器で、丁寧な作りである。波状口縁部分で、無文である。時期は不明である。

第13号土壙（第43・51図）

第51図7～19は出土した土器である。7～13は、沈線による磨消懸垂文を垂下させている。18は有孔鍔付土器の口縁部の破片である。19は底部の破片である。20は磨石の破片である。時期は中期後半加曽利E III式期である。

第17号土壙（第43・51図）

第51図3はミニチュア土器の口縁部の破片である。時期は不明である。



第42図 土壌(1)

第19号土壌(第43・49図)

第49図25～28が出土した。26は結節浮線文の前期末葉十三菩提式土器である。

第21号土壌(第44・51図)

第51図21～33は深鉢形土器の破片である。21・23～27は胴部の破片で、沈線で磨消懸垂文が施文されている。28は地文が条線の曾利式系土器で、深鉢形土器の口縁部の破片である。29は連弧文系土器で、深鉢形土器の胴部である。31～33は称名寺式系の文様が施文されている。34

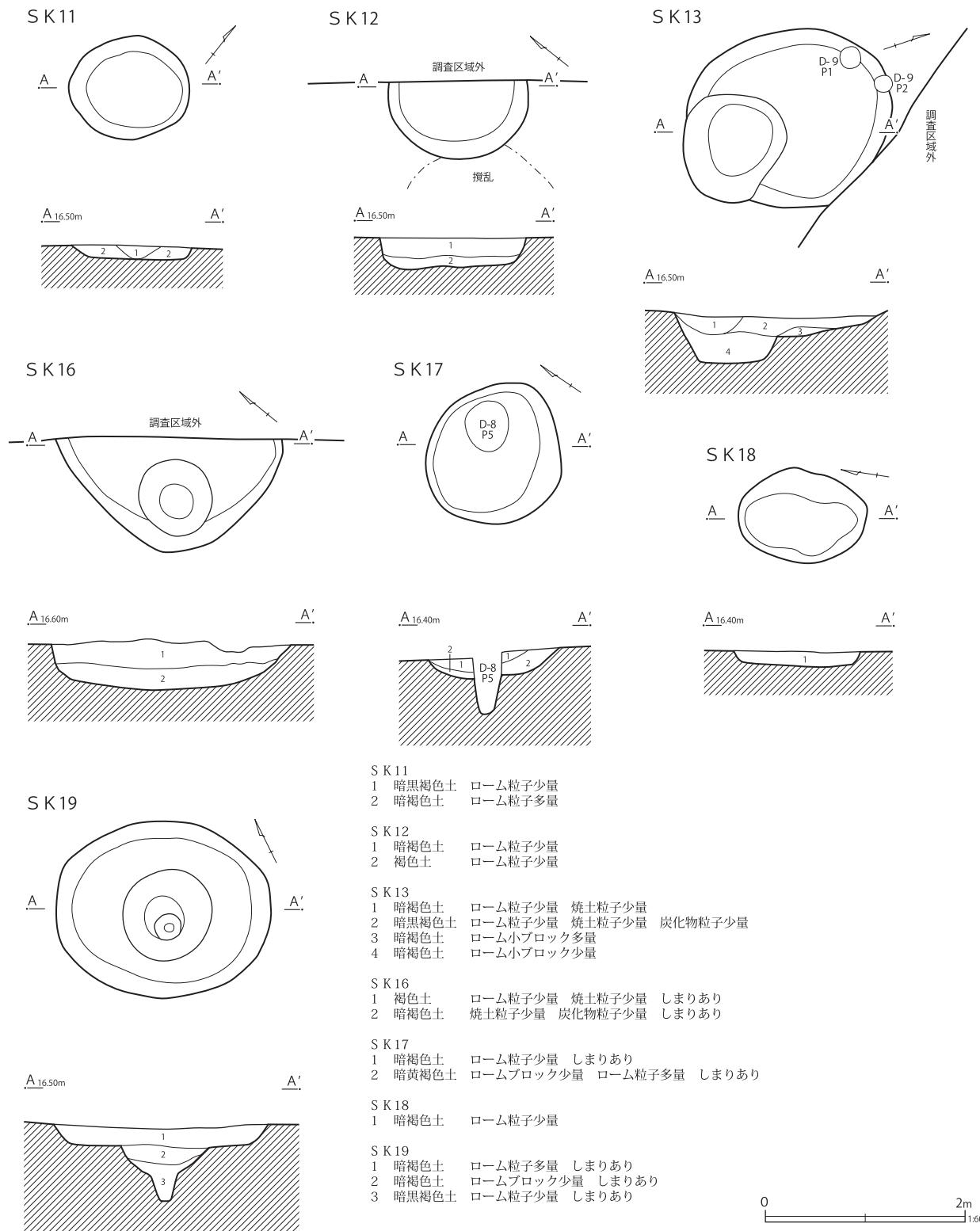
は磨石の破片である。主体を占める時期は、中期後半の加曽利E III式期である。

第22号土壌(第44・51図)

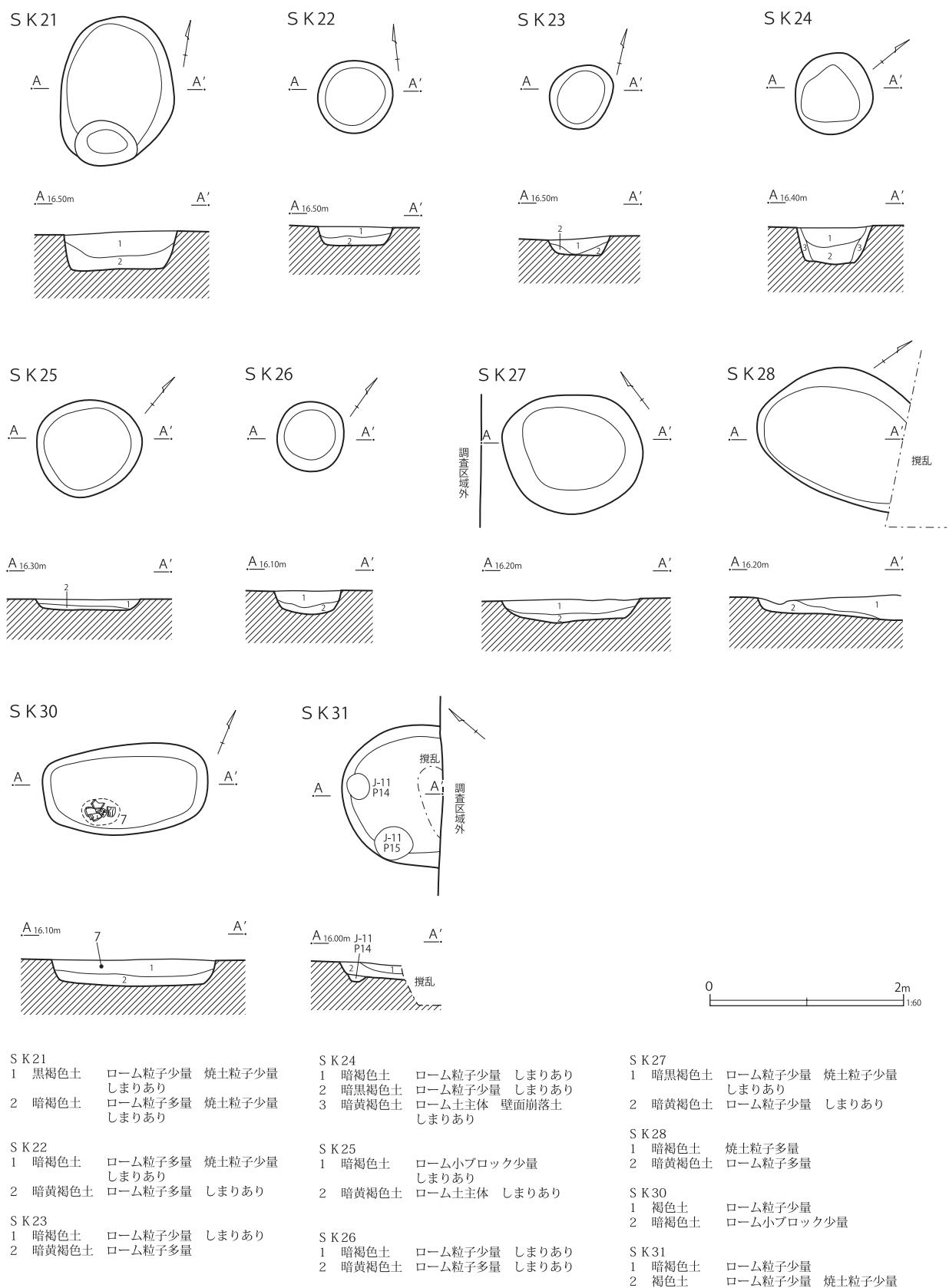
第51図4～6は早期後半の条痕文系土器の破片である。6は底部の破片で、丸みを帯びる。

第23号土壌(第44・51図)

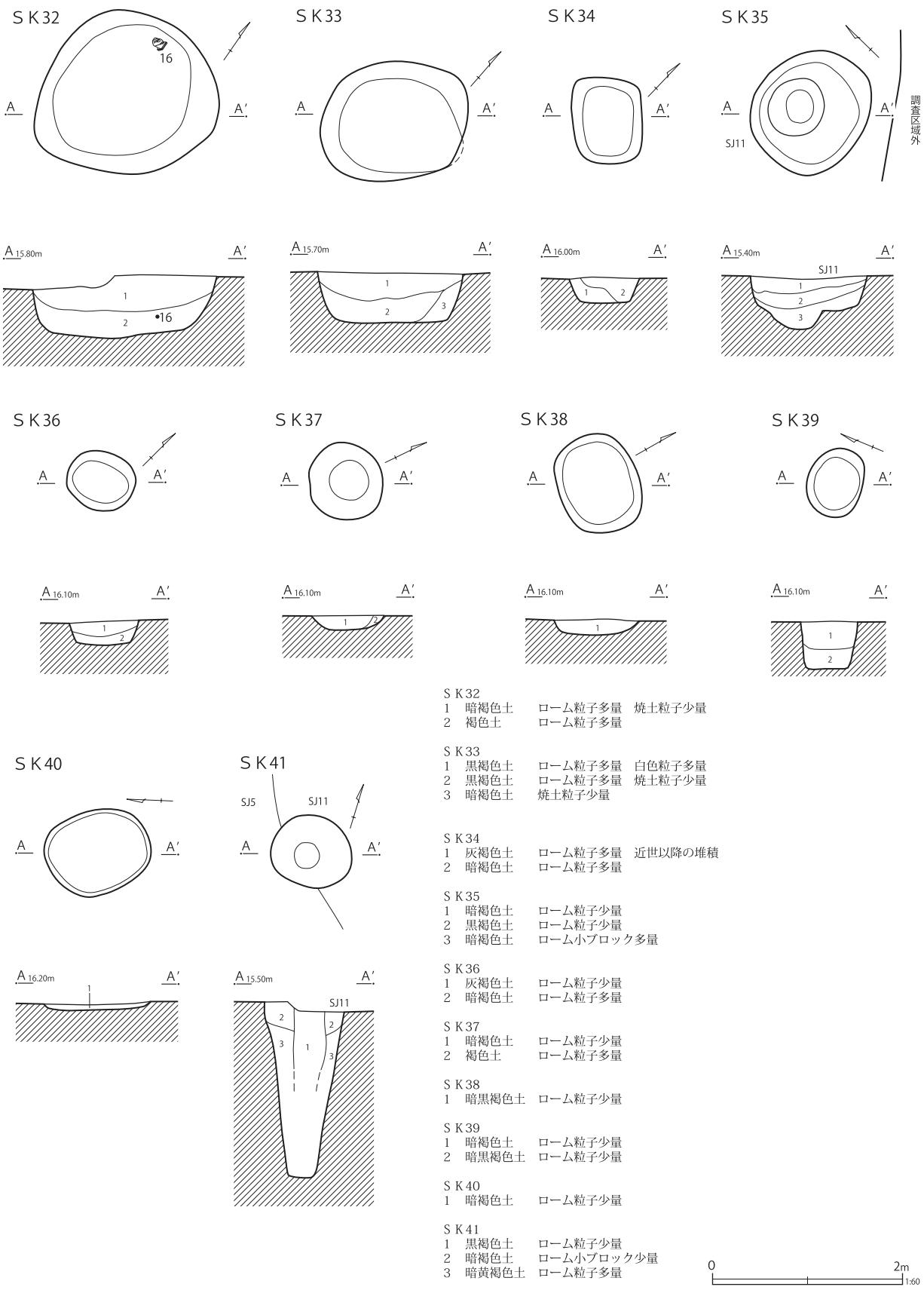
第51図35～49は出土した深鉢形土器片である。36～46は平行する沈線で文様が施文され、縄文が充填される。時期は後期初頭称名寺I式期である。



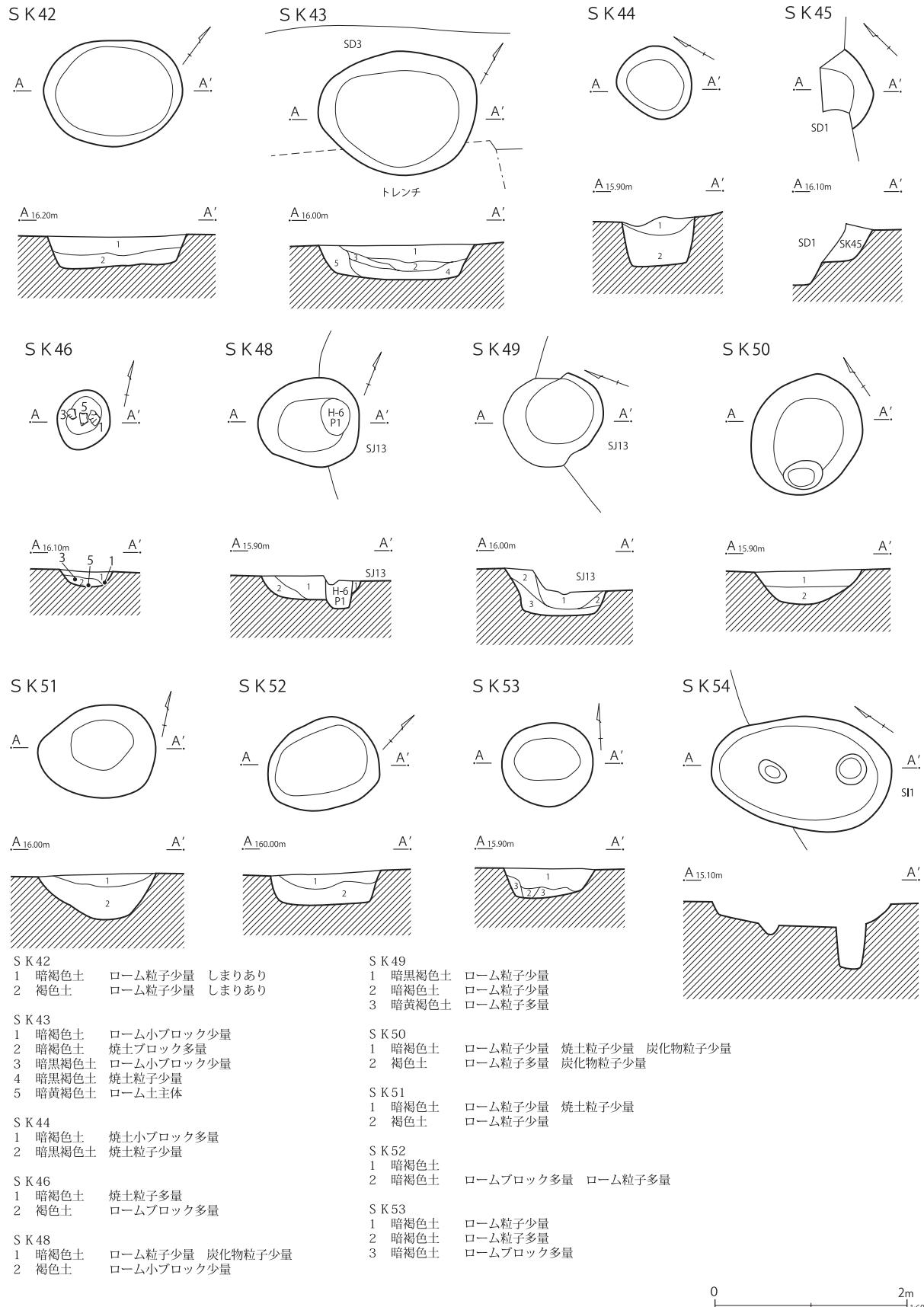
第43図 土壌(2)



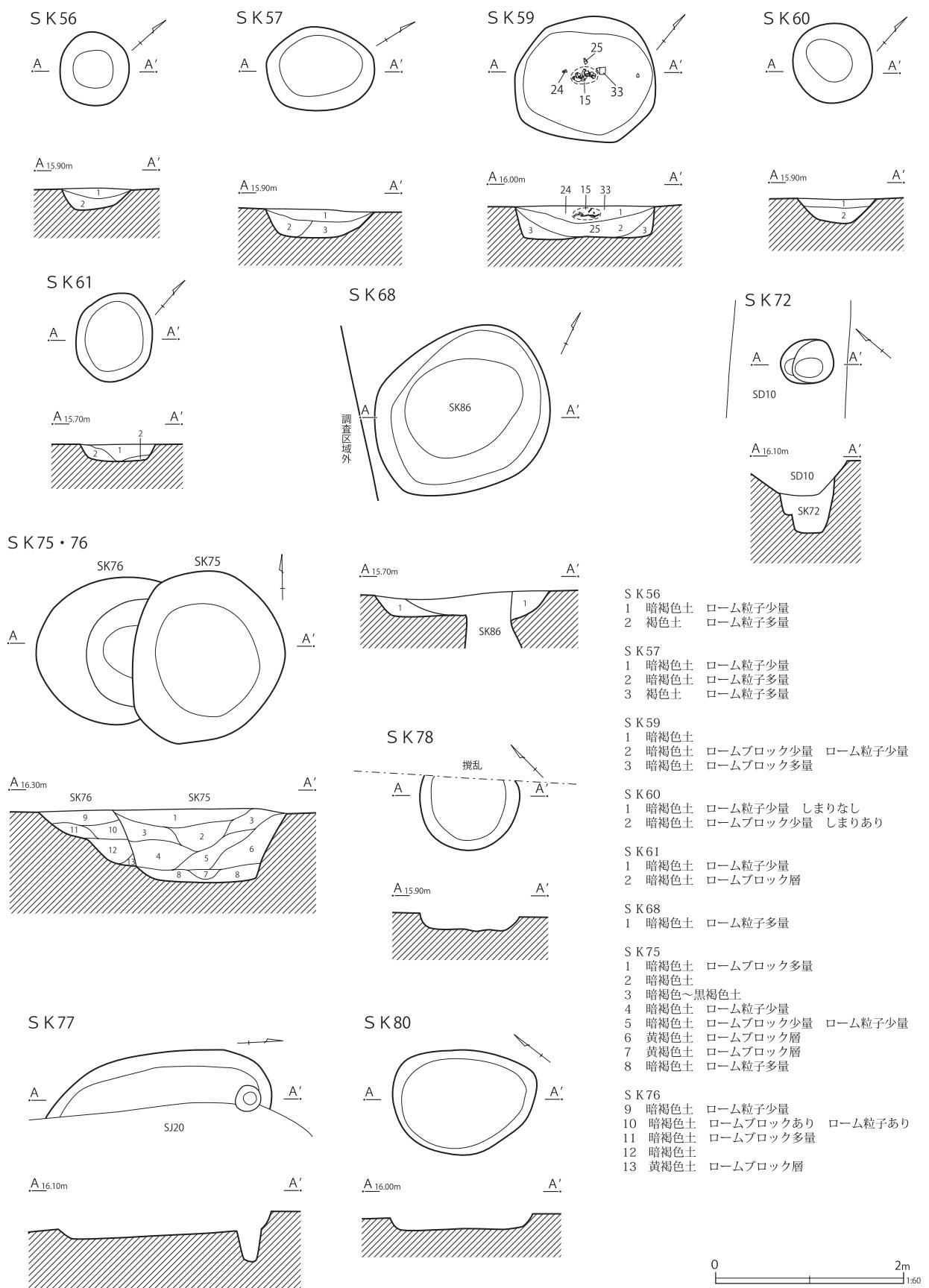
第44図 土壌(3)



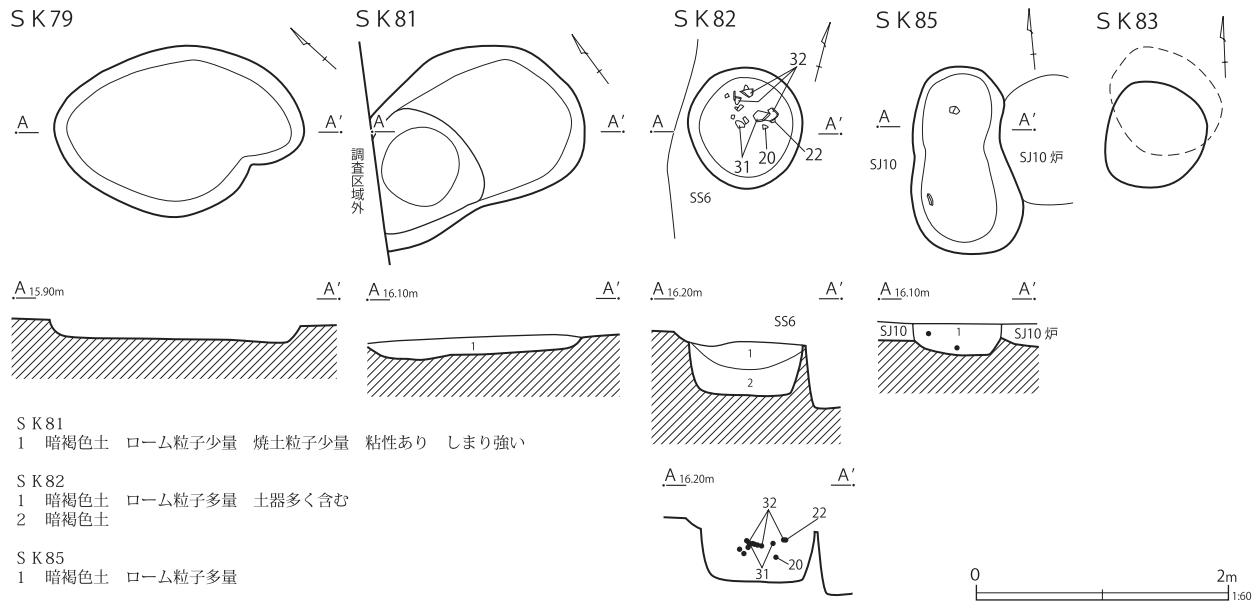
第45図 土壌(4)



第46図 土壌(5)



第47図 土壌(6)



第 48 図 土壌 (7)

第 24 号土壌 (第 44・51 図)

第 51 図 50 は前期後半の諸磯 a 式期の土器片で、爪形文が施文されている。

第 25 号土壌 (第 44・52 図)

第 52 図 1・2 は出土した深鉢形土器の胴部小破片である。沈線で磨消懸垂文が施文されている。時期は中期後半加曾利 E III 式期である。

第 30 号土壌 (第 44・52 図)

浅く平坦な隅丸方形の土壌である。底面上に倒れた状態でほぼ完形の深鉢が 1 点出土し、土壌墓の可能性がある。時期は堀之内 2 式期である。

第 52 図 7 は深鉢形土器である。口縁部は橢円形状に整形され、そこから胴部中央にかけて円形に収束させ、底部に至っている。口縁は波状口縁で波頂部は 2 箇所である。口縁の波頂部、波底部下には 8 字状貼付文が施文されている。胴上部は沈線で区画し、8 字状貼付文下は U 字状に落ち込ませている。区画内には多重条線によって三角文が入れ子状に 6 単位施文されている。三角文の外側には単節 LR の縄文が充填されている。口径は長径 18.3 cm 短径 12.5 cm 器高 17 cm、底径は 8.6 cm である。

第 31 号土壌 (第 44・52 図)

第 52 図 9～12 は出土した遺物である。9～

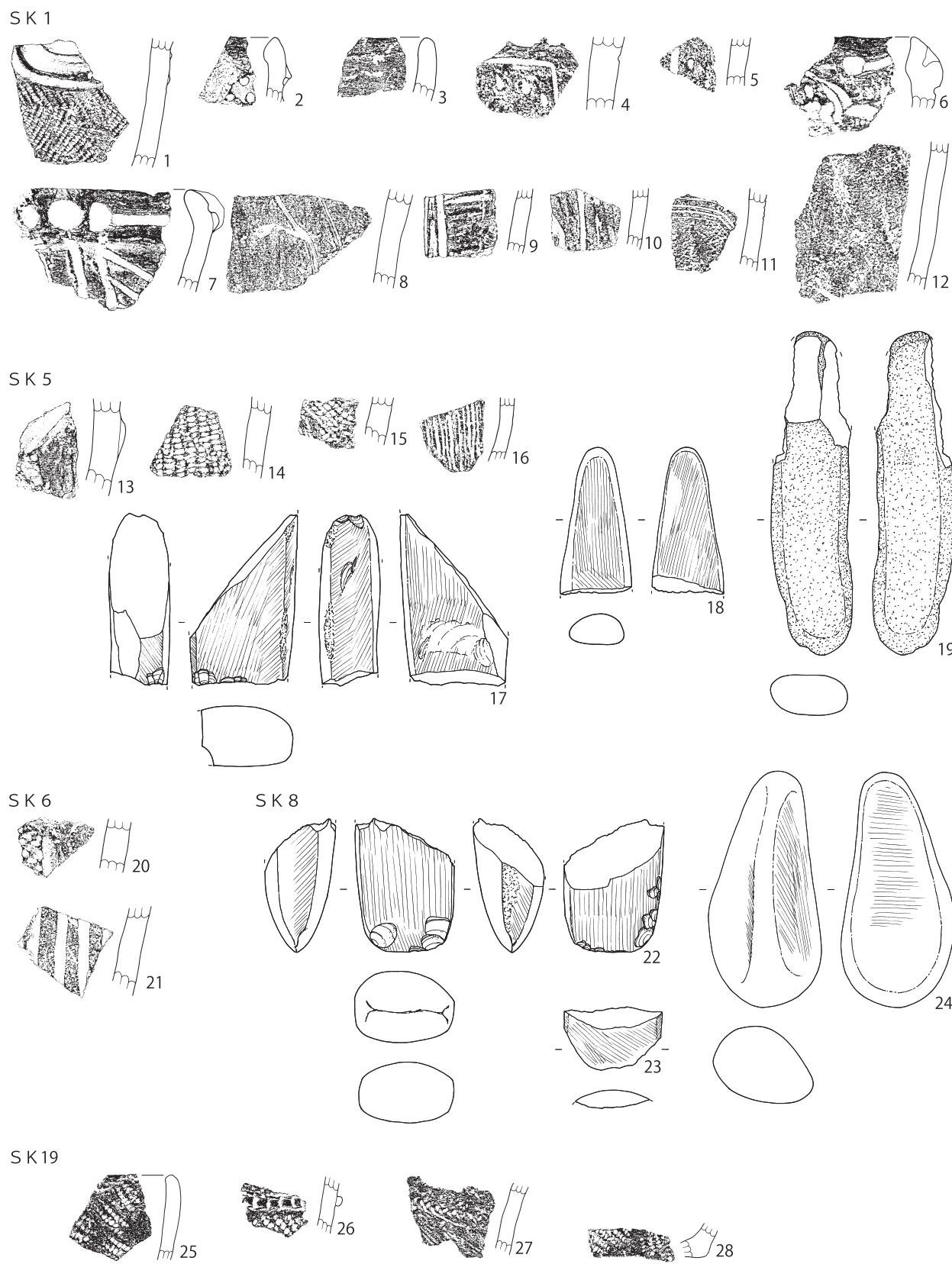
11 は深鉢形土器の破片で、9 は爪形文の幅が狭く、曲線的なモチーフが見られることから、諸磯 a 式新段階と考えられる。10・11 は諸磯 b 式古段階である。12 は石皿の破片である。

第 32 号土壌 (第 45・52 図)

第 52 図 15～20 は出土した遺物である。15～18 は深鉢形土器の破片である。15 は口頸部が強く開き、口唇部がくの字状に屈曲する深鉢型土器で、4 単位の波状口縁と推定される。LR 原体による地文を持ち、口唇と並行して半截竹管による沈線文を持ち、頸部には横位沈線により、多帯に区画されている。区画間には、口唇直下に三角状、頸下部には入り組み上の沈線文が施文されている。16 も 15 と同様の器形で、屈曲した口唇部には、波頂部に縦位対弧状のモチーフが施文されるものと考えられる。いずれも諸磯 b 3 式古段階である。18 はこの種の土器の胴部の可能性がある。17 は浮島式である。20 は諸磯 b 式土器片を利用した土製円盤である。19 は磨石の破片である。時期は前期後半諸磯 b 式期と考えられる。

第 33 号土壌 (第 45・52 図)

第 52 図 21～25 は深鉢形土器の破片である。縄文施文の破片で、22 には沈線文が認められる。時期は前期後半と考えられる。



0 10cm 1:3

第49図 土壌出土遺物（1）

第34号土壙（第45・53図）

第53図1～5は深鉢形土器の小破片である。1～4は後期前葉堀之内式土器、5は中期後半加曾利E式土器である。

第35号土壙（第45・53図）

第53図9～16は深鉢形土器の小破片である。中期後半加曾利E式期と考えられる。第53図17は土製円盤で、胴部片を使用している。

第37号土壙（第45・52図）

第52図13・14は出土した深鉢形土器の小破片である。縄文のみの破片で、13には盲孔が認められる。時期は前期後葉と考えられる。

第39号土壙（第45・53図）

第53図6～8は出土した深鉢形土器の小破片である。7は曲線的な沈線が施文され、その内側に縄文が充填されている。時期は後期前葉堀之内式期と考えられる。

第40号土壙（第45・53図）

第53図18・19は出土した深鉢形土器の小破片である。18は胴部、19は底部の一部で、地文のみを施文されている。時期は前期後葉と考えられる。

第41号土壙（第45・53図）

柱穴状の堆積が観察されているが、重複する第5号住居跡よりも古く、11号住居跡よりも新しい時期の遺物が出土している。

第53図24～31は深鉢形土器の小破片である。24の口縁部は肥厚し、沈線が廻らされている。後期前葉の堀之内1式期と考えられる。

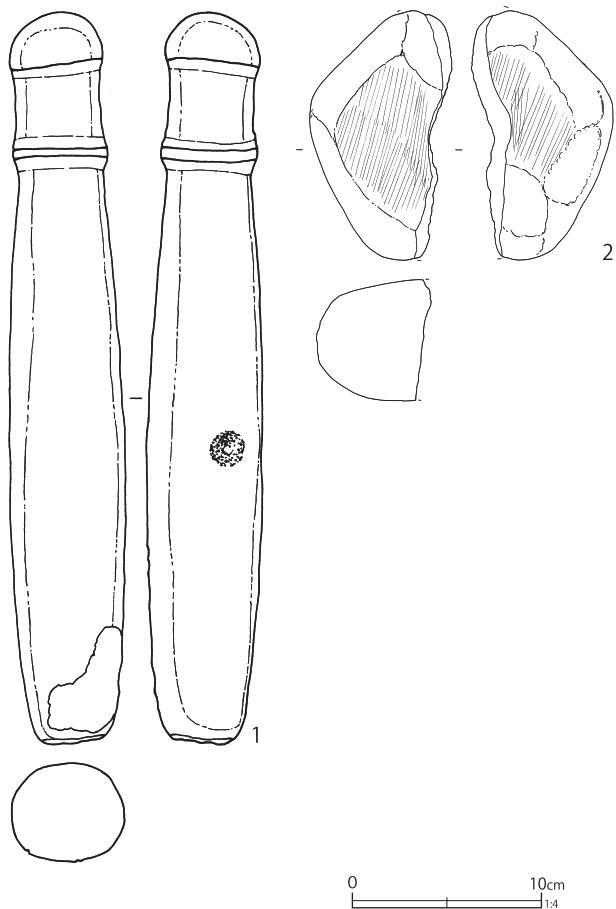
第42号土壙（第46・53図）

第53図20・21は深鉢形土器の破片である。20は曾利式系の重弧文土器の胴部破片である。時期は中期後半加曾利E式期である。

第45号土壙（第46・53図）

第53図32～39は出土した土器である。32は器形復元ができた連弧文系土器である。口縁から胴上部が残存している。口縁は狭い無文帶で2本の沈線を廻らし胴部と区画されている。沈線内

SK 3



第50図 土壙出土遺物（2）

には円形刺突列が施文されている。胴部は磨消沈線で波状文が施文されている。地文は条線である。推定口径は29.4cm、残存高は10cmである。33～38は深鉢形土器の破片である。39は浅鉢形土器の口縁部の破片である。赤彩の痕跡が認められる。時期は中期後半加曾利E III式期である。

第46号土壙（第46・54図）

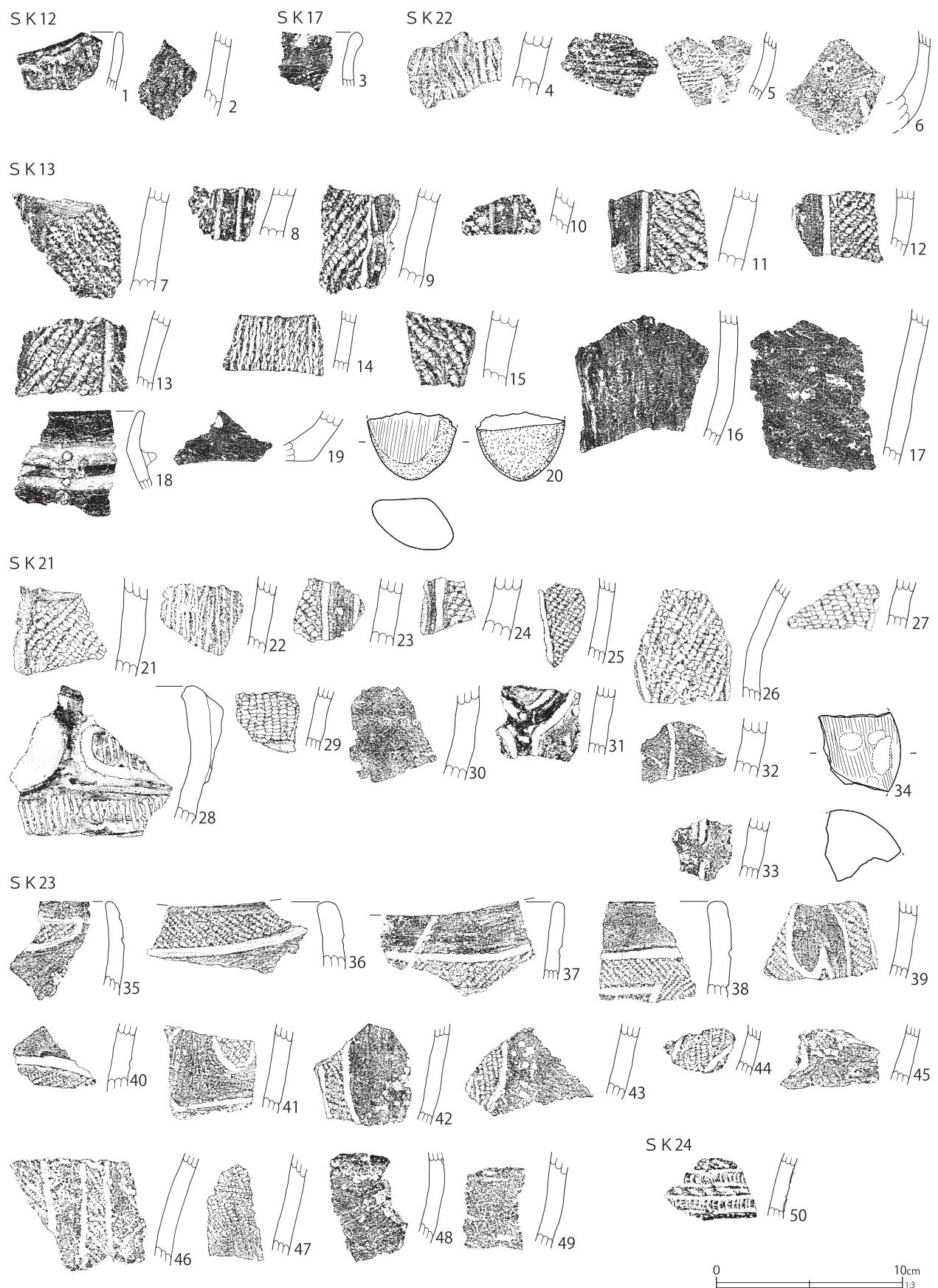
覆土には多くの焼土粒子が含まれるが、底面に被熱した痕跡はない。

第54図1～10は出土した土器である。1～7は深鉢形土器の破片である。胴部には沈線で磨消懸垂文を垂下させている。8・9は浅鉢形土器の破片である。10は後期前葉の土器片である。

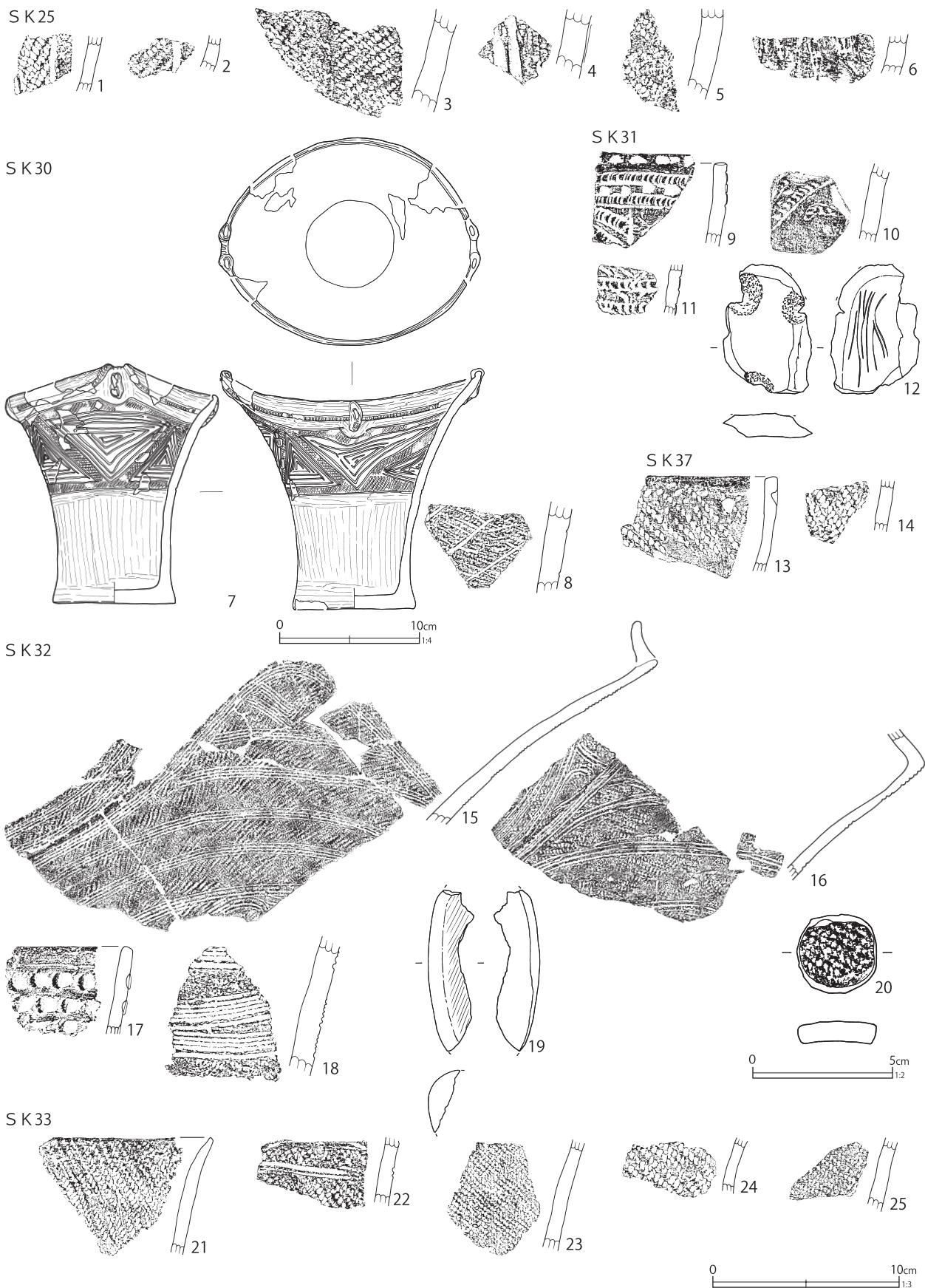
時期は中期後半加曾利E III式期と考えられる。

第48号土壙（第46・53図）

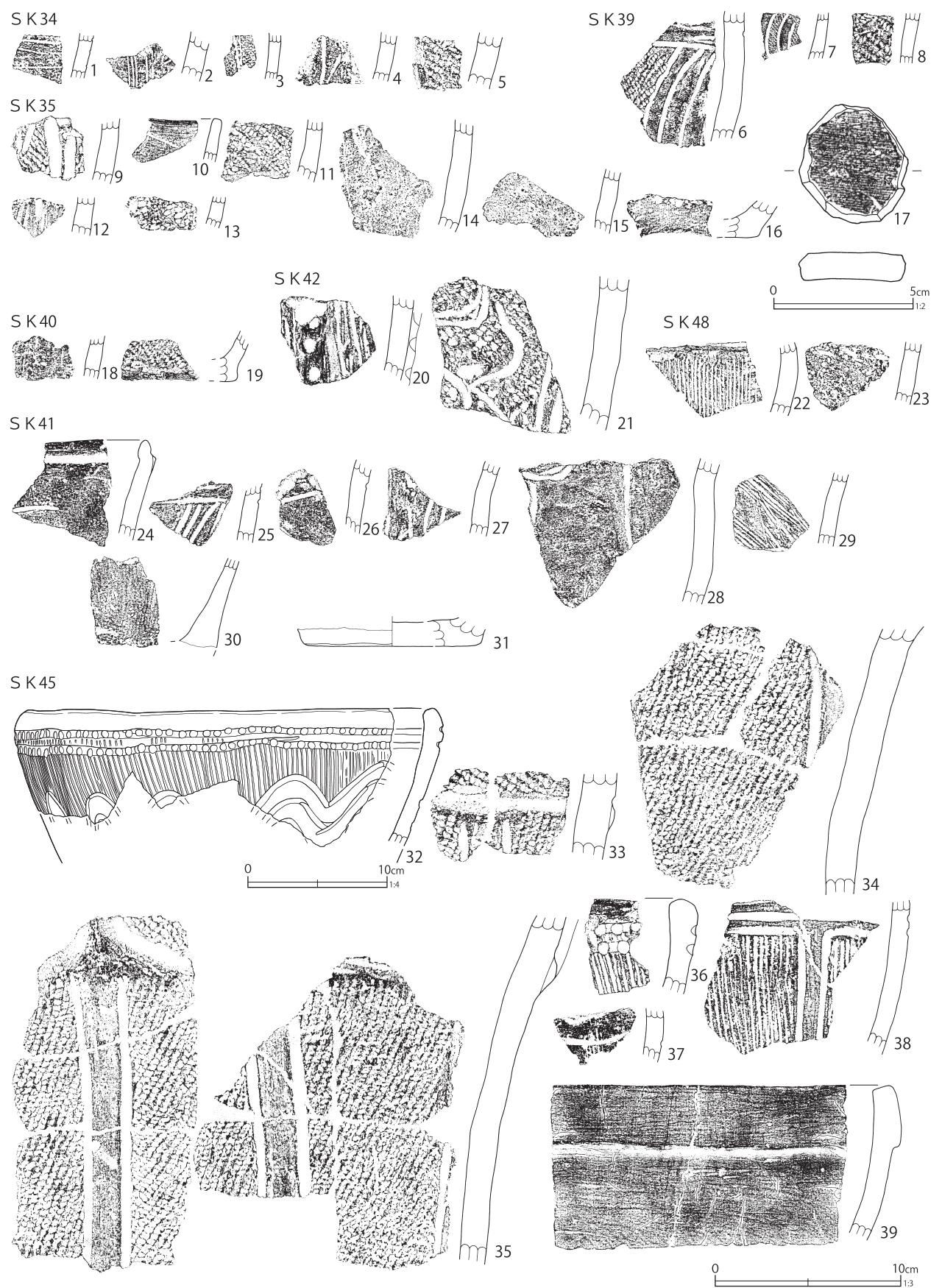
第53図22・23は出土した土器で、22は浅



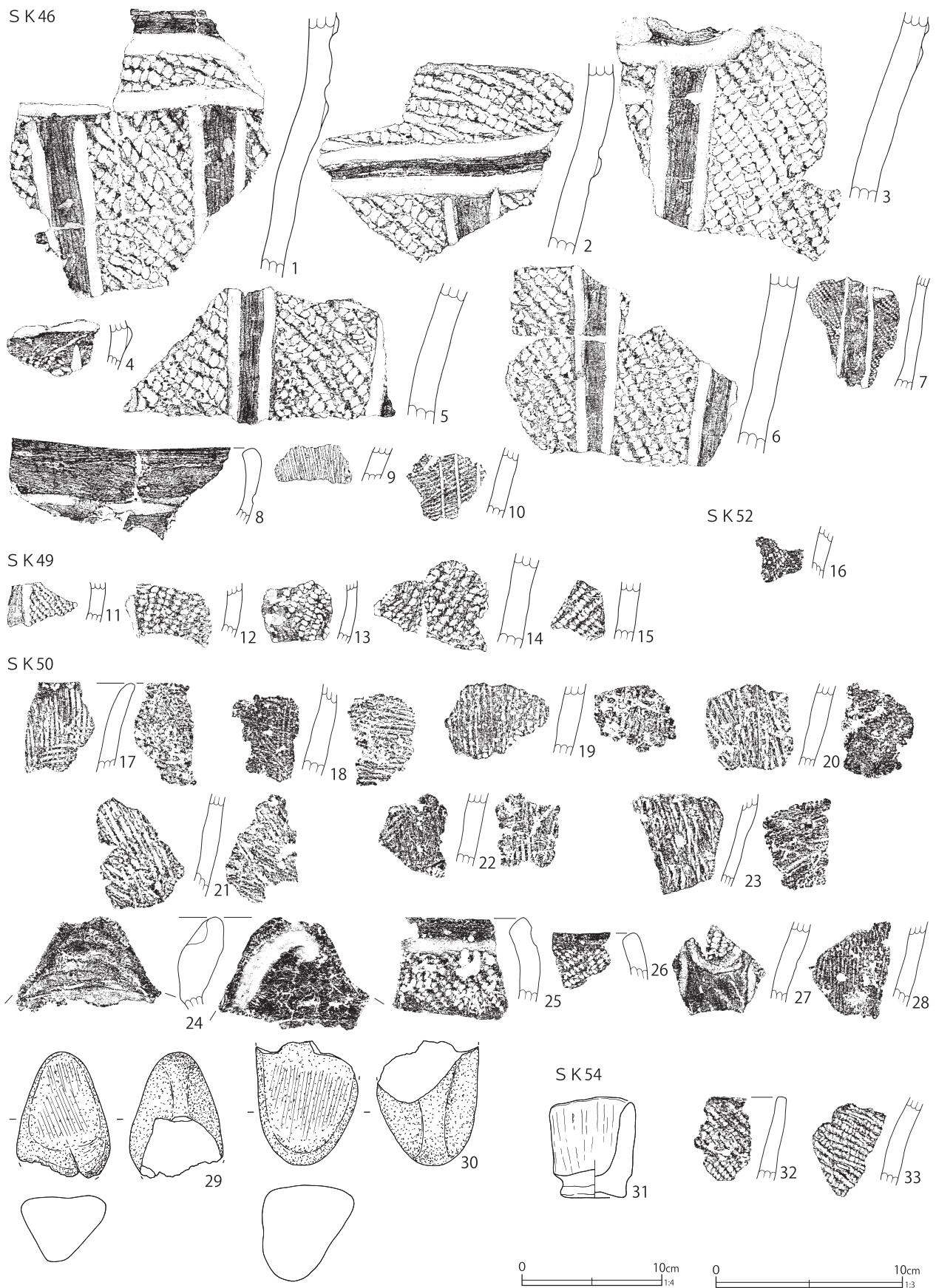
第51図 土壌出土遺物（3）



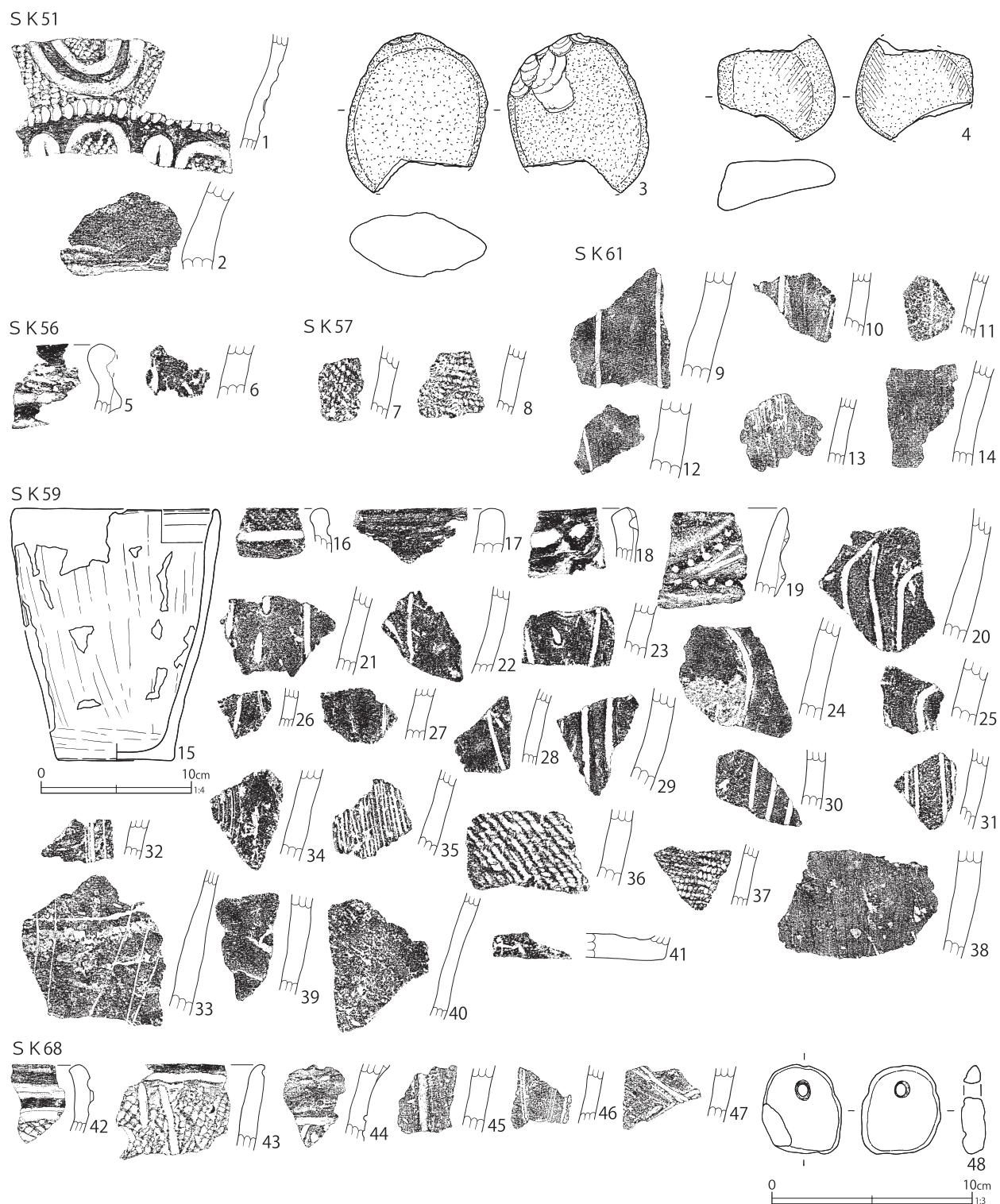
第52図 土壌出土遺物 (4)



第53図 土壌出土遺物（5）



第 54 図 土壤出土遺物 (6)



第 55 図 土壌出土遺物 (7)

鉢形土器、23 は無文の深鉢形土器の破片である。

時期は中期末から後期前葉と考えられる。

第 49 号土壌 (第 46・54 図)

第 54 図 11～15 は深鉢形土器の小破片である。

11 には磨消懸垂文が施文されている。時期は中

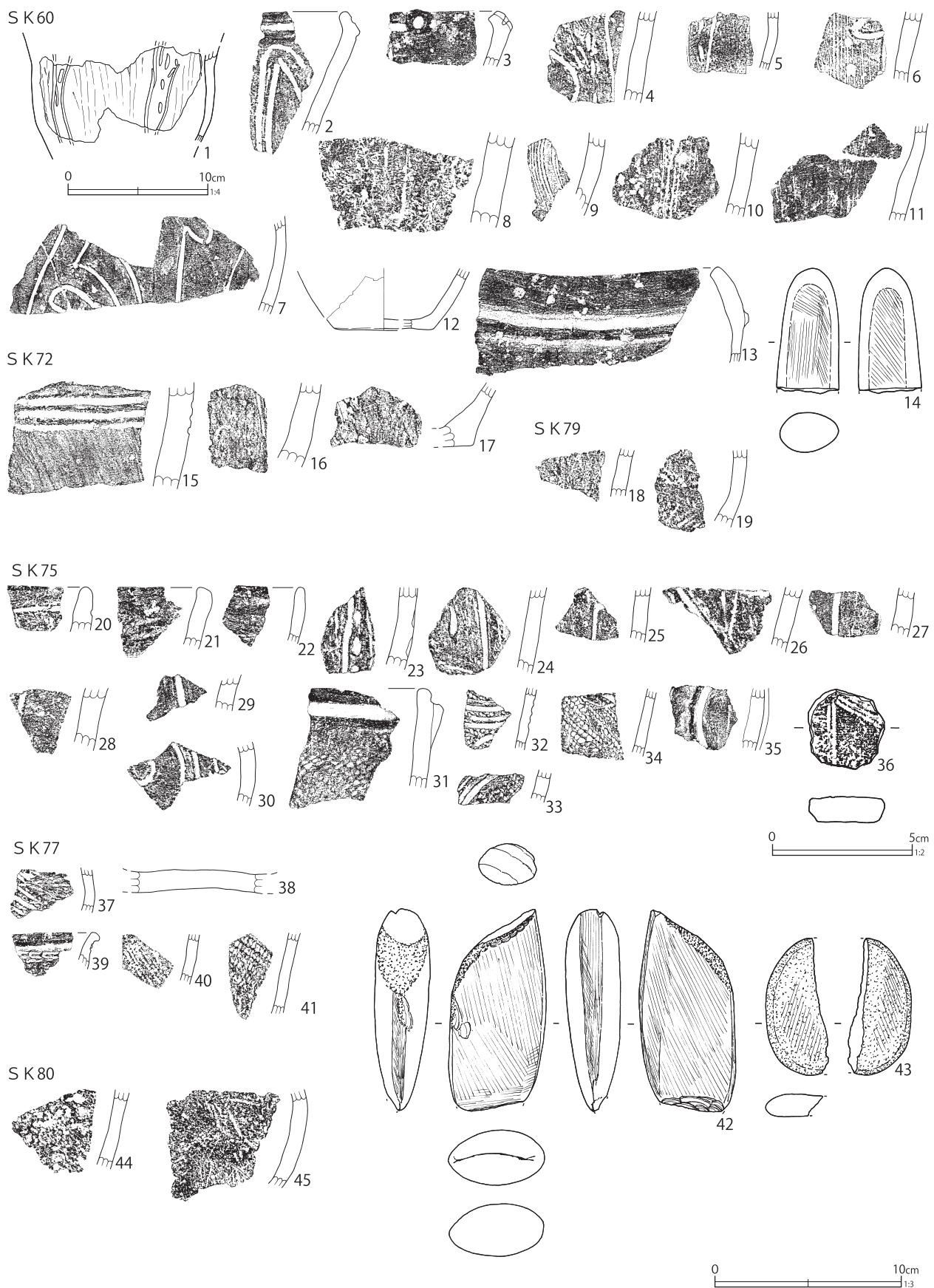
期後半加曾利 E III 式期と考えられる。

第 50 号土壌 (第 46・54 図)

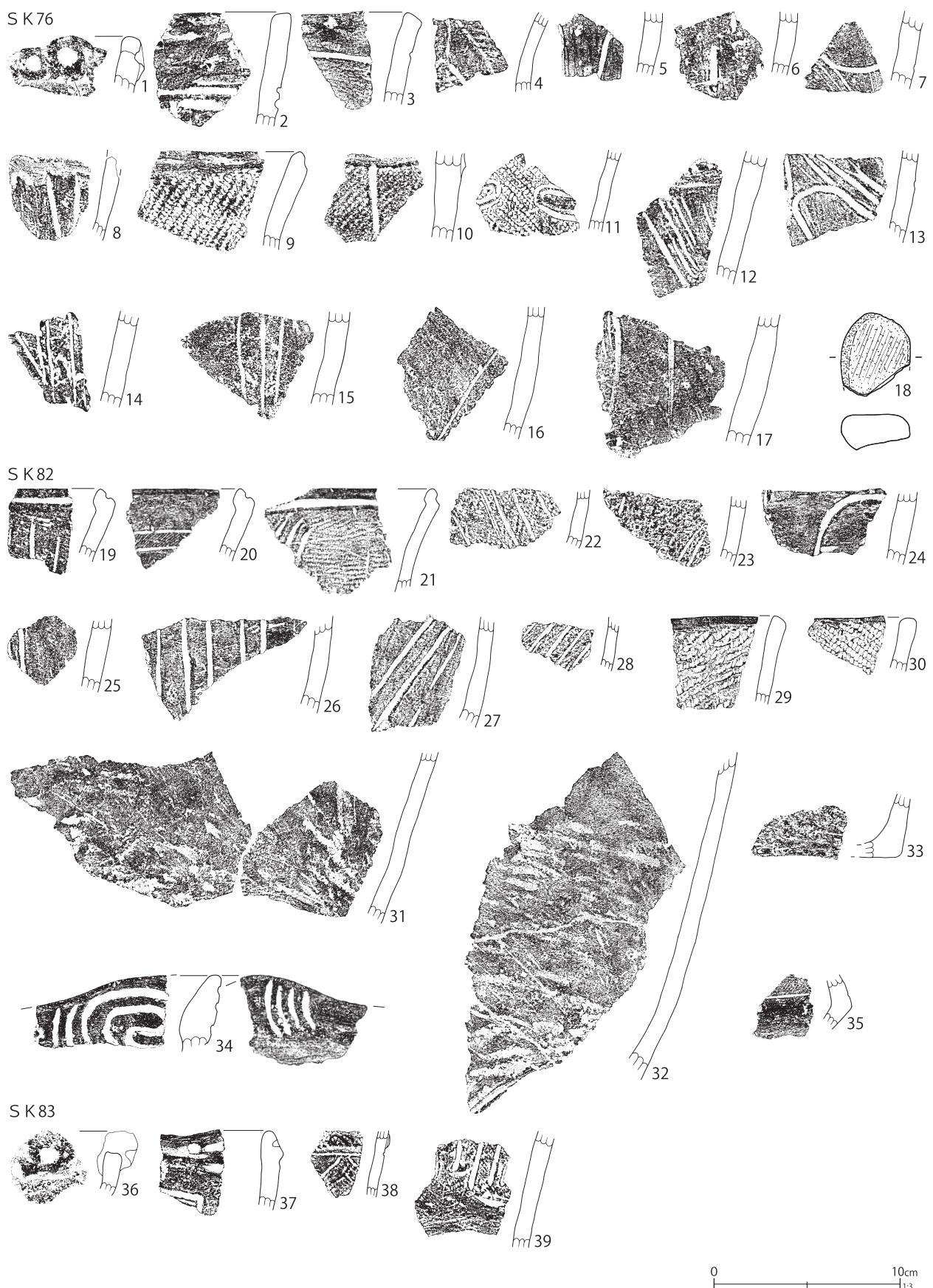
第 54 図 17～30 は出土した遺物である。17

～23 は早期後葉条痕文系土器群の胴部破片で、

24～28 は中期末葉の加曾利 E III 式土器である。



第 56 図 土壤出土遺物 (8)



第 57 図 土壌出土遺物 (9)

29・30は出土した磨石の破片である。土壙の時期は早期後葉である可能性が高い。

第51号土壙（第46・55図）

第55図1～4は出土した遺物である。1・2は中期後半の加曾利E式期の深鉢形土器の破片である。3・4は磨石の破片である。

第54号土壙（第46・54図）

長軸方向両端の底面に2基のピット状の凹みを持つ。北側は長軸0.3m、幅0.2m、深さ0.1mを測る楕円形であるが、南側は径0.3mの円形で深さ0.45mを測る柱穴状である。

土壙内からは、第54図31の完形のミニチュア土器が出土した。底部は台付き状となっている。口径3.7cm、底径3.5cm、器高5.3cmである。32、33は出土した深鉢形土器の破片で、時期は前期後葉と考えられる。

第56号土壙（第47・55図）

第55図5・6は深鉢形土器の小破片である。中期後半の加曾利E式期と考えられる。

第57号土壙（第47・55図）

第55図7・8は地文のみを施文する、前期後葉の深鉢形土器の小破片である。

第59号土壙（第47・55図）

底面の平坦な隅丸方形の土壙である。

第55図15～41は出土した土器である。15は無文で、内面は口唇直下に凹線を廻らせていく。器面は風化などにより荒れており、調整はほとんど見えない。口径は13.2cm、底径は7.7cm、器高は16.0cmである。16～41は破片であるが、沈線で文様を施文する土器が主体を占めている。時期は後期前葉堀之内1式期である。

第60号土壙（第47・56図）

第56図1～14は出土した遺物である。1は器形が復元できた深鉢形土器の胴部である。崩れているが平行する沈線内には、列点が施文されている。残存高は6.5cmである。2～12は深鉢形土器、13は浅鉢形土器の破片である。2・3の口縁部は

肥厚し、沈線を廻らせていく。14は磨石の破片である。時期は後期前葉堀之内1式期と考えられる。

第61号土壙（第47・55図）

第55図9～14は後期前葉の堀之内1式土器である。

第68号土壙（第47・55図）

底面の平坦な浅い掘り込みの土壙である。近世の第86号土壙によって中央部が搅乱されている。

第55図42～47は出土した土器で、42は中期後半、他は後期前葉堀之内1式土器である。48は軽石製の垂飾で、上部に円孔が穿孔されている。

第72号土壙（第47・56図）

第56図15は中期後半の連弧文系土器、16・17は後期前葉の土器片である。

第75・76号土壙（第47・56・57図）

層序から、第75号土壙が第76号土壙に後続する。双方とも斜めに堆積し、埋戻しが想定される。

第56図20～36は第75号土壙から出土した遺物である。20～25は深鉢形土器の小破片である。36は土製円盤である。

第57図1～18は第76号土壙から出土した遺物である。1～17は深鉢形土器の破片である。18は磨石の破片である。時期は両土壙とともに後期前葉の堀之内1式期と考えられるが、層序とは逆に第75号土壙が古い様相を示している。

第77号土壙（第47・56図）

第56図37～41は出土した土器で、37・38は纖維を含み、黒浜式であろう。39～41は諸磯a式と思われる。時期は前期中葉から後葉である。

第79号土壙（第48・56図）

第56図18・19は深鉢形土器の小破片で、後期前葉と考えられる。

第80号土壙（第47・56図）

第56図44・45は深鉢形土器の小破片で、後期前葉を考えられる。

第82号土壙（第48・57図）

古墳跡石室の下部に検出された。底面平坦な円

形の土壙である。自然堆積の様相を示す。

第57図19～35は出土した土器である。19～21など深鉢形土器の口縁部は肥厚し、沈線を廻らせている。34は浅鉢形土器の把手部分である。

第2表 土壙一覧表

遺構名	グリッド	重複	平面形	長軸方位	長軸/m	短軸/m	深さ/m	遺物	図版
1号土壙	H-7	SD 1 (新)	円形	N- 43°-W	1.51	1.50	1.23	第49図1～12	39-1
2号土壙	I-12	SJ 6	楕円形	N- 24°-E	1.20	(0.42)	0.23		
3号土壙	H-11	SJ10 (新)	円形	N- 12°-E	0.84	0.70	0.82	第50図1・2	49-3
5号土壙	F-9		楕円形	N- 60°-E	1.30	1.16	0.72	第49図13～19	39-1 50-1
6号土壙	E・F-9		楕円形	N- 55°-E	1.40	1.26	0.27	第49図20・21	39-1
8号土壙	E-8		円形	N- 51°-E	1.12	1.10	0.21	第49図22～24	50-1
9号土壙	E-8		円形	N- 54°-E	1.45	1.40	0.25	第49図25～28	39-1
10号土壙	E-8		円形	N- 45°-E	1.31	1.28	0.22		
11号土壙	E-9		楕円形	N- 52°-E	1.22	1.03	0.15		
12号土壙	E-9		不明	N- 36°-W	1.40	(0.78)	0.24	第51図1・2	39-2
13号土壙	D・E-9		楕円形	N- 32°-E	2.02	1.78	0.2	第51図7～20	39-2 50-2
16号土壙	D-8・9		不明	N- 35°-W	2.26	1.14	0.42		
17号土壙	D-8	D 8-P 5 (新)	楕円形	N- 90°-E	1.50	1.34	0.28	第51図3	39-2
18号土壙	E-8		楕円形	N- 80°-W	1.28	0.92	0.15		
19号土壙	E-7		楕円形	N- 64°-W	2.14	1.76	0.78		
21号土壙	G-9		楕円形	N- 1°-W	1.46	1.16	0.4	第51図21～34	39-3 50-2
22号土壙	F-9		円形	N- 81°-W	0.78	0.74	0.19	第51図4～6	39-2
23号土壙	F-8		円形	N- 78°-E	0.68	0.66	0.2	第51図35～49	39-3
24号土壙	E-8		円形	N- 39°-E	0.82	0.78	0.39	第51図50	39-3
25号土壙	C-8		円形	N- 50°-E	1.08	1.00	0.14	第52図1～6	40-1
26号土壙	D-6		円形	N- 54°-E	0.70	0.60	0.23		
27号土壙	D-6・7		楕円形	N- 53°-W	1.42	1.24	0.25		
28号土壙	D-7		不明	N- 37°-E	(1.34)	1.36	0.22		
30号土壙	J-10		隅丸方形	N- 68°-E	1.70	0.92	0.27	第52図7・8	21-4 40-1
31号土壙	J-11		不明	N- 40°-W	(1.02)	1.44	0.17	第52図9～12	40-1 50-2
32号土壙	K-10		楕円形	N- 55°-E	1.90	1.72	0.66	第52図15～20	21-5・6 40-1 50-2
33号土壙	K-10		楕円形	N- 46°-E	1.54	1.24	0.55	第52図21～25	40-1
34号土壙	K-9		隅丸方形	N- 46°-E	0.90	0.73	0.27	第53図1～5	40-2
35号土壙	I・J-12J-9	SJ 5 (新) SJ11 (旧)	楕円形	N- 65°-W	1.33	1.20	0.57	第53図9～17	40-2
36号土壙	J-9		楕円形	N- 45°-E	0.72	0.62	0.25		
37号土壙	I-11		円形	N- 73°-E	0.82	0.80	0.15	第52図13・14	40-1
38号土壙	I-11		楕円形	N- 76°-E	1.08	0.82	0.19		
39号土壙	I-11		楕円形	N- 85°-E	0.72	0.58	0.28	第53図6～8	40-2
40号土壙	H-11		楕円形	N- 2°-W	1.10	0.90	0.07	第53図18・19	40-2
41号土壙	I-12	SJ11	楕円形	N- 83°-W	0.86	0.74	1.86	第53図24～31	40-2
42号土壙	H-10		楕円形	N- 52°-E	1.44	1.10	0.33	第53図20・21	40-2
43号土壙	D-7	SD 3 (新)	楕円形	N- 62°-E	1.64	1.24	0.37		
44号土壙	D-7		円形	N- 25°-W	0.78	0.74	0.52		
45号土壙	H-7	SS 6・SD 1 (新)	不明	N- 40°-E	(0.58)	(0.52)	0.33	第53図32～39	21-7 40-3
46号土壙	G-8		楕円形	N- 13°-E	0.64	0.55	0.16	第54図1～10	41-1
48号土壙	H-6	SJ13 (新)	楕円形	N- 69°-E	1.06	0.92	0.27	第53図22・23	40-2
49号土壙	G・H-6	SJ13 (新)	楕円形	N- 24°-W	1.04	0.82	0.46	第54図11～15	41-2
50号土壙	E-5		楕円形	N- 45°-E	1.28	1.12	0.36	第54図17～30	41-2 50-2
51号土壙	E・F-5		楕円形	N- 20°-E	1.22	0.97	0.48	第55図1～4	41-3 50-2
52号土壙	F・G-5		楕円形	N- 47°-E	1.14	0.94	0.32	第54図16	41-1
53号土壙	F-5		楕円形	N- 87°-W	0.96	0.86	0.3		
54号土壙	F-6・7	SI 1	楕円形	N- 33°-W	1.84	1.16	0.26	第54図31～33	21-8 41-1
56号土壙	H-6		円形	N- 47°-W	0.76	0.72	0.22	第55図5・6	41-3
57号土壙	H-5		楕円形	N- 32°-E	1.14	0.90	0.27	第55図7・8	41-3
59号土壙	K-7		楕円形	N- 53°-E	1.46	1.32	0.35	第55図15～41	21-9 42-1
60号土壙	K-7・8		楕円形	N- 86°-E	0.90	0.83	0.29	第56図1～14	21-10 42-2 50-2
61号土壙	L-8		楕円形	N- 22°-W	0.97	0.80	0.18	第55図9～14	41-3
68号土壙	I-6	SS 6・SK86 (新)	楕円形	N- 36°-E	1.94	1.64	(1.32)	第55図42～48	41-3 50-2
72号土壙	I-7	SD10 (新)	楕円形	N- 40°-W	0.56	0.48	0.4	第56図15～17	42-2
73号土壙	H-8	SK76 (旧)	楕円形	N- 20°-W	1.88	1.58	0.78	第56図20～36	42-3
76号土壙	H-8	SK75 (新)	不明	N- 5°-E	1.56	1.03	0.61	第57図1～18	43-1 50-2
77号土壙	I-8	SJ20 (新)	不明	N- 20°-W	2.40	0.54	0.28	第56図37～43	42-2 50-2
78号土壙	D-7		不明	N- 45°-W	1.06	0.77	0.16		
79号土壙	D-7		楕円形	N- 40°-W	1.98	1.36	0.17	第56図18・19	42-2
80号土壙	D-7	SD 3 (新)	楕円形	N- 36°-W	1.52	1.10	0.17	第56図44～45	42-3
81号土壙	C-7		楕円形	N- 75°-W	1.62	1.26	0.2		
82号土壙	H-8	SS 6・SD 1 (新)	円形	N- 10°-W	0.96	0.90	0.43	第57図19～35	43-1
83号土壙	H-8		楕円形	N- 38°-E	0.86	0.78	—	第57図36～39	43-1
85号土壙	H・I-11	SJ10 (旧)	楕円形	N- 3°-E	1.48	0.85	0.34		

時期は後期前葉の堀之内1式期である。

第83号土壙(第48・57図)

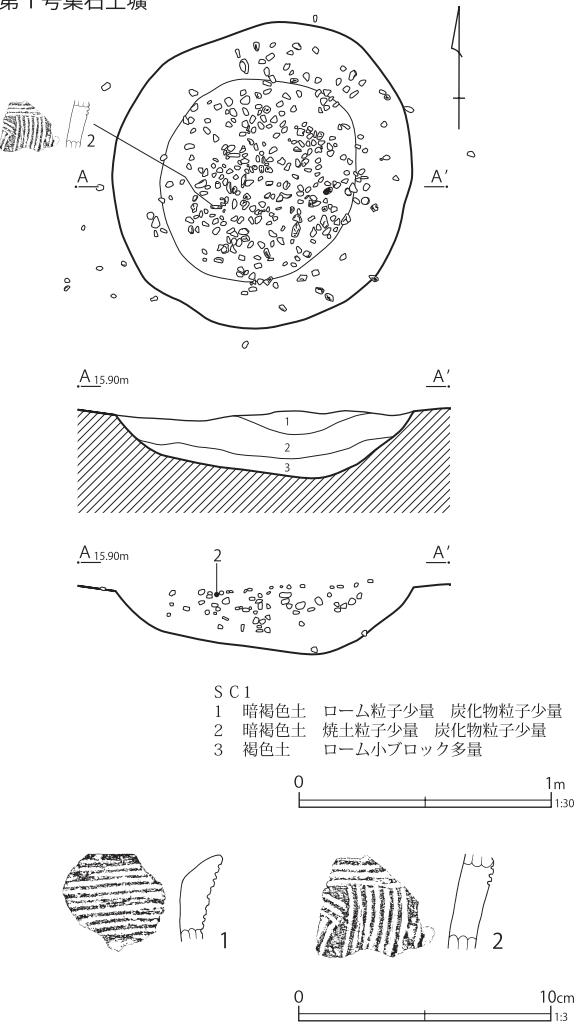
第57図36～39は後期前葉堀之内1式期の深鉢形土器の破片である。

(6) 集石土壙 (第 58・59 図)

1 基のみが検出された。調査区西側の F・G 1-6 グリッドに位置する。同時期の遺構は周辺に検出されていない。径約 1.2 m、深さ約 0.5 m の円形土壙の中に多量の礫が集中していた。また、わずかながら、土壙の周囲にも礫の分布が広がっていた。多くの礫は土壙の底面から 10 ~ 20 cm ほど浮いた状態で出土した。底面は西から東側に向かって緩やかに傾斜する。壁は緩やかに立ち上がる。土壙自体に焼土化等の痕跡は見られないが、覆土に少量の焼土粒子が混入しており、礫の中に被熱しているものが多くみられたことから、蒸焼調理等の可能性が考えられる。

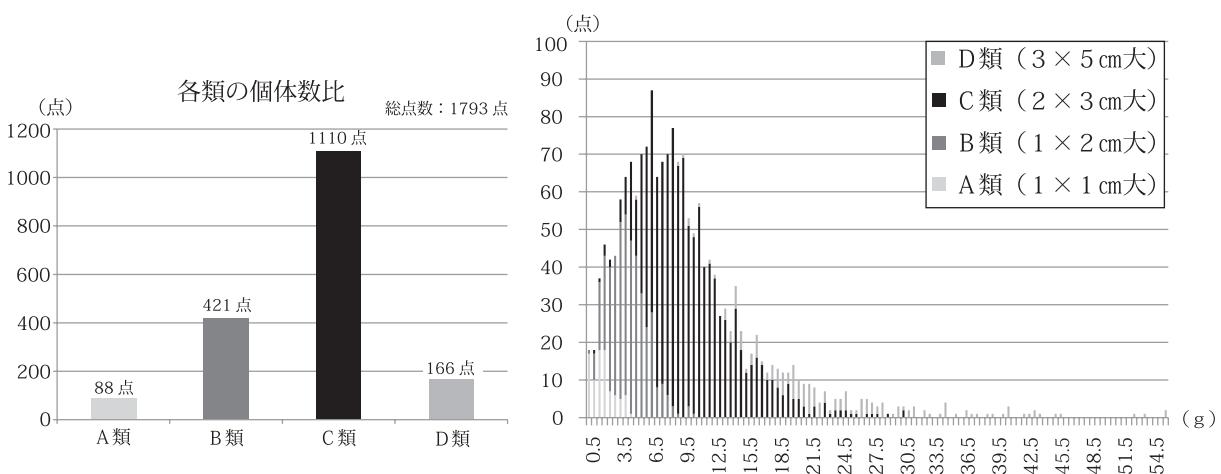
出土した礫は破碎を受けていないものが多く、大半が 5 cm に満たない大きさのものであった。このため、石が選択されていることを想定し、出土した 1793 点を、大きさ別に、A 類 ($1 \times 1 \text{ cm}$)・B 類 ($1 \times 2 \text{ cm}$)・C 類 ($2 \times 3 \text{ cm}$)・D 類 ($3 \times 5 \text{ cm}$) に分類し、点数および重量を計測して第 59 図に示した。最も多く見られた C 類は 1110 点と全体の 61.9% に達し、意図的に選択されていることがうかがえる。また、重量別グラフからは、7 ~ 8 g 程度の礫と、16 g 程度のより重い礫の 2 種類が選択されていることがうかがえる。さらに石材については、肉眼による観察では、チャートを中心にして流紋岩・砂岩などが見られた。

第 1 号集石土壙

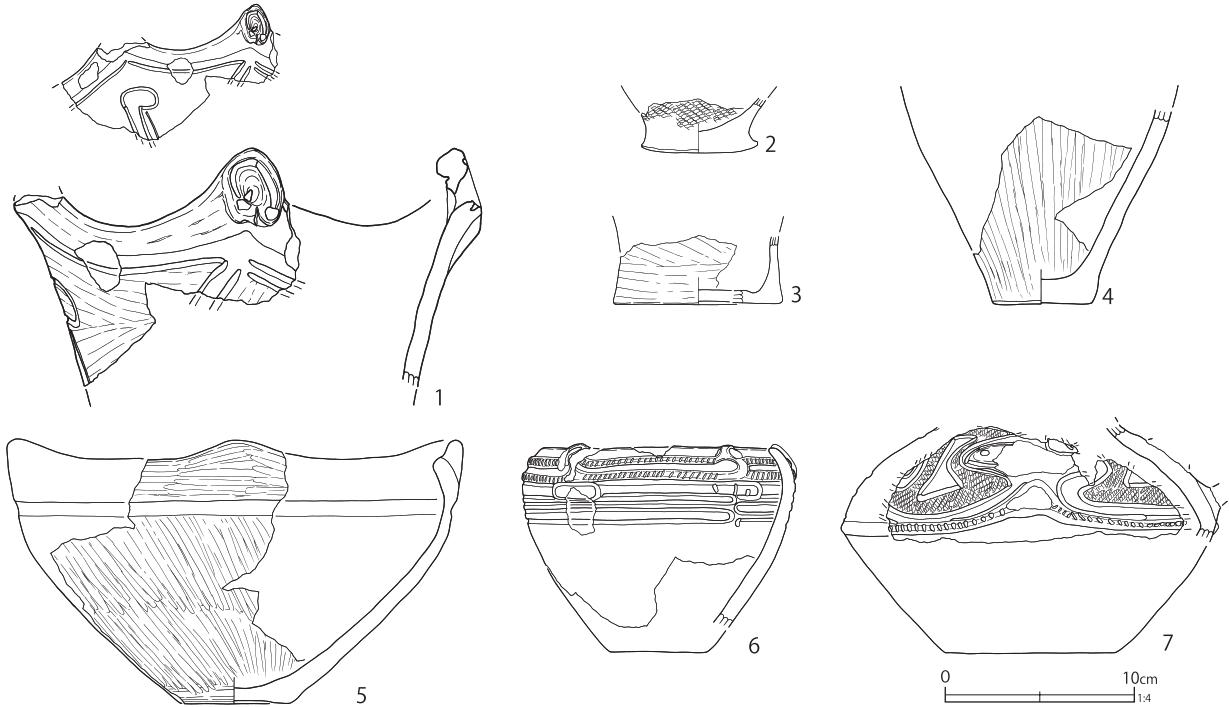


第 58 図 第 1 号集石土壙・出土遺物

第 58 図 1・2 は深鉢形土器の破片である。集合沈線が施文された土器で、時期は前期末葉諸磣 c 式期と考えられる。



第 59 図 土壙出土小礫重量別分布図



第60図 グリッド出土遺物（1）

（7）グリッド出土遺物

グリッド出土土器（第60～67図）

グリッドからは、縄文時代早期初頭から後期前葉までの土器群が出土した。

第I群土器

早期の土器群を一括する。

第1類（第61図8～78）

早期初頭の撚糸文系土器群を一括する。

8～13は口唇部が肥厚外反する井草I式土器で、口唇部文様帶に2段の縄文が施文され、頸部文様帶に横走及び斜行する縄文が施文される。9・10の口唇部下には指頭圧痕が残される。縄文は12がLRで、他はRLである。

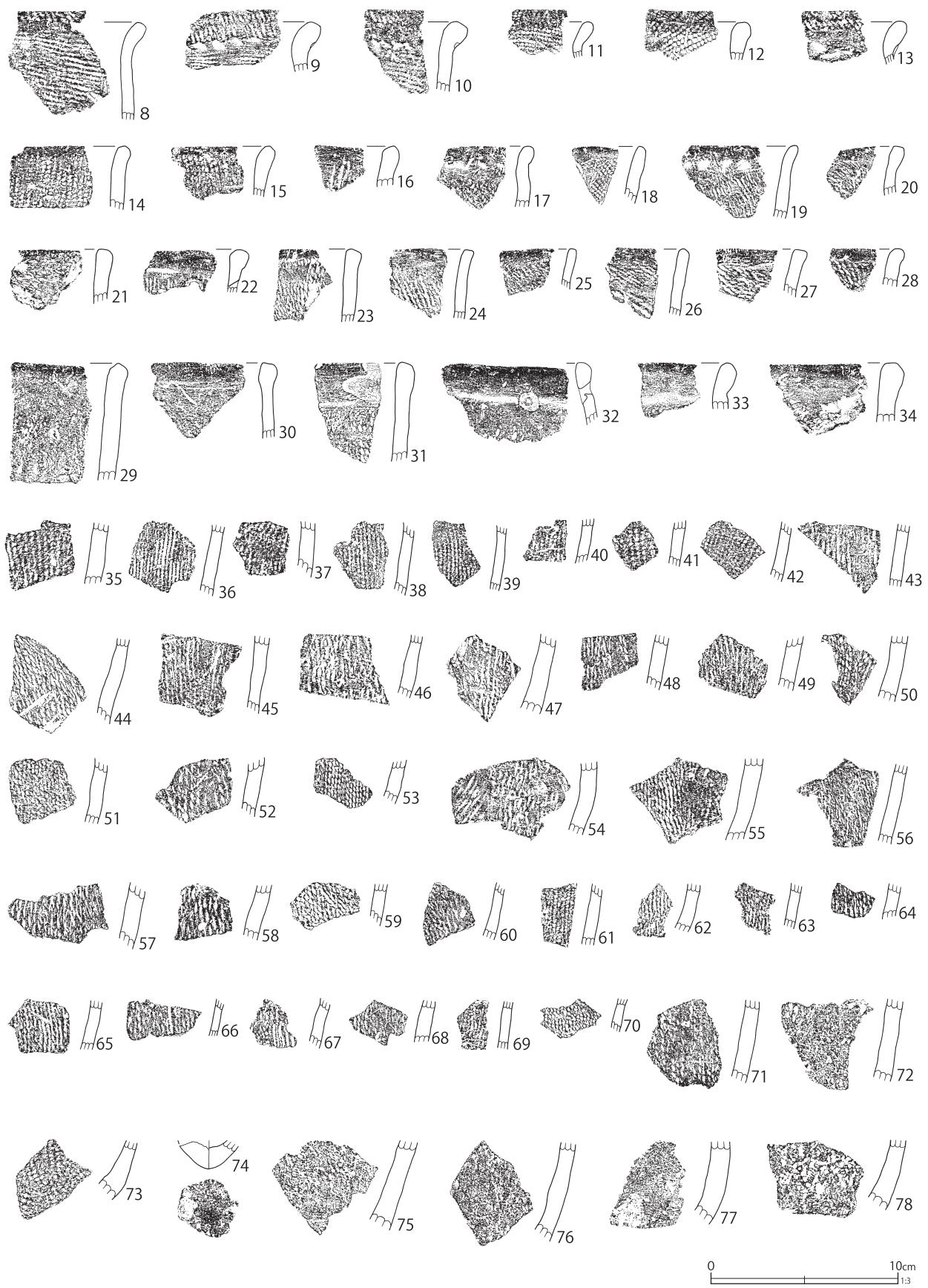
14～29は口唇部に施文のない夏島式の古段階から新段階の土器群である。14～16は口唇部が若干肥厚して外反し、口唇端部から縦走縄文が施文される。17～19は先細り状の丸頭口唇部がやや開く器形で、17・19は口唇部下の屈曲部に指頭圧痕がみられる。いずれも縄文RLが施文される。20～28は肥厚の少ない口唇部が角頭状を呈し、やや外反する器形で、全て撚糸文Rが施文される。

22・28は口唇部が若干肥厚し、口唇部下に屈曲部を持つ。24～27は口唇部下にやや無文部を設けて撚糸文が施文されるものであるが、口唇部の特徴などから夏島式に比定される。29は口唇部が丸頭状でやや外反する無文土器である。夏島式新段階の無文土器と思われる。

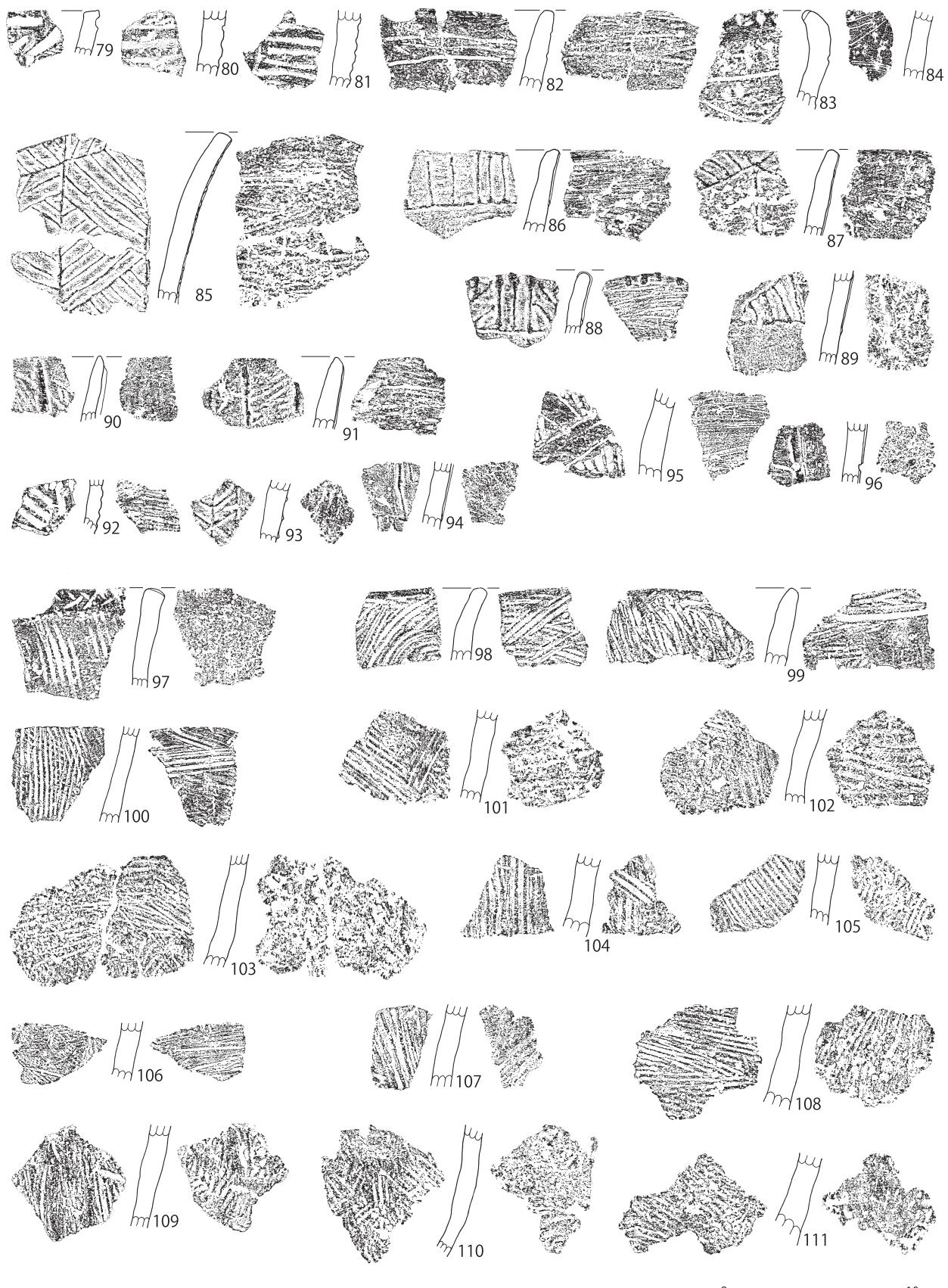
30～34は稻荷原式土器を一括する。外端部が若干肥厚する口唇部が内湾気味に開く器形で、口縁部に削り込み状の屈曲や、凹線状の屈曲部が見られる土器群である。30・33・34は無文土器であり、34は口縁部に強い削りを施して屈曲部を造りだしている。31は肥厚口唇部の外端部に添付した粘土が剥落しており、やや大粒の撚糸文Rが施文される。32・33は口縁部に凹線状の沈線が施文され、口唇部がやや外反する。32は大粒の撚糸文Lが施文されている。

35～72は縄文や撚糸文が施文される胴部破片で、縄文はRL、撚糸文はRが殆どである。71・72は撚糸文の特徴から、稻荷原式土器の胴部破片と思われる。

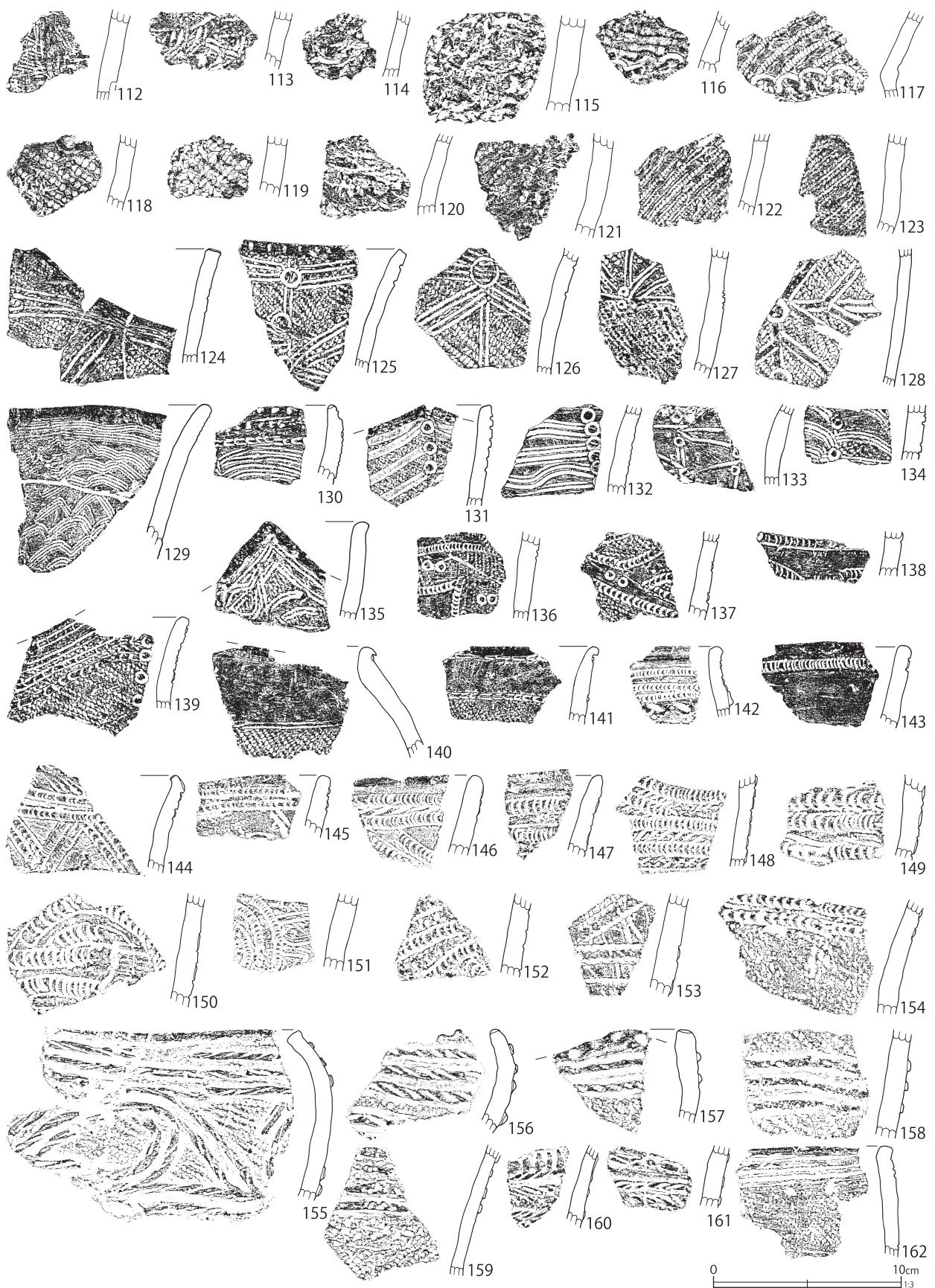
73～78は丸底状の尖底を呈する底部破片であ



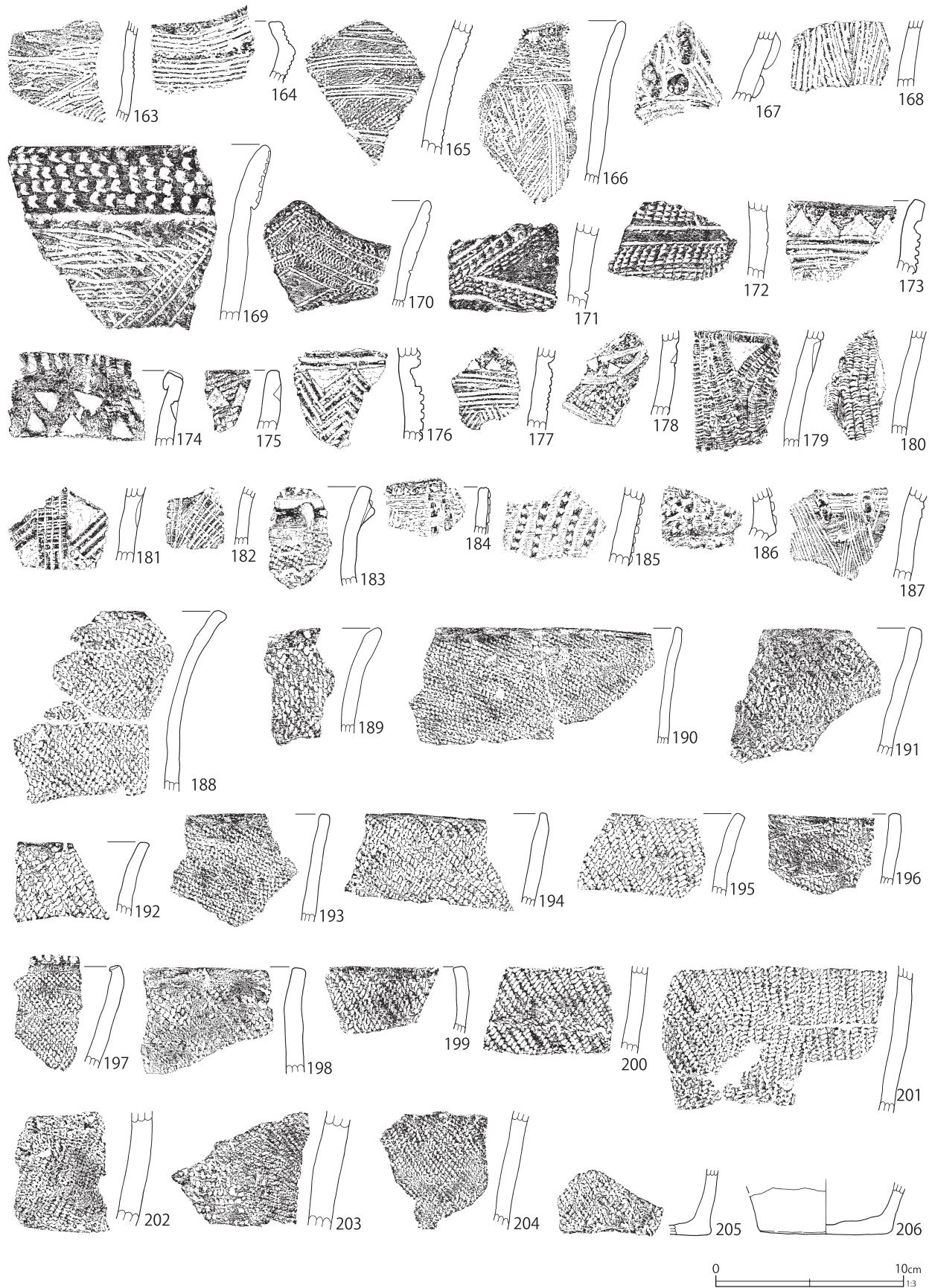
第61図 グリッド出土遺物（2）



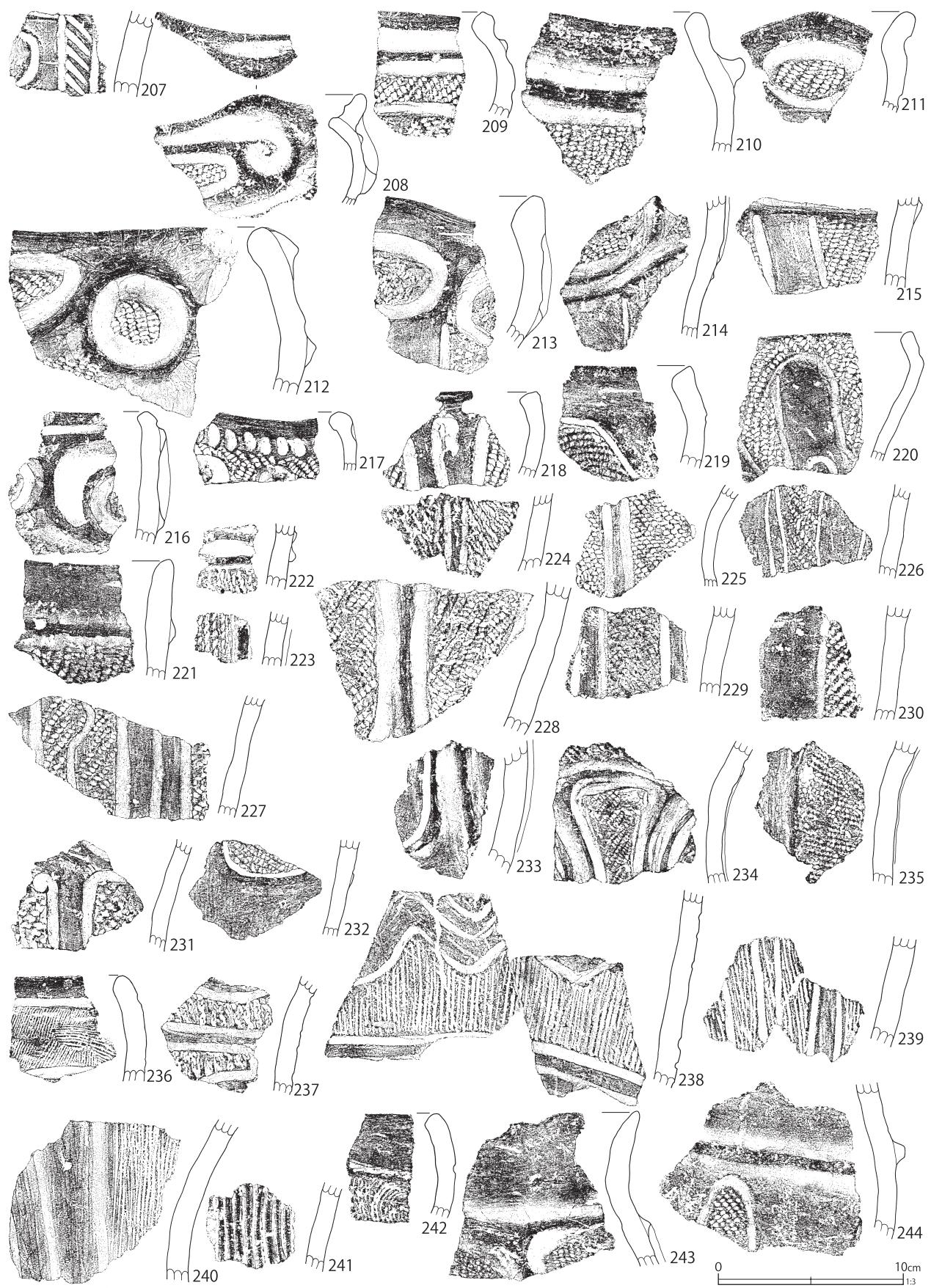
第62図 グリッド出土遺物（3）



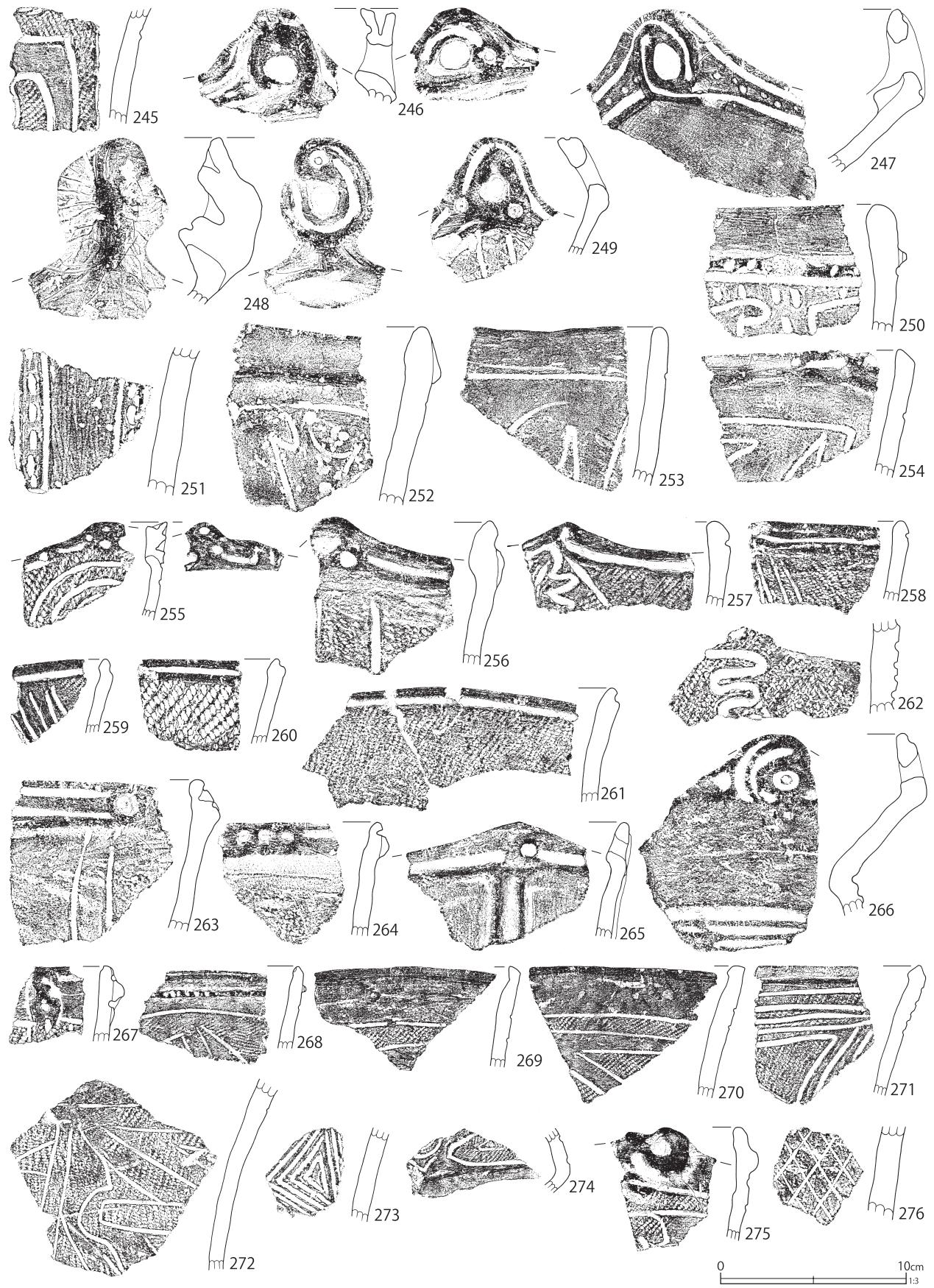
第63図 グリッド出土遺物（4）



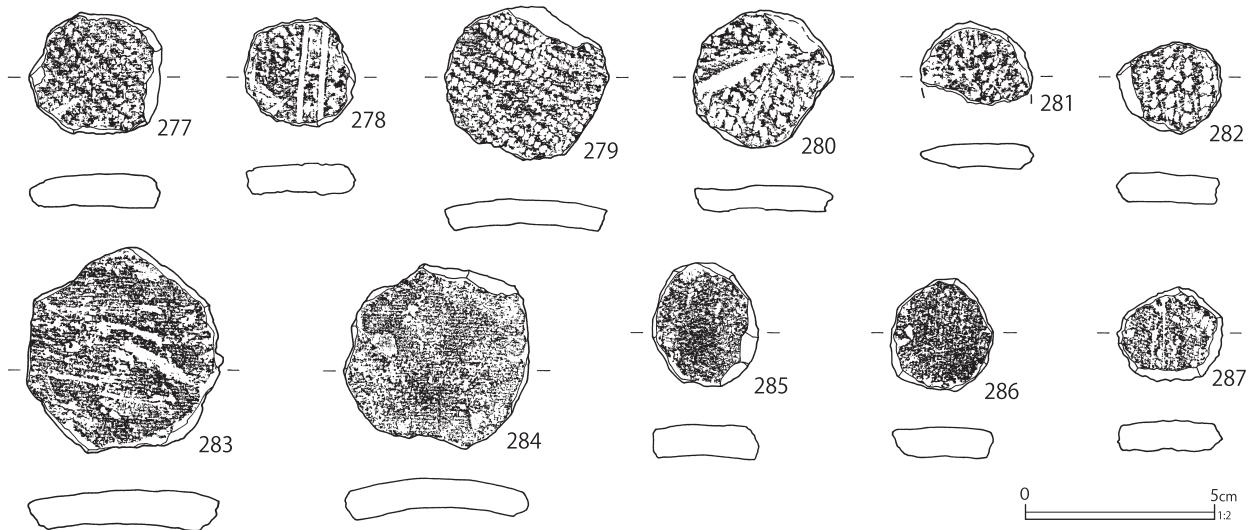
第64図 グリッド出土遺物（5）



第65図 グリッド出土遺物（6）



第66図 グリッド出土遺物（7）



第67図 グリッド出土遺物（8）

り、73は底部まで縄文が施されている。

第2類（第62図79～84）

早期中葉の沈線文系土器群を一括する。

79～81は田戸下層式土器である。79は角頭状の口唇部を呈し凹線状の太沈線でモチーフが描かれている。80・81は多段の凹線が施文される胴部破片である。

82～84は田戸上層式土器である。82は先細りの角頭状口唇部が開く器形で、口縁部に短沈線の平行沈線が施文される。83は口縁部がキャリパー状の器形を呈し、口唇部に刻みが施される。口縁部は細い短沈線で区画され、鋸歯状文が施される。84は集合細沈線で鋸歯状文が描かれる。

第3類（第62図85～111）

胎土に纖維が含まれ、貝殻条痕文が施文される早期後半の条痕文系土器群を一括する。

85～91・93・94は細隆起線で、92は太沈線で文様を描く野島式土器である。85は口縁部に幅狭な文様帯を持ち、胴部に菱形の文様が描かれている。86は口縁部の幅狭文様帯に集合細隆起線が垂下されるもので、87は口唇部直下から区画文が描かれる。88は幅狭口唇部文様帯が3本細隆起線で区画されるが、口唇部上を巻き込んで細隆起線が施文される。

92は集合太沈線でモチーフが描かれた、野島

式でも新しい段階の土器群と思われる。

95・96は文様交点に円形竹管文が施文される鵜ガ島台式土器である。95は沈線の交点部分に、96は細隆起線の縦位区画線上に円形竹管文が施文されている。

97～111は条痕文系土器群の無文の口縁部もしくは胴部や底部破片である。97の口縁部には矢羽根状の刻みが施される。いずれも纖維を少量含み、内外面に貝殻条痕成形が施される。

第II群土器

縄文時代前期の土器群を一括する。

第1類（第63図112～115）

花積下層式土器を一括する。112・113は貝側背圧痕文が施文され、112は裏面に条痕文が施文される。114～115は纖維の脱去痕が目立ち、裏面には粗い整形痕が施される。

第2類（第63図116～123）

黒浜式土器を一括する。116～123は縄文施文の土器である。118・119は器形の屈曲部にコンパス文が施文されている。

第3類（第63図124～141）

諸磯a式土器を一括する。124～128は米字文の土器である。127は胎土に纖維を含んでおり、黒浜式に遡る可能性がある。

129・132は小波状文の土器である。129は横

帶区画が口唇下のみで、以下には小波状文が重層的に施文されている。132は横多帶区画である。

131は肋骨文の土器で、130・134は木の葉文と思われる土器である。

133は縦区画線に接して、縦方向の鋸歯文が施文される土器である。

139・141～143は爪形文が器面を廻る土器を本類とした。139は縦の円形刺突文を持つ。

135～138は木の葉文が施文された土器で、いずれも単位文化し、磨り消しを伴うなど、新しい様相を持っている。

140は壺形土器の口縁部で、口唇部を爪形文で区画し、胴部を平行沈線で区画している。

第4類(第63図144～162、第64図163～165)

諸磯b式土器を一括する。144～154は第3類と比べ、やや幅広い爪形文で施文される特徴がある。

155～161は浮線文の土器群である。157～159は浮線上に縄文が、他は刻みが施されている。

162～165は浮線文に平行する沈線文の土器である。164・165は諸磯b3式古段階であろう。

第5類(第64図166～168)

諸磯c式土器を一括する。166は縦方向の条線文が施文される土器である。167は貼付文を有する土器である。

第6類(第64図169～172)

興津式土器を一括する。169は折り返し口縁である。

第7類(第64図174～187)

十三菩提式を一括する。174～182は三角印刻を有する土器である。176・181は沈線による鋸歯状文間に印刻が施されている。179・180は結節沈線文による渦巻き状のモチーフ間に印刻が施されている。182は現存部分に印刻が見られないが、本類に含めた。

183は縄文施文の土器である。本例には結節が施されている。

184～187は条線地文上に結節浮線文を有する

土器である。東関東的な特徴を有する土器と考えられる。

第8類(第64図188～206)

縄文施文のみの土器を一括した。188～204は口縁から胴部破片で、ほぼ諸磯a式と思われる。205・206は底部破片で、諸磯a式と思われる。

第Ⅲ群土器

中期の土器群を一括する。

第1類(第65図207)

中期中葉の土器を一括する。207は勝坂期終末の土器で、沈線のみが施文されている。

第2類(第60図5、第65図208～244)

中期後半の土器群を一括する。

208～216・222～230・236はキャリバー形の深鉢形土器である。222・223は加曽利EⅠ式、他は磨消懸垂文を施文する加曽利EⅢ式である。217～221・231～235は口縁部文様帯を持たない土器で、加曽利E式終末の土器である。232～235は微隆起状の隆帯で文様が施文されている。

237・238は連弧文系土器である。239～241は地文が条線となる曾利式系土器である。加曽利EⅢ式に伴うと考えられる。

5・242は浅鉢形土器である。5は器形が復元できた土器で、口縁部は4単位の波状口縁と考えられる。口縁と胴部は幅広の沈線が廻らされて区画され、無文の口縁部が造りだされている。推定口径23.0cm、推定低径5.8cm、残存高は14cmである。243・244は両耳壺で、加曽利E式終末の土器に伴うと考えられる。

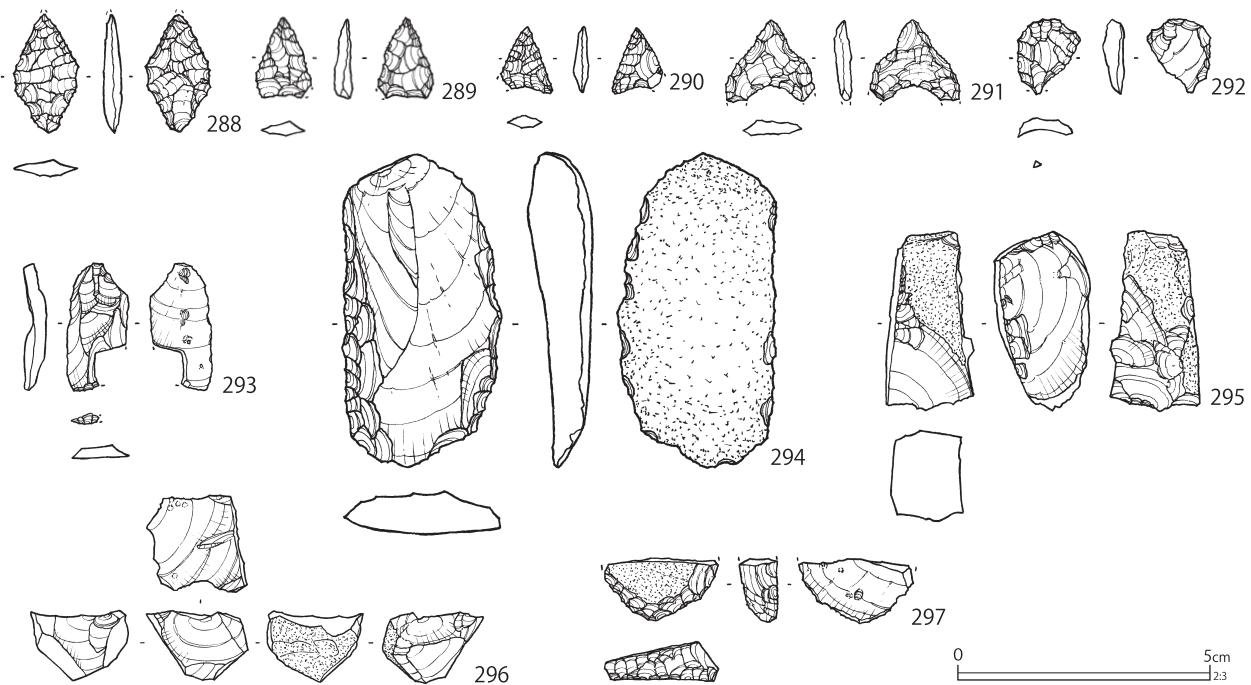
第Ⅳ群土器

後期の土器群を一括する。

第1類(第66図245、248)

後期初頭の称名寺式系土器を一括する。245は沈線で文様が区画され、その内側に単節RLの縄文が充填されている。248は把手部分である。

第2類(第60図1～4・7・第66図246・247・249～274)



第68図 グリッド出土遺物（9）

後期前葉の堀之内式土器を一括する。

1・246・247・249～254は称名寺式土器の文様が残存するものである。1は器形が復元できた土器である。口縁は4単位の波状口縁で、波頂部には隆帯で貼付が施文され、盲孔や沈線文が施文されている。胴部には沈線でスペード文などが施文されている。推定口径24cm、残存高は13cmである。堀之内1式に相当する。

255～265は深鉢形土器で、口縁部は肥厚し、沈線を廻らせていている。また波状口縁部の波頂部下に盲孔が施文される。胴部には地文が施され、沈線で文様が施文されている。266は頸部が大きく屈曲し無文となる。堀之内1式土器である。

267～273は深鉢形土器で、文様は胴上部に集約され、文様は横位に展開し、帶状の磨消縄文は三角形など幾何学的な文様が施文される。堀之内2式土器である。

7・274は注口土器である。7は器形復元が可能な土器である。注口部は残存していない。把手部分は剥落痕が認められる。ソロバン玉状の胴部の肩部に文様が施文されている。文様帶の下端部にキザミを持つ隆帯を1条廻らせてている。地文は

単節LRの縄文である。残存高は6cmである。堀之内2式である。

第3類（第60図6、第66図275・276）

後期中葉の加曽利B式土器を一括する。

6は鉢形土器である。狭い無文の口縁の下に隆帯を2本廻らせてている。口唇部には隆帯に貼付するように小突起が施されている。隆帯上にはキザミが施文されている。胴部には横長の楕円文等が沈線で施文されている。推定口径12cm、残存高は10cmである。

275は口縁部の破片で、胴部には横帶文と区切り文が施文されている。276は粗製土器で格子目文が施文されている。加曽利B1式土器である。

グリッド出土土製品（第67図）

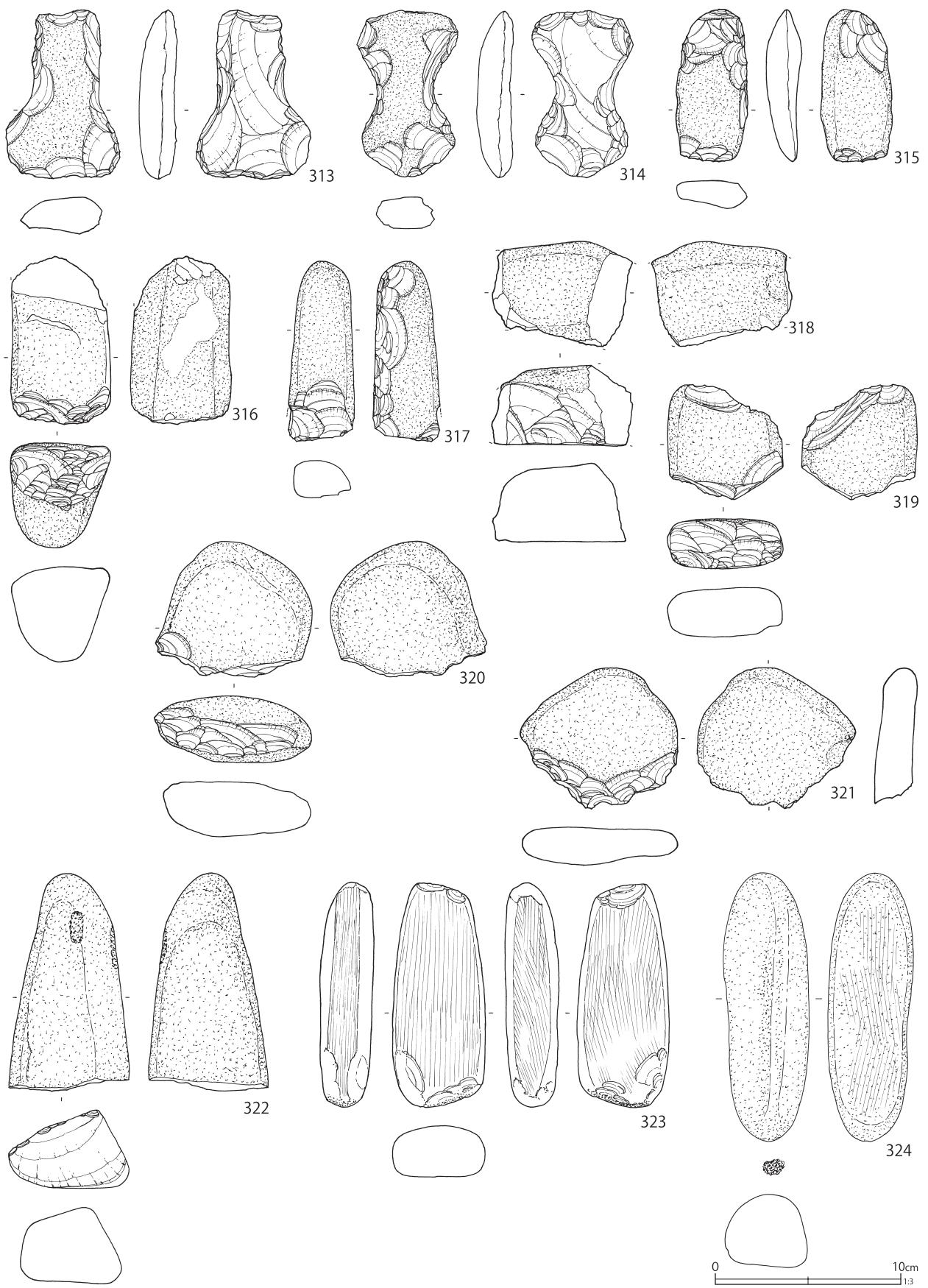
第67図277～287はグリッドから出土した土製円盤である。いずれも深鉢形土器の胴部破片を打ち欠いて、円形に加工している。

グリッド出土石器（第68～71図）

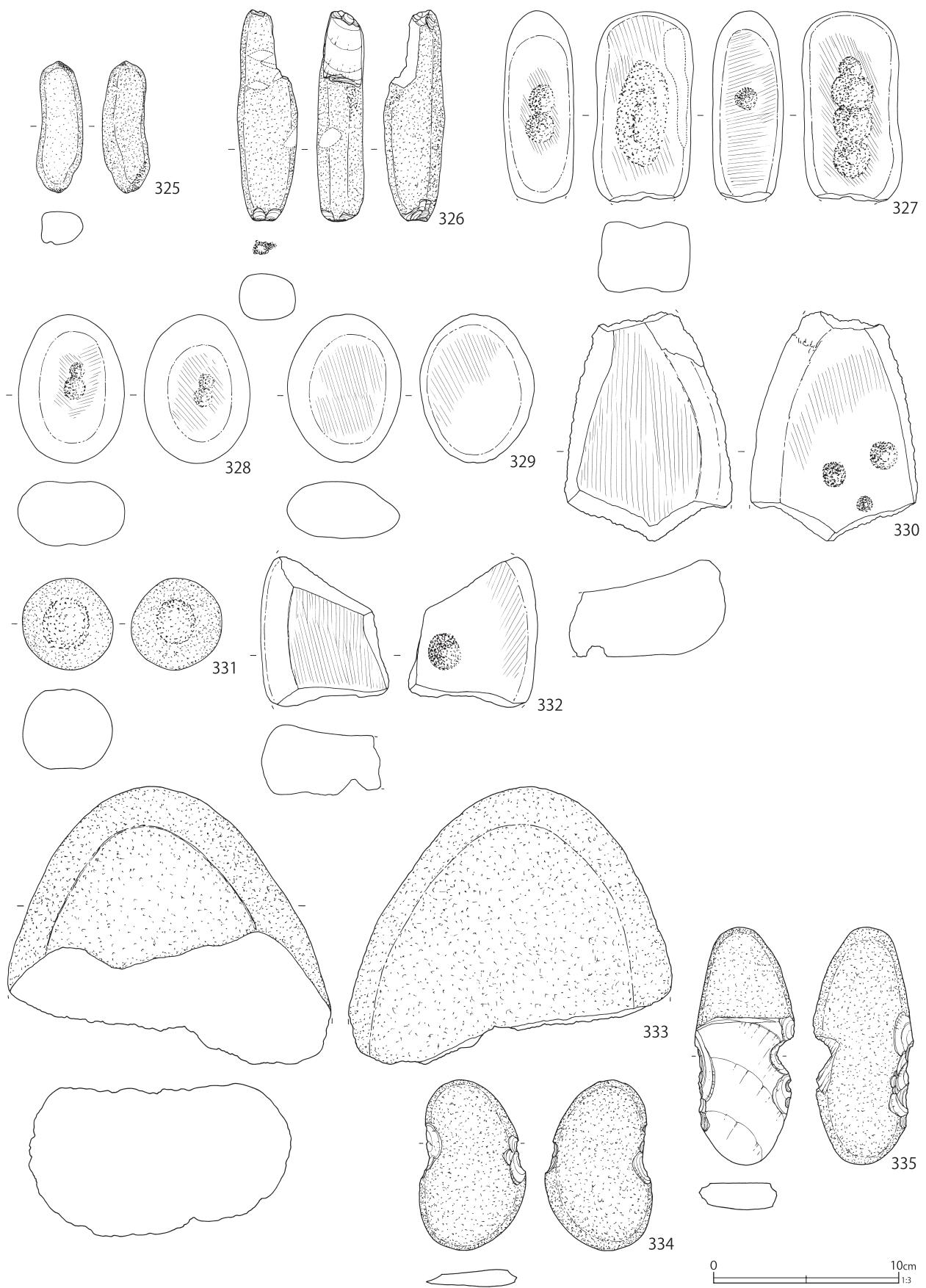
第68図288～297は小型石器である。288～291は石鏃である。288は有茎で、基部が突出している。292は石錐である。錐部分の作り出しあは粗雑である。293・294・297はスクレイパーである。



第69図 グリッド出土遺物 (10)



第70図 グリッド出土遺物 (11)



第71図 グリッド出土遺物 (12)

293・294は剥片に最低限の剥離調整を行っている。297は端部に丁寧な剥離調整を施している。295は原石、296は石核である。297は端部に丁寧な剥離調整を施している。

第69図298～303は磨製石斧である。完形のものはない。299は乳房状であるが、他は定角式に近い形状で、中型から小型のものである。

第69図304～312、第70図313・314は打製石斧である。304は裏面に大きく自然面を残している。305・306は小型である。

第70図315～321は礫器である。自然礫の一部を加工して刃部としているが、角度は鈍角である。

第3表 石器・石製品観察表

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	図版	備考
第12図19	S J 3	磨石	安山岩	5.2	3.8	3.1	72.1	47-3	
第12図20	S J 3	石皿	閃緑岩	7.7	5.4	4.6	269.8	47-3	
第12図21	S J 3	石皿	砂岩	21.5	6.5	8.1	959.6	47-3	
第17図83	S J 6	石鏸	黒曜石	1.5	1.3	0.5	0.6	48-2	
第17図84	S J 6	石鏸	チャート	2.2	1.5	0.5	1.4	48-2	
第17図85	S J 6	石鏸	チャート	2.7	1.6	0.4	1.5	48-2	
第17図86	S J 6	くさび形石器	チャート	2.6	1.6	0.9	3.2	48-2	
第17図87	S J 6	石鏸（未成品）	チャート	2.8	2.2	0.8	4.2	48-2	
第17図88	S J 6	磨石	安山岩	5.1	5.0	2.1	43.4	48-1	
第17図89	S J 6	打製石斧	片岩	[5.7]	4.3	0.5	12.7	48-1	
第17図90	S J 6	打製石斧	砂岩	14.2	7.6	3.2	358.6	48-1	
第17図91	S J 6	打製石斧	ホルンフェルス	7.7	[4.4]	2.5	75.6	48-1	
第17図92	S J 6	石皿	安山岩	[6.7]	[9.1]	4.0	253.4	48-1	
第17図93	S J 6	磨石	安山岩	4.3	3.0	2.2	39.3	48-1	
第17図94	S J 6	磨石	安山岩	5.3	5.7	3.1	68.2	48-1	
第17図95	S J 6	磨石	安山岩	13.0	5.2	2.2	89.1	48-1	
第17図96	S J 6	磨石	安山岩	10.0	4.0	4.6	174.8	48-1	
第17図97	S J 6	磨石	安山岩	13.2	6.3	5.8	602.1	48-1	
第22図131	S J 9	石鏸	チャート	[2.8]	1.5	0.5	1.1	49-1	
第22図132	S J 9	石鏸	チャート	2.0	[1.3]	0.4	0.5	49-1	
第22図133	S J 9	石鏸	チャート	[2.1]	[0.9]	0.3	0.4	49-1	
第22図134	S J 9	石錐	黒曜石	1.4	1.5	0.4	0.7	49-1	
第22図135	S J 9	磨製石斧	緑色岩	11.9	4.4	2.4	193.7	48-3	
第22図136	S J 9	打製石斧	ホルンフェルス	[4.8]	[5.1]	1.1	34.7	48-3	
第22図137	S J 9	磨石	安山岩	8.8	7.0	4.1	274.4	48-3	
第22図138	S J 9	磨石	安山岩	10.6	6.3	6.3	624.4	48-3	
第22図139	S J 9	凹石	砂岩	[11.4]	7.1	2.6	346.9	48-3	
第22図140	S J 9	磨石	安山岩	4.3	6.8	3.8	135.8	48-3	
第22図141	S J 9	磨石	安山岩	4.4	4.8	2.5	58.6	48-3	
第22図142	S J 9	磨石	安山岩	5.7	3.9	2.4	21.1	48-3	
第22図143	S J 9	磨石	安山岩	3.6	5.1	1.8	25.1	48-3	
第25図28	S J 10	Uフレ	チャート	2.4	1.7	0.7	2.1	49-1	
第25図29	S J 10	打製石斧	頁岩	9.8	5.2	1.2	73.8	47-3	
第25図30	S J 10	打製石斧	ホルンフェルス	[7.9]	[6.2]	2.5	144.2	47-3	
第25図31	S J 10	打製石斧	ホルンフェルス	[8.5]	5.8	3.1	180.4	47-3	
第25図32	S J 10	打製石斧	ホルンフェルス	[4.5]	[7.4]	1.6	57.7	47-3	
第25図33	S J 10	磨石	安山岩	[4.4]	[7.1]	[6.2]	143.3	47-3	
第25図34	S J 10	磨石	安山岩	4.2	2.9	2.8	20.3	47-3	
第25図35	S J 10	敲石	石英	3.5	5.0	2.4	42.1	47-3	
第25図36	S J 10	石皿	安山岩	8.1	3.1	4.3	135.3	47-3	
第27図22	S J 11	打製石斧	ホルンフェルス	[12.6]	[4.2]	[2.0]	88.0	49-2	
第27図23	S J 11	石鏸	黒曜石	2.1	[1.7]	0.4	0.8	49-1	
第27図24	S J 11	磨石	安山岩	4.5	4.5	2.6	71.3	49-2	
第27図25	S J 11	敲石	砂岩	[3.8]	[6.0]	[2.8]	52.2	49-2	
第29図21	S J 12	磨石	砂岩	4.5	4.6	2.7	66.6	49-2	
第29図22	S J 12	石皿	緑泥片岩	9.0	6.1	1.0	63.0	49-2	
第29図23	S J 12	石皿	閃緑岩	[17.2]	[6.6]	[9.4]	797.2	49-2	
第34図15	S J 18	打製石斧	ホルンフェルス	[5.9]	7.4	2.5	88.3	49-2	
第34図16	S J 18	敲石	緑色岩	9.0	4.3	2.0	96.9	49-2	

第70図322はスタンプ形石器である。

第70図323・324、第71図325・326は敲石である。端部に敲打痕が認められる。323は磨製石斧を敲石として再利用したと考えられる。

第71図327～329・331は磨石類である。327は方形状の器面4面すべてに、使用による凹みが認められる。328・331は器面に敲打による凹みが残されている。

330・332・333は石皿である。

グリッド出土石製品（第71図）

第71図334・335は石錐である。扁平な橢円形状の自然礫の中央に抉りを入れている。

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	図版	備考
第34図17	S J 18	磨石	砂岩	5.8	5.2	4.2	163.5	49-2	
第36図44	S J 20	石鏃	黒曜石	[1.8]	1.7	0.4	0.7	49-1	
第36図45	S J 20	打製石斧	ホルンフェルス	5.5	4.8	3.3	92.7	49-2	
第36図46	S J 20	石皿	安山岩	3.9	4.1	2.6	24.4	49-2	
第49図17	S K 5	磨製石斧	緑色岩	[8.9]	5.6	3.2	227.9	50-1	
第49図18	S K 5	磨石	貞岩	7.6	3.8	1.9	60.3	50-1	
第49図19	S K 5	磨石	砂岩	16.8	4.2	2.7	206.9	50-1	
第49図22	S K 8	磨製石斧	砂岩	[6.9]	5.2	3.7	156.8	50-1	
第49図23	S K 8	磨石	安山岩	3.3	5.0	2.4	35.8	50-1	
第49図24	S K 8	磨石	砂岩	12.2	5.9	4.1	355.4	50-1	
第50図1	S K 3	石棒	緑泥片岩	38.7	6.2	5.3	1931.8	49-3	
第50図2	S K 3	磨石	安山岩	13.1	7.5	6.4	802.9	49-3	
第51図20	S K 13	磨石	砂岩	3.7	4.8	3.0	56.3	50-2	
第51図34	S K 21	磨石	安山岩	4.2	4.4	3.9	77.4	50-2	
第52図12	S K 31	石皿	緑泥片岩	7.0	4.8	1.4	59.8	50-2	
第52図19	S K 32	磨石	砂岩	8.6	2.5	3.6	59.2	50-2	
第54図29	S K 50	磨石	安山岩	6.7	5.0	3.7	108.8	50-2	
第54図30	S K 50	磨石	砂岩	6.6	5.5	5.3	223.6	50-2	
第55図3	S K 51	磨石	砂岩	8.0	7.0	3.5	200.0	50-2	
第55図4	S K 51	磨石	砂岩	5.0	5.9	2.6	79.8	50-2	
第55図48	S K 68	垂飾	軽石	4.4	4.0	1.2	4.1	50-2	
第56図14	S K 60	磨石	貞岩	6.7	3.4	2.3	73.2	50-2	
第56図42	S K 77	磨製石斧	緑色岩	[10.8]	5.2	3.0	252.3	50-2	
第56図43	S K 77	磨石	砂岩	7.3	3.4	1.4	45.2	50-2	
第57図18	S K 76	磨石	砂岩	4.4	3.7	2.1	37.8	50-2	
第68図288	グリッド	石鏃	黒曜石	2.4	1.3	0.3	0.8	50-3	J-7
第68図289	グリッド	石鏃	チャート	1.7	1.2	0.4	0.6	50-3	SS 6
第68図290	グリッド	石鏃	チャート	1.5	[1.2)	0.4	0.4	50-3	SJ 5
第68図291	グリッド	石鏃	チャート	[2.1]	[2.3]	0.5	1.6	50-3	SJ 6
第68図292	グリッド	石錐	黒曜石	1.6	1.4	0.5	0.8	50-3	SS 6
第68図293	グリッド	スクレイパー	黒曜石	3.0	1.4	0.5	1.4	50-3	SS 6
第68図294	グリッド	スクレイパー	チャート	6.2	3.2	1.3	24.6	50-3	I-8
第68図295	グリッド	原石	黒曜石	4.6	2.3	2.5	28.4	50-3	SD 8
第68図296	グリッド	石核	黒曜石	1.8	2.6	2.5	9.5	50-3	SS 6
第68図297	グリッド	スクレイパー	黒曜石	[1.6]	[2.9]	[1.0]	3.9	50-3	SS 6
第69図298	グリッド	磨製石斧	緑色岩	[6.5]	3.4	[1.05]	32.4	51-1	
第69図299	グリッド	磨製石斧	トレモラ	[7.2]	[4.0]	2.5	87.0	51-1	
第69図300	グリッド	磨製石斧	トレモラ	[6.4]	[4.6]	[2.3]	97.3	51-1	
第69図301	グリッド	磨製石斧	砂岩	[5.6]	[5.2]	[3.1]	135.9	51-1	
第69図302	グリッド	磨製石斧	砂岩	[5.3]	4.3	2.3	91.4	51-1	
第69図303	グリッド	磨製石斧	緑色岩	[10.1]	4.7	2.4	193.7	51-1	
第69図304	グリッド	打製石斧	ホルンフェルス	9.7	7.8	4.2	321.4	51-1	
第69図305	グリッド	打製石斧	ホルンフェルス	5.5	3.1	1.1	21.6	51-1	
第69図306	グリッド	打製石斧	砂岩	5.4	4.2	2.3	60.4	51-1	
第69図307	グリッド	打製石斧	ホルンフェルス	8.1	5.2	1.5	71.2	51-1	
第69図308	グリッド	打製石斧	ホルンフェルス	9.4	5.2	3.0	162.1	51-1	
第69図309	グリッド	打製石斧	黒色安山岩	14.1	5.5	2.6	163.5	51-1	
第69図310	グリッド	打製石斧	ホルンフェルス	11.9	5.8	2.0	163.0	51-1	
第69図311	グリッド	打製石斧	ホルンフェルス	9.5	5.2	1.4	77.2	51-1	
第69図312	グリッド	打製石斧	ホルンフェルス	13.4	8.0	1.7	157.3	51-1	
第70図313	グリッド	打製石斧	ホルンフェルス	9.1	6.1	2.1	120.6	51-2	
第70図314	グリッド	打製石斧	ホルンフェルス	9.0	5.4	2.0	106.5	51-2	
第70図315	グリッド	打製石斧	ホルンフェルス	8.1	3.9	1.9	72.3	51-2	
第70図316	グリッド	礫器	ホルンフェルス	[9.0]	5.4	5.7	380.2	51-2	
第70図317	グリッド	礫器	黒色貞岩	[9.7]	3.6	2.0	107.1	51-2	
第70図318	グリッド	礫器	ホルンフェルス	5.7	7.6	4.4	263.6	51-2	
第70図319	グリッド	礫器	ホルンフェルス	6.2	6.2	2.7	144.3	51-2	
第70図320	グリッド	礫器	ホルンフェルス	7.3	8.5	3.7	287.7	51-2	
第70図321	グリッド	礫器	黒色貞岩	7.6	8.5	2.3	176.7	51-2	
第70図322	グリッド	スタンプ型石器	砂岩	[11.7]	[6.5]	4.3	449.4	51-2	SK66
第70図323	グリッド	磨製石斧	トレモラ	[12.1]	5.0	2.9	318.1	51-2	
第70図324	グリッド	敲石	緑色岩	14.4	4.5	4.2	443.9	51-2	
第71図325	グリッド	磨石	黒色貞岩	7.1	2.1	1.9	46.5	51-3	
第71図326	グリッド	敲石	砂岩	[11.4]	3.3	2.5	147.2	51-3	
第71図327	グリッド	凹石	安山岩	[10.3]	5.4	3.8	329.9	51-3	
第71図328	グリッド	磨石	安山岩	8.0	5.7	3.5	216.3	51-3	
第71図329	グリッド	磨石	安山岩	8.0	6.2	3.1	196.3	51-3	
第71図330	グリッド	石皿	安山岩	12.4	9.0	5.4	718.4	51-3	
第71図331	グリッド	磨石	黒色貞岩	4.9	4.9	4.3	161.8	51-3	
第71図332	グリッド	石皿	安山岩	8.1	7.0	4.1	251.3	51-3	
第71図333	グリッド	石皿	安山岩	15.0	17.4	8.6	1999.4	51-3	
第71図334	グリッド	石錐	砂岩	9.2	5.8	1.1	82.5	51-3	
第71図335	グリッド	石錐	砂岩	12.8	5.4	2.6	195.0	51-3	